

緋弾のアリア～傭兵か らの転生者～

SAMタイム

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「女の子が空から降ってくると思うか？」

それは特別なことが起こる、プロローグ。」

この俺、遠山金次と、

「あなたの望みは何ですか？」

……………自由に生きたい」

その友達にして転生者の主人公。

「あんた、私の奴隷になりなさい！」
神崎・H・アリアの物語だ。

目次

第一弾	プロローグ	1
武偵殺し		
第二弾	出会い	7
第三弾	奴隸	13
第四弾	前世	18
第五弾	戦姉妹	26
第六弾	実力	36
第七弾	銃弾	42
第八弾	武偵殺し	49
魔剣		
第九弾	ボディーガード	56
第十弾	警護	61
第十一弾	異変	66
第十二弾	双華	72
第十三弾	恋人	78
第十四弾	花火	89
第十五弾	魔剣	95
吸血鬼		
第十六弾	泥棒	102
第十七弾	潜入	109
第十八弾	銀狼	119
第十九弾	紅鳴館	126
第二十弾	作戦	131
第二十一弾	気配	137

第三十二弾	京都&大阪	221
第三十一弾	武偵弾	215
第三十弾	ココ	209
修学旅行I		
第二十九弾	序曲の終止線	203
第二十八弾	白銀の弾丸	192
第二十七弾	戦闘不能	188
第二十六弾	シャーロック	183
第二十五弾	偽物	168
第二十四弾	不可視の銃弾	161
第二十三弾	ブラド	155
第二十二弾	正体	146

イ・ウー

第四十二弾	開戦	286
第四十一弾	Far East	278
第四十弾	前戯	274
第三十九弾	Next	268
第三十八弾	極東戦役	263
第三十七弾	Bascaケーブル	254
第三十六弾	守る	248
第三十五弾	能力	242
第三十四弾	蕾姫	232
第三十三弾	大陸の姫君	227
第三十二弾	民宿	227

第四十三弾	無風結界	293
第四十四弾	鬼払結界	298
第四十五弾	変装食堂	303
第四十六弾	準備	310
V S 竜悴公姫&文化祭		
第四十七弾	襲撃	314
第四十八弾	ワトソン	319
第四十九弾	変わったこと	324
第五十弾	スカイツリー	328
第五十一弾	毒	332
第五十二弾	灯台もと暗し	338
第五十三弾	その後	345
第五十四弾	文化祭	349

第五十五弾	武偵鍋	353
V S ジーサードと過去との因縁		
第五十六弾	ジーフォース	359
第五十七弾	赤井霧青	365
第五十八弾	時	370
第五十九弾	殺す為の力	374
第六十弾	親友の死	382
第六十一弾	赤霧の死	387
第六十二弾	果たし状	395
第六十三弾	決着と別れ	399
第六十四弾	潜入捜査	409

第一弾 プロローグ

目を開けるとそこは白の世界。

何の音も聞こえず、何の匂いもしない。

元々、俺がいた場所ではないことは分かる。

「……………どこだ、……」

そう周りを見渡しながら手を握ったり飛び跳ねたりしてみる。

……………ん？

「あれ、目が見える。確か目は見えなかったのに」

そう、俺は地雷の爆発で石が目当たり、目が潰れて見えなくなっていた。

「気づきましたか？」

ふと、聞こえた声。

俺はその声が聞こえた方を見る。

見ると、一人の女が不自然に笑っていた。

そう感じたのでとりあえず。

「その不自然な笑顔はなんだ？」

俺がそう言うのと固まった。

「な、なに言ってるのかな!?! 私は自然に笑えてたでしょ!?!」

「いや、そんなこと言ってる時点で不自然だと思いが? やっぱり嘘笑いだったか」

女はあたふたしていたが、はっ、っとして、

「おっほん」

何かを仕切り直していた。

「それで? ここはどこだ?」

「そ、そうね。ここは死後の世界よ」

女は調子を取り戻し答えた。

「何故俺はここににいる?」

「あなたの人生を見たけど不幸だったわね。普通の家庭に生まれたのに、拉致されて、さらに傭兵として働かされて殺されたわ。……まあ、私のせいなんだけど」

……………は?」

「この女、とてつもないことを言い出したぞ。」

「おいこら」

「ん? 何?」

「お前のせいだってどういうことだ?」

「……………な、なんのことかな?」

「とぼけるな。今自分で言ったろ。私のせいなんだけどって」

俺がそう言うのと冷や汗を流していた。

「……………」

「おい、どういうことか説明してもらおうか」

俺が問い詰めると、恐る恐る口を開いた。

「……………わ、私はこの世界でいろんな世界を見る役目を負っているわ」

「それで?」

「……………そ、れで、暇だからペラペラと大体人の人生が書かれている本をめくっていて」

「それで?」

「え、ええつと、「それで!」ごめんなさい!!あなたのページが破れてなくなっただから無

理やり違うことを書き直しました!!」

「……………」

「だ、だって、人の人生を破ったって言ったら怒られるんだもん。だから、ちよちよいつと、書き直し、て……………」

女は声がだんだん小さくなっている。

ははは、そうかそうか。

「つまり?」

「つ、つまり」

「お前のせいか!!」

俺は思いっきり駆け寄って頭を握りしめた。

「ぎゃあああ!痛い痛い!ご、ごめんってば!!痛い痛い痛い!!」

「俺がそのせいでどんな目にあつたと思ってる!？」

「ごめんごめんごめん!!ちゃんと、ちゃんと転生させるから!!」

その言葉を聞き、手を離れた。

「転生?」

「痛たた。そ、そう。違う世界に生まれ変わるのよ!」

「は?」

「ほら、私のせいで、人生終わったも同然じゃない?」

「そうだな、お前のせいで」

俺がそう口を挟むと狼狽えながら、

「…お、怒らないですよ。ち、ちゃんと生き返らせるって言うてるんだから」

「ほう?」

「あなたには『緋弾のアリア』というアニメの世界に転生してもらうわ」

「『緋弾のアリア』?」

「そう。あなたは知らないかもしれないけどね。まあ、その世界は多少なりとも前の世界よりは争いは少ないわ」

「……………そうか」

その言葉を聞いて、少し安心した。

生き返る世界でも戦争なんかさせられたら面倒だからな。

「それで、特典はどうする?」

「特典?」

「そう、あなただけの特別な力を手に入れられるのよ。何がいい?」

「別にいらん」

「ええ!?! 本当にいいの?」

「転生させてもらえるだけでまだマシだからな」

「むう、それじゃあ私のプライドが許さないわ!……………そうだ、それじゃああなたは どうやって生きていたい?」

「あ? 生き方か?」

「そうよ」

「そうだな、……………風、かな」

「風？」

「そう。風のように自由に生きていたい」

「……………そう。分かった。それじゃああなたは今から転生します。ああ、最初からだからね。生まれる時から」

「……………まじかよ」

「マジよ。さ、その扉から行けるわ」

「……………そうか、じゃあな」

俺は突如現れた、扉に向けて歩き出した。

「……………ふふっ。少し面白くしてやろうかしら」

そう、後ろから聞こえたような気がしたが、気のせいだと割り切つて扉をくぐつた。

武偵殺し

第二弾 出合い

そして、俺の転生から16年の時がたった。

……飛ばし過ぎ？

そんなの気にすんな。

ご都合主義ってやつだ。

そう言えば、俺の名前は風切梓だ。

前の世界よりは少し裕福で、結構自由に生きている。

この世界には『武偵』と呼ばれる奴らがいる。

まあ、俺も武偵なんだがそもそも武偵とは武装探偵の略称だ。

小さいことでは猫探しや落し物探しなどで、大きいことでは武装グループの確保などだんだん危険が伴う物に変わっていく。

要は何でも屋だ。

依頼されてお金を貰って仕事をこなす。

まあ、世の中そんなもんだ。

高校2年になった春。

武偵高でも入学式はある。

実際は行かなくてもいいが、単位が不足している奴なんかは行っている。俺は大丈夫だが。

のんびりとコンビニでパンを買って歩きながら食べていると、

ものすごい勢いで近づいてくる自転車を見た。

それはとても見覚えのある顔だった。

「悪い！梓！退いてくれ！」

「おわっ！」

突然ものすごい勢いで来たのでギリギリで避けたのだが、

「ああっ！」

手に持っていたパンを落としてしまった。

……………あの野郎、許すまじ！

食べ物の恨みを思い知れ！

「ごんの野郎！待ちやがれえ！」

俺は足元に風を集めて飛び上がった。

空中を駆けながらさっきの野郎を追いかける。

と、ここで、俺の能力を言っておこう。

俺の、この世界では超能力、は一言で言えば『風』だ。

『風』であれば何でもできる。

鎌鼬を作ったり竜巻を起こしてみたり、今俺がやっているように体に纏ったり出来る。

これはあの死後の世界で俺が言った「風のように自由に生きていたい」と言ったからだそう。

なんか10歳の時に手紙で送られてきた。

その手紙は読んだら燃えたけど。

あとはもう一つ、これはあの死後の世界の女が勝手にしたものだ。

これは今関係ないので黙っておく。

そろそろ追いつくとビルからパラグライダーで緋色の髪の少女が飛び降りて、さっきの野郎を助け、爆風で吹っ飛んだ。

……ああ、あの自転車、爆弾が仕掛けてあったのか。

俺はその一部始終を見た後、空中から降りてあいつらが飛ばされた方向に走って行った。

その倉庫ではさっきの野郎を追いかけていた機械が並んでいたの、弾が勿体無いの

で手を銃の形にして風を集め、

「エアロバレット」

子供が銃を撃つかのようにして風を撃つ。

機械は俺の弾に当たり砕けた。

機械は全部で7つで、中の俺のパンを吹き飛ばした野郎も撃っていた。全部、壊したので風を解除する。

近づいて行くと何か揉めているのか怒鳴り声が聞こえてきた。後銃声。そして何か
が飛んできた。どちらかと言えば
投げ飛ばされていた。

「逃げられないわよ！あたしは犯人を逃したことは一度も！あ、あれ？ない！あれ、あれ
れ？」

あの野郎に続く形で出てきたツインテールの緋色の髪の少女は男に叫びながらス
カートの内側を両手でまさぐっている。

弾倉を探しているみたいだったが、弾倉はあの男が持っている。そいつは弾倉を投げ
た。勿体無い。

「もう、許さない！ひざまずいて泣いて謝っても、許さない！」

その後その少女は銃をホルスターに強引にしまい、怒ったまま

背中から刀を2本、抜いて構えた。

「強狼男は神妙にお縄に、つわつきやつ！」

男に突っ込んでいって足下に蒔かれた弾倉マガジンの中身の銃弾を踏んですつ転んだ。その男はその隙に走って俺の横を通っていく。

俺は、後で話がある、と目線で送って肩を落としながら走って行った。

置いてけぼりを食らった本人は

「この卑怯者！でつかい風穴……開けてやるんだからあ！」
と叫んでいた。

俺はすつと今のうちに離れようとしたとき、

「ちよつとあんた、待ちなさい」

その少女に声をかけられた。

「……なんだ？」

「一部始終見てたわよね？」

「ああ、なんで怒ってるかは知らないけどな」

「あいつの名前は知ってる？」

「知ってるが、本人に聞け。じゃ、はっ、はっ、ハックション！」

立ち去る前にくしゃみをしてしまう。

……やば！

その刹那、体が変わる

「……………あんた誰？」

少女が言うのも当たり前。

さつきまでいた男が女に変わっていれば驚くだろう。

「じ、じゃあな！」

「ま、待ちなさい！」

私はその声を振り切って学校に向けて走り出した。

そう、あの死後の世界であつた女が俺に与えた力のもう一つ。

『くしゃみで性別が変わる』

そんな、T O L O V E るみたいな能力だ。

第三弾 奴隸

いつもよりハードな朝を終え、しつかり男に戻って机に突っ伏した。少し後ろを見ると同じようにさっきの男、遠山金次も突っ伏していた。

「どうした、お前ら。金次、星伽さんに何か言われたのか？」

「うるさい。今俺に女の話をするな……！」

横目で見ていたが、あのツインテール少女の前であれになったんだろうな。中学で色々あつたみたいだし。

そして、ホームルームが始まって、高天原先生たかまがはらが入ってくる。今日は転入生がいるぞうだ。

俺はなんとなく嫌な感じがしたので気配を消す。

入って来たのは、あのツインテール少女だった。

「先生、私あいつの隣り座りたい。」

そう金次を指差しながら言った。

「………どんまい。飯は奢らせるけど。」

「よ、良かったなキンジ！なんか知らんがお前にも春が来たみたいだぞ！先生！俺、転校

生さんと席変わりますよ！」

武藤が手を上げた。

武藤が手を上げた。

「あらあら、最近の女子高生は積極的ねえ。じゃあ武藤君、席変わってあげて」

そしてアリアはキンジに歩み寄ると、

「キンジ、これ。さっきのベルト」

そう言つてアリアはキンジにベルトを渡した。

……俺が来る前なによつてたんだよ。

「理子分かつた！分かつちやつた！……これ、フラグばつきばきに立つてるよ！」

金次の左隣に座つてた：峰 理子が立ち上がる。

「キーくん、ベルトしてない！そしてそのベルトをツインテールさんが持つてた？これ、

謎でしょ謎でしょ!?!でも理子には推理できた！できちやつた！」

峰理子はアホだが腐つても探偵科Aランクだ。

見るからに馬鹿だなーと思う。

「キーくんは彼女の前でベルトを取るような何らかの行為をした！そして彼女の部屋にベルトを忘れてきた！つまり2人は――熱い熱い、恋愛の真っ最中なんだよ！」

……全然違う。やっぱり馬鹿だったか。

それから他の奴らも盛り上がるな。

あ、ツインテール少女が銃を抜いた。

バンっ！バンっ！バンっ！

引き金を引いて数発撃ってみんなが静まる。

「れ、恋愛なんてくだらない！全員覚えておきなさい！そんな馬鹿なこと言うやつには
！」

風穴開けるわよ！」

そんなこんながあつて俺は部屋に帰ってきた。

俺の部屋、というか寮は普通は四人一部屋なんだが、

俺は金次との二人だ。

その寮でのんびりとテレビを見ていると、

ピンポーン

チャイムが鳴った。

俺は面倒なので居留守を使う。

ピポピポーン

金次を見るとなにやら考え事をしていた。

ピポピポピポピポピポピポ

と連打してきて、

「ああ、なんだよ！うるっせえな！」

金次が思考を中断して扉を開けると、

「なんだよ！」

「一回で開けなさいよ！」

朝のツインテール少女が入って来た。

そして金次の制止を無視してズカズカと入ってくる。

「あら、あんたもいたの」

「お、おい！神崎！「アリアでいいわよ」っ、んじやアリア、なんだよいきなり入って来て」

そして、窓の前で止まってこう言い放ちやがった。

「あんた達！私の奴隸になりなさい！」

第四弾 前世

「あんた達！私の奴隷になりなさい！」

入って来たのはツインテール少女で、いきなりそんなことを言い出した。

……なに言ってるんだ？こいつ、ああ、金次とそんな遊びしてたのか。俺まで巻き込むな。

俺はそう思ったので、

「断る」

そう言っただけで走って手すりに登った。

「ちよ、ちよつとあんた！なにを「危険な遊びは」

アリアの言葉を中断させて、

「奴隷ごっこは二人でやれ。じゃー！」

俺はそのまま飛び降りた。

アリアがなにやら叫んでいるが、生憎ワイヤーは俺の能力上必要ないので無視する。

地面まで10mぐらいになったので体勢を整えて足下に風を集めて踏みつけて少し浮き、風を調節して着地する。

俺は戻っても話が面倒なので少し時間を開けて戻ろうと、少しばかり歩き出した。

その後、のんびりと歩いている。前世では出来なかったことだから、こういう合間はこのんびりと過ごしたい。

そう思った矢先に、

「ちよ、放してください!」

そう聞こえて、その方向を見ると、武偵高の女子が三人絡まれていた。

……………どこにでもいるな、ああいう奴ら。

俺はその集団に近づいていき、その途中で、

「ハックション!」

くしゃみをしてしまい、女が変わってしまった。

……………背に腹は変えられない。

私はそのまま歩いて行って女の子の手を持っている奴の腕を掴む。

「ちよつと、放してあげなさい」

「ああ?なんだお前。」

「私はこの子達の先輩よ」

「あゝ。なに?もしかしてお姉さんが変わってくれちゃうの?」

「変わらないわ。これ以上この子達の邪魔をするなら実力行使で、追い払うわよ？」
「へへっ！出来るもんならやってみな！」

「そう？それじゃ！」

その言葉を聞いて私は拳を振り抜いた。

すかさずもう一人の男の腹に肘を入れ、裏拳で顔を殴って回し蹴りで蹴り飛ばす。

「い、このアマ！」

男達が殴りかかってくる。

その攻撃を避けるか受け流すかで防ぐ。

「あなた達は他のやつに襲われないように下がってて！」

その金髪の子！その二人を守って！」

「は、はい！」

と、安全喚起をして、もう面倒なので風を使おう。

「ふっ！」

掌底を腹に入れ二段蹴りで蹴って、殴ってきた奴の下に潜り込んで腹に拳を入れ、アッパーで吹き飛ばす。

最後の一人は腹に一発入れ、顔を蹴り上げ、踵落として決める。

「と、止まれ！」

「ん？」

その方向を見ると、さっきの女の子一人が捕まっていた。

「あつちやくまだいたか。」

「くそ、あかり！」

「うう、ライカあ」

「ウルセエ！こいつぶつ殺すぞ！」

と、あかりと呼ばれた女の子の首にナイフを突きつける。

………はあ、大つびらに使いたくなかったけど仕方ない。

「あゝ、その男、3秒以内にその子から離れなさい。」

腕無くなるわよ。はい、3」

「は？なに言ってるんだお前「2」その距離から切れるわけねえだろ！「1」やれるもんな

らやって見やがれ！」

「はい、0」

その瞬間、私は足を叩きつける。

そして、あの子の髪が切れない程度に筒状に、真空波を発生させる。

「ぐわあああ！」

その男はその真空波で腕が切れた。

「あくあ、だから言ったのに。さっ、そこの子達、行くよ」

「「は、はい」」

そうして、その場から離れた。

私達は少しばかり歩いて、周りを確認してため息をつく。

「あなた達、大丈夫だった？」

「は、はい。ありがとうございました。」

「いえいえ、あ、さっき見たのは忘れてね。それじゃ、気をつけて帰ってね」

「あ、あのー！」

「ん？なに？」

「お名前、聞いてもいいですか？」

その言葉を聞いた私は、内心焦った。

どうしよ、ここで風切梓です、なんて答えたらダメだし。

実際、こつちの名前は武偵高にはないし。

……………しようがないっか。

「私は風切亜里沙。そつちは茶髪ちゃんがあかりで

そつちの金髪の子がライカちゃん。かな？」

「そ、そうですけどなんで？」

「さつきあかりちゃんが捕まってた時につぶやいたでしょ？」

「あ、そう言えば、」

「ま、そつちの黒髪の子は分かんないけど。あ、そろそろ私は行くね、じゃ！」

私はそのまま走り去った。

何かと聞かれるのは厄介だし。

「ハックション！」

あ、男に戻った。

はあ、やれやれ。面倒なことになりそうだ。

と、俺は考えながら寮に戻る途中で、携帯がなった。

「もしもし」

「君が風切梓君かね？」

「あ？誰だお前」

「私の名は明かせないが、そうだな“H”とでも呼んで貰おうか」

「それで？Hさんよ何か依頼か？」

「ああ、元傭兵の君に頼みたい事があってね」

「……………何故それを知っている。」

実際、俺は誰にも言っていない。

言っても嘘だとか言われたいし、言っても意味がない。

「推理したのさ」

「推理？」

「そう、近い内にこの世界にいるはずのない人間が生まれるかもと推理したまでさ。私は推理に推理を重ねることによって恐らくの未来が見える。私は「条理予知^{コグニチス}」と呼んでいるがね。君は元の世界では拉致されて無理矢理傭兵にされたはず。その戦争で君は有名だったよ。君は狙撃手として参加したのにも関わらず、狙撃銃を背負って前線に加わり、近接戦と遠距離戦を自在に戦った。そして目を潰されたのにも関わらず、一線を退くことなく戦った。近くに居ても遠くにいても死に追いやる。そしてついた異名が「冥府の死神」だったかな？赤霧碧君？」

「ほう？俺の前世を知っているとはな。流石ホームズ。」

「……………何故そう思うのかね？」

「そうだな。まず一つ、俺の前世を知っている。俺の前世はあんたの名前は普通に聞いたしな。二つ目、あんたは推理と言った。誰かから聞いたとか言えば良かったのにな。ま、そんなところだ。」

「ほう。なかなかいい推理だ。名前は伏せるとして依頼は、あの子を見ていて欲しいんだ。」

「アリア、か？」

「そう。あの子は推理力がないばかりに、欠陥品、と言われていてね。あの子のことを信じてあげて欲しいのさ。」

「流石のホームズも親バカか」

「ふふっ。それじゃ頼んだよ。お金は振り込んでおくから。」

「ちよ！まって、切られた。ま、良いか」

そんな話をして寮にかえった。

第五弾 戦姉妹

そして次の朝、何故かいるアリアをほつといて朝ごはんを食べる。俺はバスには乗らない主義なので歩いていくために朝は早い。時間に縛られず自由にのんびりと歩くのが一番いい。とりあえずあいっらにご飯を用意してやって、

俺の愛銃のグロック17とベレッタM9を装備して、胸元にソードブレイカーを装備して出る。

授業は滞りなく進んで、昼休み。金次がアリアと一緒に寮を出た、とか言つて金次を追いかけて行つた。

そして、何故か俺まで追われる羽目になった。

………何だよ。

そして逃げてきて屋上。

追いかけてきた奴はいなかつたので一安心。

ふと、気配を感じてその方向を見ると、一人の少女がいた。

「レキ」

その少女はレキ。

ロボットレキなんて呼ばれているほど、無表情だ。

「隣、座っていいか？」

そう聞くとコクンと頷いたので、隣に座って弁当を開ける。

「そういえばレキ。お前昼飯は？」

と言うと箱を見せてきた。

「カロリーメイト？」

レキはコクンと頷く。

「……………これはダメだろ。」

「ほれ、これやるよ」

俺は二段弁当の片方を渡した。

レキはフルフルと首を振っていた。

「いいから。ほら」

俺は手をとって渡した。

レキは無言だったが、

「ありがとうございます」

そう呟いた。

俺は少し笑って食べ始める。

ふと、俺はいつも疑問に思ったことを聞いてみる。

「そういえばレキ、いつも何聴いてるんだ？」

「風を」

「風？」

「はい」

「ふうん。そっか」

俺は手を前に出して風を起こしてみる。

何か聞こえるのか、と。

俺が手を前に出したのを不思議そうに見ている、風を起こした瞬間、少し驚いたように見えた。

「それは？」

「ん？ああ、俺の超能力さ。あ、これは誰にも言うなよ？無理矢理、SSRに入れられかねないからな。」

「風が」

「ん？」

「風がどんなものか聞いています。」

「どんなもの？うーん、単純に風を操る力だな。自身で風を起こすことも出来るし、大

気中の風を操る事が出来る。小さな風を起こすこともできるし、サイクロン見たいな竜巻を起こすことも出来る。そんなもんかな。あ、もうそろそろ授業始まるから帰るわじゃな」

そうして、昼休みも終わり、授業だ。

この武偵高には様々な科がある。

強襲科、狙撃科、探偵科、諜報科、救護科、尋問科、鑑識科、装備科、車輛科、通信科、情報科、衛生科、超能力捜査研究科、特殊捜査研究科、など様々な物がある。

俺はその中の強襲科、狙撃科、探偵科、諜報科の授業を受けている。

武偵ランクは左から、S、S、A、Bといった具合だ。

この授業中は授業を受ける代わりにクエストと言って、他の人の依頼を受けることも可能だ。その難しさによって貰える金額も変わるので、金がよく減る奴は毎回のようになっている。

俺は狙撃科で授業を受ける。

そこまで金が必要ってわけじゃないからな。

授業が終わり、寮へ帰る。

その途中、

「あのー！」

声をかけられた。

その方向を見ると、先日助けた子が来ていた。

「なんだ？」

「あの、風切梓先輩、ですよね？あたし、火野ライカって言います！」

「ああ、うん。で？俺に何か用か？」

「あの、風切亜里沙先輩、ご存知ですよね？あの人に戦姉妹になって欲しいんですけど、どこにいるか知ってますか？」

俺はその言葉を聞いて溜め息をついた。

……………先輩って言わなかった方が良かった。

「それは俺の苗字が風切だから知ってると思っただのか？」

「はい。苗字からして双子か何かですよね？」

「えー、あー、うん。仕方ない。で、戦姉妹アミカになりたいんだっけ？」

「はい！」

「それじゃ、かかって来て。」

「は？いや、あんたじゃなくて亜里沙先輩に」

「だから、今はあいつはいないんだ。俺がテストして報告するから」

ま、俺が亜里沙なんだけどな。

今は言わないけど。

「わ、分かりました。」

「えつと、ルール確認だけど。君は銃でもナイフでも使つていいから。締め技もありだし、サブミッション関節技も有りでいい。俺は何も使わない。」

「……………な、舐めてんすか？」

「いや、俺はこれでもSランク武偵だからな。一年のAランク如きには負けないさ」

「言つてくれますね」

「それじゃ、強襲科に行こうか」

「はい」

……………めっちゃキレてる。

挑発し過ぎたか？

「さて、勝敗は君の気絶、またはギブアップ。俺は、君の力を認めるか、気絶させられるか、ギブアップで。いいね？」

「うすー」

そう聞いて、ライカは構えをとる。
対して俺は構えなしだ。

「それじゃ何時でもいいよ」

「……………構えなくていいんすか？」

「大丈夫だからかかって来な」

「それじゃ遠慮なく！」

そう言つて踏み込んで上段突きで殴ってくる。それを普通に受け止める。そして蹴つて来たので掴んだ手を下にやり、防ぐ。

俺はパツと手を離し、顎に掌底を打つ振りをして、逆の足を払う。

「おわっ！」

ライカが転けたのを見て後ろに下がる。

俺は手をくいつくいつとやって挑発する。

「こんにゃろ！」

ライカは突きと蹴りを織り交ぜて来るが、俺はそれを全て払う。カウンターとして殴つて来たのを受け流し、後ろに回つてバックドロップをかました。

「がはっ！」

俺は手を離して、その場から離れる。

「どうした？もう終わりか？」

「！、っ、まだまだあ！」

「その意気やよし！その意気に免じて少し本気を出すとしよう。」

「なっ！」

「どうやら本気でやっていると思われていたようだ。」

「まだ、風使ってないしな。」

「行くぞ！」

俺はすつと後ろに回り込んで膝カックンをして、座らせる。

その瞬間裏拳を放って来たので受け止めて、背中を蹴って肩を決める。そして、ギブアップの印にタツプをしたので放す。

「はあ、はあ、くそ！」

「よく頑張った。合格だ。」

「えっ？な、なんで、負けた、のに」

「お前、俺が言ったテストの勝利条件はなんだった？」

「……………気絶またはギブアップ。」

「それだけじゃない。俺が認めたら

と言った。だから合格だ」

「つしや！つてあたしは亜里沙先輩につて」

「だから言っている。少し場所を変えるぞ」

俺はそのまま人目につかない場所に移動する。

「さて、亜里沙にだったな」

「はい」

「よく見ておけよ。」

俺はポケットから胡椒を取り出した。

「胡椒？」

ライカが頭の上にはてなを浮かべている。

胡椒をパツパツと振り、くしゃみをする。

「ハックシユン！」

すると、女に変わった。

ライカが戸惑いの声を上げている。

「えっ？あ、亜里沙先輩？」

「や。昨日ぶり」

「な、なんで」

「それは私と梓が同じだからだよ？」

「同じ?..」

「そう。私たちはくしゃみをする時と男と女が入れ替わる特殊体質なんだよ。」

「ええっ!？」

おお、驚いてる驚いてる。

そりや、求めた先輩がそんな訳の分からないやつじゃビックリするよね。

「ええつと、あ、そう。戦姉妹だっけ?それはいいけど、名前は梓で書いといてね」

「ど、どうしてです?」

「私という存在は武偵高には居ないのさ。私はあくまで風切梓だからね。二人在籍していたら困るでしょ?私が」

「そうっすか。じゃあ梓先輩で書いときます。」

「はい、よろしくね。あ、私のことは、というか梓の体質のことは他言無用だからね」

「はい、分かりました」

こうして私は戦姉妹を手に入れた。

寮に帰ると理子に調べさせていたのかアリアの情報を話していた。それで一度だけ強襲科に戻ることを決めていた。

第六弾 実力

さて、戦姉妹が出来て、金次が一度だけ強襲科に戻って来るとアリアに約束して次の日。

早速、強襲科に来ていた。

来た瞬間から「死ね」「死ね」言われている。

こいつらの挨拶見たいなもんなのだが、些か野蛮である。

俺はここまで毒されてはいない。

本当に死ぬと言う苦しみを知っているから。

「おい」

何か声をかけられた。

見覚えはないので一年だろう。

「あんたか？あの男女の戦兄妹てのは」

「ああ、そうだが？」

「ははっ！あんた、Sランクのくせに弱そうだな！あんたみたいなんでSランクになれるなら、俺でも楽勝だな！」

なんて言われた。

見たことない奴に言われても何も思わないんだが。

「お、おい。止めとけよ」

「はっ！こんな奴にびびってんのか!？」

………なんかもう面倒だ。

「えっと、蘭豹先生はどこだつと。いた」

蘭豹先生を見つけて走って行く。

「蘭豹先生」

「あ？なんや？風切」

「一年男子。全員借りても良いですか？」

「は？なんでや？」

「ああ、舐められてるからですね。「あんたみたいなんでSランクなら俺でも楽勝だな」って言われたので実力差を見せつけてやろうかと」

俺がそう言うのと蘭豹先生はニヤリと笑った。

「おっしや！一年男子全員！こいつと戦え！」

『は？』

おおっ、みんなハモった。

「な、なんで俺たちも」

「それはお前らがSランク言うもんを理解してへんからや」

「理解?」

「まあ、戦ってみろや!それじゃ始め!」

蘭豹先生はM500をぶつ放す。

俺は足に力を入れ、思いつき飛び出して全員の首に手刀を入れる。さつき舐めていたやつ以外を。

「は?」

さつきの奴は理解出来てないようだ。

まあ、自分以外倒れたらそうか。

「さて、そこのお前。」

「ひっ!」

そいつは尻餅をついて後ろに下がる。

俺は歩いてそいつのそばに行き、上から見下ろす。

「これが実力の差だ。ま、俺ほどの規格外もそこまでいないだろうがな。それと……」

舐めるなよ?」

俺は全力の殺気を放つ。

さっきの奴はブルブル震えている。

「Sランクになるような奴らは努力しているんだ。そのランクに見合うようにな。お前みたいに何の努力もしていない野郎が粹がるな」

俺が顔を近づけていくと気絶した。

……………ああ、やつちやつたな。

「すみません、蘭豹先生。やり過ぎましたか？」

「いや、ちょうどええ薬になったやろ」

「そうですか。それでは失礼します。」

俺は頭を下げてその場を離れた。

「……………凄かったのね。あんた」

そこから出ると、アリアがそんなことを言ってきた。

「俺がか？ あんなもん誰でも出来るだろ」

「出来ないから言ってるのよ。」

「じゃ、俺は先に寮に帰ってるぞ。」

「うん。あたしは金次を待っておくわ」

そう言つて手を振つて別れた。

あ、そうだ。最近ヘカートの手入れしてないな。取つてきて寮で整備するか。

俺は狙撃科に俺のスナイパーライフルのヘカートIIを取りに行く。

俺の狙撃銃は対物ライフル

アンチマテリアルライフル

と呼ばれるもので、人間に撃つのを禁止されている狙撃銃だ。

正式名称はウルティマラティオ・ヘカートIIと言う。ヘカートとはギリシヤ神話に出てくる女神ヘカテーを指しているそうだ。俺のはそこまで威力が出ないように少し弄つて貰つていて、当たつても滅多なところに当たらない限り死にはしないが。

なかなか銃検がキツかった。

ちなみに俺が前世で使つていた銃でもある。

寮に帰つてヘカートの整備をして、ぼーつとしていると、金次とアリアが帰つて来て、ゲームセンターで取つてきたであろうものを一緒につけていた。

次の日、いつも通り、登校しているとアリアから電話がかかってきた。

『風切、あんた今どこにいるの!?!』

「何処って普通に登校しているが？」

そう普通に返すと、結構驚くべき事が起きていた。

『緊急事態よ！今すぐ女子寮の屋上に来て！』

『武偵殺し』にバスがジャックされたわ！』

第七弾 銃弾

俺はアリアに電話を貰ってすぐ、女子寮の屋上に上った。

「アリアー！」

「遅いわよ！風切ー！」

「風でブーストしたのに……」

風まで使ってきたのに怒られた。

……………解せぬ。

「元Sランク武偵を含めて四人、まあ、こんだけ集まれば上出来ね。」

「今から助けに行くわよ。あたしと金次はバスに向かって、風切とレキは狙撃ね。」

「「おう（はい）」」

「あ、その前に金次。ちよつとこい」

そう言っつて金次を呼び出す。

「なんだよ」

「お前、普通モードでやる気だろ？」

「……………ああ、そうだが？」

「お前にならせてやる。」

「は!? 何でだよ! 俺があれを使いたくないのを知ってるだろ!？」

「ああ、知っている。だが、本気でやると言った以上、お前の本当の本気を見せてやってもいいんじゃないか? 失礼だろ? お前には力がある。その力を隠して、偽りの本気でやって。ま、強制的にやらせるけどな」

「は?。」

「ハックシユン!」

俺はくしゃみをして金次に抱きついた。

「諦めなよ。金次には力がある。その本気でなおアリアから離れたいならその実力さえ偽ればいい。」

私は離れて笑ってやる。

「最初に言ったでしよ? 金次には金次にしか出来ないことがある。他の誰でもない。金次だから出来ることをしてあげてね」

「はは、悪い子だ」

金次の雰囲気が変わり、キザな態度になる。

「女の子にそこまで言われたらやらないわけには行かないな」

私はもう一度くしゃみをして男に戻る。

「ま、言ったのは俺だけだな。亜里沙では抱きついただけだからな」
「分かってるさ」

「……行くか」

「おう」

無理矢理、ヒステリアモードにした俺は、

レキと一緒にヘリに乗っていた。

ヘカートのレバーを引き、銃弾を装填する。

「レキ、視力は？」

「両目とも6.0です。」

「俺より1ずつ上か。なら、外回りに爆弾があるかもしれないから外探してくれ。」
「分かりました」

俺はアリア達がバスに乗り込んだのをスコープ越しに見ていた。

……危なっかしい。

その近くを通る車が一体。

その車を見ると、

「UZI、だとー！」

車にUZIが搭載されていた。

俺はすぐさまアリア達に知らせる。

「アリア。外に車が一台。それにはあの時のUZIが載っている。気をつけろ」
「了解よ」

無線を切つてじつと車をヘカートで追っていく。

「ありました。」

レキが知らせてくる。

俺はスコープから目を離し、レキの方に向く。

「何処だった？」

「バスの下です」

「アリア、バスの下だ」

アリアに爆弾の在り処を教える。

「レキ、橋に差し掛かったら爆弾を撃て。出来るか？」

「はい。」

「よし、それじゃ、頼む。」

俺たちは寝転がってスコープを、覗く。

爆弾を解除しようとしていたアリアだが、金次がバスの上に立っていたのを見て叫んでいた。

「レキ、狙うぞ。俺は車を、レキは爆弾だ。」

「はい」

俺はスコープを覗く。

横からレキの狙撃する時の言葉を眩く。

『私は一発の銃弾。銃弾は心を持たない。故に、何も考えない。ただ目標に向かって飛んでいくだけ。』

「俺は銃だ。遠くてもなお対象を沈黙させる。何事にも束縛されない。赤霧の名の下に。その力を持って敵を穿て。」

レキは爆弾を。俺は銃を、それぞれ撃ち抜いた。

「対象の沈黙を確認。お疲れ、レキ」

俺はレキに声をかけるが何も答えずじつと何処かを見つめる。俺もその方向を見つめる。

「あれは……………」

遠くに何かが見えた。

空を飛んでこちらに近づいてくる。

そしてプロペラが回る音が聞こえた。

「軍用ヘリか！まずい！車輛科のやつ！早く離れる！」

こちらが撤退するまでにガトリング砲を撃ってきた。

「レキ！」

俺は咄嗟に風でヘリを覆ってレキを庇う。

しかし、その風の壁を突き破って俺に当たる。

「ぐわああ！くっ！」

ドスドスと何か刺さるように俺の体を貫いていく。

俺が胸からグロックを抜いて一発、発砲する。

キンツと当たって向こうのヘリが少し離れていく。

「くっ！イテテ、大、丈夫か？レキ」

「はい。風切さんが庇ってくれたので大丈夫です。」

「そうか、ごぼっ！」

俺はレキにかからないように血を吐く。

「大丈夫か!？」

車輛科のやつが心配してくれたが俺は手を振って大丈夫と示す。

「ごぼっ！ごぼっ！あの野郎。容赦、なく、撃ちやがって。ぶっ壊す！」

俺は風を纏って飛び出す。

風を足で蹴って浮かび上がり、風を足元に集めて、

「パイルトルネード！」

踵落として下に蹴り落とす。

足の下に竜巻が起こり、ヘリがバラバラになって碎け散った。

俺はそれを見ながらヘリに戻ろうとするが、

「がはっ！」

途中で血を吐いて、徐々に意識を失っていった。

第八弾 武偵殺し

「……………知らない天井だ。」

俺はそう眩いた。

……………そう言えば気絶したんだっけ。

「目が覚めましたか？」

そう声をかけられて、見るとレキがいた。

「……………今は何日だ？」

「風切さんが倒れてから三日です。」

三日、か。

……………起きるのが早すぎる。

もう一回昏倒するな。

その前に、

「レキ、アリアと金次どうしてる？」

「金次さんはわかりませんが、アリアさんはイギリスに帰ると」

「そうか……………」

俺は思考する。

こう言う犯罪のパターンはだんだん大きくなっていくことだ。と言うわけで、

「レキ、金次に電話か何かで知らせてくれ。」

「何と?」

「恐らくアリアが乗っている飛行機に『武偵殺し』が来る。」

「……………分かりました」

「あ、そうだ。レキ、胡椒を買うか俺の寮から持ってきてくれ」

「……………?分かりました」

俺の勘では『武偵殺し』はあいつだからな。

そして、俺の予想どおりアリアの乗った飛行機がジャックされた。

「レキ、行くぞ」

「……………どちらへ?」

「空き地島だ。恐らく、緊急着陸するならここしかないからな。レキ、胡椒取ってくれ。」

それと今から見るものは他言無用だ。」

「……………?はい」

俺はレキから胡椒を受け取り空中にまぶす。

「ハックシユーン！」

くしやみをして入れ替わった。

入れ替わると心なしか驚いているように見える。

「さて、積もる話は抜きにして、行こうか。その前に要請があればそっちに行つていいからね」

「……………分かりました」

私はそのまま、病院を出た。

台風のような雨の中、私は傘も差さずに立っている。

風で周りを囲っているから雨には当たらない。

すると、レキからもらったトランシーバーから情報が流れてくる。

空き地島に着陸したいが、周りが暗くて見えないそうだ。

まあ、それを聞いても風しか起こせないのどうすることも出来ないのだが。端っこぐらい見せれるか……………。

そう思い立った私は風を縦に送っていく。

徐々に風に回転をつけながら、作っていく。

だんだんと風が強くなって集まってくる。

それはさながら、竜巻。

空へ届き得るほど縦に伸びて荒々しく風を巻き起こしている。

『おい！金次！気をつけろ！なんか可愛い女の子が竜巻起こしてる！恐らく超偵だ！』

と、確か車輛科の武藤が言っている。

……確かに起こしてるけども。

『あー、武藤？その子は頭にバンダナしてないか？』

『よく見えねえけど多分してる』

『……その子は俺の知り合いだ』

『はあ!?マジかよ！何でお前ばかり！後で紹介しろよ!』

『……それは了解しかねるな。まあ、後で聞く。亜里沙、聞こえてるか?』

「聞こえてるよ。金次。」

『其処が斜めの端か?』

「そうだよ。梓は耐えられないから私がやっているよ。ここまでの道を示そうか?」

『いや、出来るならそのあたりの天候をどうにかしてくれ』

「……なかなか疲れること言うね。分かった。機体が揺れるのは了承してよ?」

『分かってるよ』

金次の了解を得て、私は風を広げる。

だんだんと広げていき、私の能力範囲の最大まで広げる。

空は私が風を広げた範囲がぼっかりと穴が空いている。

「金次、広げたよ。後は頑張つてね」

『ああ、ありがとう。亜里沙』

私はそう言つて風を読みながらじっと待つ。

と言うのも暇なので濡れているコンクリートを風で払つたりしておく。

遠くにだんだんと飛行機が見えてきた。

私は風の壁を形成していく。

少しでも勢いを殺せるように分厚く、しかし低反発枕のように柔らかく。

まあ、其処まで柔らかくとかは出来ないが。

そうして飛行機が突っ込んできて、風のお陰もあつてギリギリではあつたがしっかり

止まった。

私は一安心して、病院に戻っていく。

私は、と言いか梓は重傷だから。

そして翌日。

しつかりくしゃみをして元に戻っていた俺はベッドの上で暇を持て余していた。

外出は今の所禁止。屋上ぐらいには登ってもいいそうだが、飛行機を止めるためとは言え病院を抜け出したから当然の処置だろう。

其処に金次とアリアがきた。

何やら疲れ切っているが。

「どうした？」

「いや……白雪が暴走してな。逃げてきたついでにお前のお見舞いに来たんだ」

「暴走した理由はアリアか？」

「まあ、ぶっちゃけそうさ。そう言えばレキから聞いたんだが、何故『武偵殺し』がハイジャックすると？」

「今までの事件から何かをすることが分かっていたからな。あいつなら派手にやると思ったからな」

「……………あんたは『武偵殺し』が誰か知ってるの？」

「ああ。と言つても予想だが、理子だろ？」

「……………」

「その沈黙は是と取るからな。理子はとても大きなミスをしてくれたからな」

「ミス？」

「金次の時計を壊したことだ。其処でほとんどの犯人が特定できた。」

「風切さん。診察ですよ」

そこまで言って診察の番が回ってきた。

「それじゃ、俺は行くぞ」

「ああ（ええ）」

そうして車椅子で出て行こうとする俺にアリアがこう言ってきた。

「風切。ここで、もう一度言いわ。あんた、あたしの奴隷になりなさい！」

………またか。でも俺の答えは一つ。

「断る」

魔劍

第九弾

ボディーガード

さて、『武偵殺し』の件も終わり、アドシールドがもう近々ある。

まあ、俺は多分出られないけど。

身体中撃たれていたもので、もちろん、足にも当たっていて今は車椅子で過ごしている。気合を入れれば立てないこともないが痛いのでやらない。

そんな中俺は教務科に呼び出しをくらっていた。

こんな車椅子なのに呼ぶなよ。

階段登るのしんどいんだから。

「しつっれーしまーす」

扉を蹴って開けて中に入る。

そこには、

「あれ？風切君？」

白雪がいた。

大和撫子ーな少女なのだが金次のこととなると、過剰になる。前も俺が亜里沙になっ

てしまった時に運悪く鉢合わせしてしまい、暴走していた。俺と金次はこの暴走状態を黒雪と呼んでいる。

「おー来たかあ、風切い。じゃあー早速、やっていくかあ」

そんなぐだあつと喋るのが尋問科の綴先生だ。

この人に掛ければどんな犯罪者でも口を割ると言われているほどだ。

「星伽いー、最近……急うーに成績落ちてるよなあー？」

ほう、この白雪が、ねえ。

この武偵高のトップで生徒会長もしている白雪が。

「まあ……勉強はあーどーでもいいんだけどお。」

いいんかい。

「えーつと、あれ、あ、変化。変化はあー気になるんだよねえ。」

本当にだるそうに話すよな。

「ねえー、単刀直入に聞くんげどさあ。星伽、ひよつとしてえ、あいつにコンタクトされた

かあ？」

「『魔剣』、ですか？」

『魔剣』とそう聞こえた時ガタツと音が微かに聞こえた。

……上から。

まさかあいつら……………」

「それはありません。と言いますか……………」もし本当にいるなら

私なんかよりもつと凄^い人を狙^うでしょう。」

「星伽いー。もつと自分に自信持ちなよお。アンタは武偵^ち高の秘蔵^つこなんだぞー？そこにいる、風切は別としてえ。」

……………」今只ならぬことが聞こえたような。

「星伽いー何度も言ってるけどボディガードつけろってば。諜報科^{レザド}も『魔劍^{デュランダル}』が狙^つているってレポートを出してる。超能力捜査研究科^Sだつて、似たような予言をしたんだろ？」

「でも……………」ボディガードは……………」その……………」

「にやによう」

「私は、幼なじみの子の、身の回りのお世話をしたくて……………」誰かがいつもそばにいと、その……………」

「星伽、教務科ウチらはアンタが心配なんだよお。もうすぐアドシアードだから、外部の人間もわんさか校内に入ってくる。その期間だけでも、誰か有能な武偵^を——ボディガードにつけな。これは命令だぞー」

「……………」でも、魔劍^{デュランダル}なんて、そもそも存在しない犯罪者で……………」

「これは命令だぞー。大事なことから、先生2度言いました。3度目はコワイぞー」
そう言いながらタバコの煙をふうーと吐き出した。

白雪の顔に当たり、白雪が咳き込む。

「けほっ、は、はい、分かりました」

その流れを聞いていた俺はふとした疑問をぶつける。

「それで、俺は何故呼ばれたんでしょう？白雪のボディーガードですか？」

「いやあ、お前も守ってもらおう側だ。」

……。

「……………、は？俺も、ですか？」

「そうだあ。お前は武偵^{うち}高^ちの最強だからなあ。弱ってる今はとても狙い時だろお？さらに、超能力も使えるならなおさらだなあ」

「……………俺は超能力は使えませんよ？」

「そうかあ？風切梓。16歳。グロツク17とベレッタM9の2丁拳銃。あと、ソードブレイカーのナイフを使ってるなあ。強襲科、狙撃科でランクS。探偵科はA、諜報科はB。超能力は風。」

出来るだけ隠してはいるがバレバレだぞお？超能力^S捜査^S研究科^Rでは、恐らく、ランクS。だなあ」

「あと、亜里沙、だったかあ？これに関してはあ、情報は少ないなあ。……これでも狙われないって言い切れるかあ？」

「……………」
どこまで調べてるんだよ。

風なんて人の前では使っていないのに。

でも、亜里沙の事がバレてなくて良かった。

バレたら面倒だからな。

「……………分かりました」

俺がそう答えると、がシャンと上の通気口が開いて、見覚えのあるやつらが降りてきた。

……………やっぱりお前らか。

「白雪のボディガード、あたしたちがやるわ！」
通気口から降り立って声高らかにそう宣言した。

第十弾 警護

「……そのボディーガード、あたしたちがやるわ!」

通気口からアリア達が出てきた。

金次は無理矢理連れられてきたっぽい。

「アリア!? キンちゃん!」

とつても白雪が驚いていた。

「んん? なにこれえ?」

綴先生がアリア達を覗き込んでみる。

「あく、なんだあ。こないだのハイジャックのパーティーじゃん」

すーつ、とタバコを一気に吸って、こき、こきと何か薄ら笑いを浮かべて、ナナメ上を見つつ首を鳴らしている。

「これは神崎・H・アリア——ガバメントの2丁拳銃に小太刀の二刀流。二つ名は『双剣双銃』。欧州で活躍したSランク武偵。でも——アンタの手柄、書類上ではみんなロンドン武偵局が自分らの業績にしちゃったみたいだね。協調性が無いせいだ。マヌケえ」

そう言いながら、アリアのツインテールの片方を引っ張っている。

……痛そうだな。

「い、イタイわよっ！それにアタシはマヌケじゃない。貴族は自分の手柄を自慢しない。たとえそれを人が自分の手柄だと吹聴していても、否定しないものなの！」

「へー。損なご身分だねえ。アタシは平民で良かった。そういえば欠点……そうそう、アンタ、およ……」

「わあ——！」

高い声だから、すっごい頭に響いてくるぞ。

耳痛い。

「こそ、それは弱点じゃないわ！浮き輪があれば大丈夫だもんっ！」

「アリア……自爆してるぞ？」

「——ッ！」

そうか、泳げないのかこいつ。

「んで、こちらは、遠山キンジくん」

「あー……俺は来たくなかったんですが、アリアコイツが勝手に……」

「——性格は非社交的。他人から距離を置く傾向あり」

……まさかこの人、全生徒のデータが頭の中に入ってるんじゃないだろうな？

俺の余計な情報も知ってたし。

それなら簡単な熟語ぐらい知っとけよ。

「——しかし、強襲科アサルトの生徒には遠山に一目置いている者も多く、潜在的には、ある種のカリスマ性を備えているものと思われる。解決事件は……たしか青海の猫探し、ANA600便のハイジャック……ねえ、何でアンタ、やることの大きい小さいが極端なのさ」

「俺に聞かないでください」

「武器は、違法改造のベレッタ・M92F。三点バーストどころかフルオートも可能な、通称・キンジモデルってやつだよなあ？」

あ、キンジの顔が引き攣ってる。てかなんでそんなことまで知っているんだ？

「あー、いや……それはこの間ハイジャックで壊されました。今は米軍払い下げの安物で間に合わせてます。当然、合法の」

「へへえー。武装科アムドに改造いじりの予約入れてるだろ？」

「うわっちー！」

金次に根性焼きをしている。

熱そう。

って言うかこの時代のやつにそれはまずいだろ。

「……でえー？どういう意味？『ボディガードをやる』ってのは」

「——言った通りよ。白雪と風切のボディガード、24時間体制、アタシ達が無償で引き受けるわ！」

「お、おいアリア……！」

金次は乗り気ではなさそうだな。

でも、恐らくもう金次は諦めている。

哀れなり。

「……………星伽、なんか知らんけど、Sランク武偵が無料で警護してくれるらしいよ？」
「嫌です！アリアになんか警護して欲しくありません！」

「大丈夫よ。金次の部屋で」

「よろしくお願いします！」

金次の部屋って言った瞬間、白雪が飛びついた。

一応、俺の部屋でもあるんだけどな。

ま、俺はまだ入院中だし、いいか。

「アリア。俺の警護は昼間だけでいいからな。白雪を優先させてくれ。」

「は？何でよ」

「心的に白雪の方が弱い。白雪の場合、金次を人質に取られたら簡単に着いて行きそう

だからな。それに、俺の能力上、一人の方が戦いやすい。」
「……………分かったわ」

話が着いて、金次の部屋にアリア達は帰って行った。

俺は病院に戻る。

……………しんど。

第十一弾 異変

昨日。

教務科に呼ばれ、『魔劍』デュランダルと言う、超偵を狙う犯罪者がいるらしい。

其処で狙われているであろう白雪のボディーガードをアリア達がする事になった。

そして、超能力がなぜかバテて俺も守られる側になった。

そして、退院した俺は取り敢えず松葉杖をついている。

体の臓器とかは問題なくて足が問題がまだあるので借りている。

足いつ撃たれたかは知らん。

こうして歩きながら、学校に向かう。

アドシアードも近いので、いろいろ準備があるのだろう。

俺はこの怪我もあつて参加出来ない。

白雪のボディーガードはレキにもやらせているみたいだ。

屋上から覗いていたのを見た。

色々授業が終わり、部屋に戻る。

………何だこれ。

部屋が要塞化されてあった。

新しいタンスもあって、それは白雪のだろうと思ひ触らずに置いておく。

俺の部屋に入り、グロックとベレッタの整備をする。

俺の銃は金次みたいに改造してないので整備は楽だ。

グロックは3点バーストカスタムでベレッタはフルオートカスタムだ。

その夜、白雪の占いをしていた。

俺は近々、なにかの選択に迫られるようだ。

……………うへえ。

翌日、歩くのは足が痛いので、バスを利用して行つた。

その昼休み、アリア達が何かの練習をしていた。

「何?その練習。」

「これ?真剣白刃取りよ?」

「それがか?」

「そうよ。何か文句でもある?」

「ああ、真剣白刃取りなんてそうやって練習するもんじゃない。イメージなんて何の意味も無いからな。やるなら実践をしておけ。そっちの方が役立つ。」

「そう。ありがとう」

アリアが素直に感謝してくる。

……悪いもんでも食べたか？

金次は恨めしそうにこちらを見てくるが無視する。

動けないというのは面倒で、授業で戦うことが出来ない。

戦闘狂って訳ではないが体を動かせないと何かと面倒である。

何故こんなこと言うかというと、

「キンちゃん!」

……何故か風呂に突撃して行くのを能力で止めなければならない。なんでこんなしょうもない事に能力を使わないといけないのか。

「あれ? 開かない!?!」

「白雪、落ち着け」

「お、落ち着けないよ! キンちゃんが、キンちゃんが呼んでる!」

「落ち着けと言ってる。金次の携帯はここにある。まあ、突っ込みたかったら突っ込め」

俺は解除して、テレビを見る。

やはり風呂で一悶着あったようで、うるさかったので風で壁を作って防音する。

アリアも帰ってきたようで、ガバメントをバカスカうつてくる。風の壁にぶつかって俺には被害はない。

金次は東京湾に飛び込んでいった。

俺は少し、このやりとりに異変を感じた。

次の日。

金次は風邪を引いていた。

そりやもうそろそろ夏だと言っても五月に東京湾に飛び込んだら風邪も引くだろう。

「アリア達、学校行ってこい。俺が看病しといてやる。」

そう言つて学校に行かせた。

アリア達は少し暗い顔を見せながら学校に行った。

「クシユーン！」

くしやみをして、亜里沙が変わってしまった。

ついでだが、私は怪我はしていない。

梓とは二人で一人つて言えば良いのかな？記憶はだいたい共通してる。でも、梓と私は一人ずつだ。そうなれば、一人で一人かな？取り敢えず、体が別で頭が一緒つてことで。

「あ、あんた」

昼頃だったか、アリアが帰ってきた。

「あ、アリア。おかえり」

「な、何であんたがここにいるのよ!」

「取り敢えず、先に自己紹介するね。私は風切亜里沙。一応、設定上は双子ってことにし

てるよ」

「せ、設定って。梓はどこ行ったのよ!?!」

「ここにいないじゃん」

私は自分を指差す。

「は?..」

「私は亜里沙で、梓でもあるのさ。」

「ど、どういう事よ」

「今から見るのは他言無用でね?ほい。」

私は少し風を起こしてみよう。

アリアはその風に少し驚いていた。

「どう?見たことあるでしょ?これ」

「.....ええ。本当なのね」

「うん。今はくしやみ出ないから変わらないけど」

「くしやみで変わるの？」

「そうだよ？金次にばれたのもくしやみを目の前でしちやって。で？それは？」

「ええっと、特濃葛根湯？つてのよ。これしかキンジは効かないって」

「そうなんだ。」

「じゃ、渡しといて」

「はい。わかったよ」

アリアに特濃葛根湯を受け取って、金次の枕の近くに置いておいた。

第十二弾 双華

次の日、復活した金次とアリアがまた喧嘩していた。

……………懲りないな。

「どうして！どうして信じてくれないの!?あたしの言ってることを！」

「信じられるか!?『魔劍』^{デユランダ}とか言うそんなただの噂！」

ほう、その話題か。

少し調べてみるか、でもその前に、

「もうやめろ」

二人だけに殺気をぶつける。

「何よ！あんたも信じないってどういうの!?!」

「落ち着け。そう怒鳴っても事態は変わらない。その『魔劍』^{デユランダ}がいるかどうかはこれから

調べれば良い。」

「は？お前はそんな噂を信じんのか？」

「じゃあその噂が嘘だと言う根拠は？」

「そ、それは…………」

「確かにいるかは分からない。噂だからな。でもそれが嘘だと言う根拠はない。少なくとも、最近は色々起こってるぞ。」

「……何か起こってるの?」

「昨日、いや一昨日か。白雪が金次が風呂に入ってたのに突撃してたな? 金次から電話が来たって」

「……………そうだな」

「実際、お前の携帯は俺が持ってた。」

「は?」

「お前が風呂に持って行ったのは俺の、と言うか亜里沙のだ。亜里沙にお前と同じのを買わせた。」

「……………」

「つまり、恐らく『魔劍』デュランダルは既に近くに………いる」

「!」

「白雪には言えないが、あいつに発信機をつけている。」

「は……」

「正確には白雪の白の髪につけてるやつだけだな。それじゃ、俺は行くわ。思う存分喧嘩してくれ」

そう言つて、俺は松葉杖をつきながら離れた。

離れた時、バンバンとガバメントを撃つ音が聞こえた。

よく撃つてるな。

その昼休み、俺は装備科アムドに来ていた。

「あやや〜いるか？」

俺はキョロキョロしながら周りを見てみると、

「あやや、お客様ですだ！」

ひよこつと顔出して来た。

平賀あや。どう見ても小学生にしか見えない。

「おや？ 梓ちゃんですか。」

「梓ちゃんはやめてくれ。それで、頼んだものは出来てるか？」

「おお！ 出来てるのだ！ ええつと、この辺に……あ、あつたのだ！ うんしょ、うんしょつと。」

そう言つてあややは二つの剣を取り出した。

その剣は鎖で繋がっていた。

「これなのだ！ 必要どおりにしてみたのだ！ 鎖はウォーターカッターでもない限り切

れないのだ!」

「……………と言うことは硬度はダイヤモンドぐらいだと?」

「そうなのだ。それは剣も同様なのだ。剣のもつところは滑りに食いように少しざらつとなつてるのだ。名前は『双華』そうかなのだ。」

「その心は?クシユン!」

話を聞いている時にくしやみをしてしまった。

「そういうところなのだ」

ということとは、

「私と梓で双つ、てことかな?」

「そうなのだ。」

「ありがとう。クシユン!」

と、胡椒と振ってくしやみをして戻る。

「さて、料金は前払いたよな。じゃ、また頼むよ」

「ありがとうなのだ!梓ちゃんはお得意様なのだ!なのでしつかりサービスもするのだ!」

「じゃ、今度は武偵弾でも頼みに来るよ。またな」

「はい!またなのだ!」

そう言つて剣を受け取つて外に出た。

放課後、バンバン聞こえていたので屋上に行つてみる。

「うわぁ……」

貯水タンクにバカキンジと撃つてつけたような跡があつた。

……技術力の無駄使いだな。

「……………っ！」

何かの気配がして振り向く。

そこには見知つた顔があつた。

「レキ」

そのレキはスナイパーライフルを背負っている。

「白雪の護衛か？」

俺がそう聞くと、小さくフルフルと首をふる。

「梓さん」

そうレキの口から綺麗な声が聞こえた。

と、思つたら耳を疑うようなことを言つてきた。

「な、なんだ？」

「私と結婚してください」

第十三弾 恋人

「私と結婚してください。」

……………は？

「ええっと、もう一回言ってもらっても？」

「はい。私と結婚してください。」

「聞き間違いじゃなかったよちくしょう。」

俺は思わず悪態をついた。

何故、屋上が上がってきただけで求婚されるのかと。

もしかしたら白雪が占った『何かの選択に迫られる』と言うのはこの事だったのだろう。

俺は取り敢えずこう聞いた。

「何故？」

「？何故、とは？」

「なんで俺なんだ？金次もいるし不知火だっているだろ？」

「風が」

「風？」

「はい。風があなたを選べと。」

「……………その風とやらはなんで俺を？」

「私たちウルス族は皆が女なんです。少しでも優秀な遺伝子を残す必要があるのです。」

「……………断った場合は？」

「力づくで。認めさせます。」

レキはそう言いながらスナイパーライフルを下ろした。

「ほう。断る」

「……………何故ですか？」

「そうだな。別に結婚ないつかはするだろうから構わない。だが、俺は自由が良いんだ。レキのように誰かに強制させられるなんて堪ったもんじゃない」

「……………」

「で？どうする？力づくで来るか？」

「……………はい。ゲームをしましょう。」

「ゲーム？」

「これから最大七分間、あなたに猶予を与えます。私はこれから7回、あなたを襲い、あなたが一度でも逃げる事が出来れば、求婚は撤回します。」

「……………分かった。」

「それではどうぞ」

「……………」

俺は考える。

相手はスナイパー。

レキの絶対半径は2051m。
キリングレンジ

この足で逃げられる範囲は限られて来る。

同じスナイパーとして一番嫌なのは近くに居ること。

でも、レキは絶対の自信があるからこうして迫ってきている。

究極的には当たる寸前に亜里沙に変われば良いだろうが、

その場合、亜里沙が死ぬ可能性がある。

それに伴って俺も恐らく死ぬだろう。

この案は却下。

でも、恐らく、亜里沙との身長差までは把握してないだろう。

7回と言うことはカフスポタン。

そして、俺の心臓、または脳を狙うのだろう。

「……………逃げないのですか？」

「……………ああ。それが一番勝つ可能性がある。」

可能性を一つずつやろう。

まず、風の壁を張る。

「……………」

その行動に少し戸惑ったような感じがしたが、壁を突き破って一つカフスボタンが器用に撃たれた。

……………これでは駄目か。

ならもつと壁を厚くする。

しかしそれも突き破って二つ目のカフスボタンが撃たれた。

……………これも駄目か。

なら今度は竜巻だ。

俺は下に手をつき風を集める。

しかし、その風も貫通して、三つ目のカフスボタンが撃たれた。

これから3度試してみたが、風では止められなかった。

「あと一つです」

「……………」

俺はレキを観察する。

狙いは完璧。鎌鼬でも、切った半分がカフスボタンを撃ち抜いていた。つまり、鎌鼬を見越してカフスボタンに当たる位置を変えたのだ。

「……………」

レキはじつとこちらを見つめている。

ぼーつとした表情だが、こちらの動きをよく見ている。

レキがすつとライフルを構えた。

その瞬間、俺の上を見た。

目の上、と言うことは頭か。

レキが引き金を引く瞬間に、

「クシユーン！」

俺はくしやみをした。

レキはそれも見越したようにすつと軌道を直し、撃つ。

しかし、

キンっ！

後ろの手すりで音が聞こえた。

「……………！」

レキが驚いたような表情を少し変えたような気がした。

「……………残念だったね。レキ」

そう、私は言った。

多分、レキは梓のくしゃみの位置で引き金を引いたのだろう。

でも私は梓より、身長は20cmも違う。

その分上を通過して行つた。

「はい。約束です。私は諦めます。」

「ちよつと待つて。」

「……………なんですか?」

「梓は話があるみたいだったから変わるよ。」

私はポケットから胡椒を取り出し、振つてくしゃみをした。

「さて、レキ。勝負は俺の勝ちだ。レキは亜里沙のことを見たことはあつても身長差ま

では把握していなかったわけだ。」

「はい。だから諦め「ちよつと待つた」…………?」

「確かに俺は勝つた。でもそれは結婚のことに對してだ。」

「?」

「まあ、その、なんだ。恋人からなら良いぞ?」

「……………」

「俺はレキを可愛いとは思う。でも、誰に対しても無理矢理従わされているなら、どんな願いでも断る。でもその心が本心なら、俺が断る理由はない。……どうする?」

「……………はい。分かりました。」

「……………分かりました。ただじゃ分からんぞ?」

「私の恋人になつてください」

「……………おう。」

俺は急に恥ずかしくなつて顔を背ける。

レキはなぜか片膝をつき、

「ウルス族は一にして全。全にして一。これからは私たちウルスの47女はいつでも、いつまでも、あなたの力となりましょう。」

なんて堅苦しいことを言ってくる。

一度染み付いた習性は元に戻すのはなかなか難しいからだ。

俺は一度死んでるから、習性は元に戻っている。

「そうか。はあ、疲れた。それじゃあな。」

俺は松葉杖をついて歩いていく。

「……………」

その後ろでテクテクと音がする。

……。

その音を無視して歩く。

「……………」

それでもついでくる。

「……………レキ?」

「はい」

「……………どうしてついでくるんだ?」

「私はあなたの恋人ですから」

……………理由になつてない。

あ、そう言えば、

「レキ。その風とやらは俺のどこを見て選んだんだ?」

と、気になっていたことを聞いてみる。

「風はその超能力を買っています。」

「残念ながら遺伝じゃないぞ?この力は。ぽつと出だぞ?」

「それだけではないです。その圧倒的な力と精神力です。」

その点ではキンジさんや不知火さんよりはるかに優れていると。」

「……………」

そう真つ直ぐ言われて少し照れるな。

「あと、あなた自身です。赤霧碧さん。」

そう言われて耳を疑った。

「……………何？」

「『冥府の死神』と言われたあなたを風はウルスに引き入れると」

「……………それをどこで聞いた。」

「風です。」

「……………」

風。

レキに指令、または間接的に操っている存在。

レキはその風を疑わず、ただ従っている。

その風はなんだ。どうして俺を知っている。

前に電話してきた、あのホームズと思わしき人物。

恐らく風は人間じゃない。

何らかの物資か生物だろう。

だが何だ？

「くそっ！情報が足りない！」

「風があなたを選んだ理由は恐らくそれです」

「……………そうか。だが、レキ。この事件が終わるまではアリアに従っている。どうせアリアに使われているだろうからな」

「はい」

「それからなら、まあ、譲歩してもいい。」

「分かりました」

「そう言えば、もうすぐ祭りがあるな。……………一緒に行くか？」

「……………はい」

「そうか、じゃあな」

そう言っつて俺は離れた。

男子寮に入る前、電話がかかってきた。

「はい」

『もしもし、やあ、風切君』

「……………ホームズか？」

『ふむ。どこで根拠を決めているかは前に聞いたね。』

「それで？何の用だ」

『いや、なに。君がすっかりアリア君を見てくれているかなと思ってね』

「ふん。そんなものお前お得意の推理でもすればいい」

『ああ。恐らく、君はアリア君を信じてくれたのだろう。』

「……………用件はそれだけか？」

『君に少しだけ情報を上げようと思ってね』

「あ？ 『魔劍』^{マジユラシタル}が既に仕掛けていると言うことか？ それなら既に大体の予測はついているぞ？」

『ほう。君はなかなか推理が利くようだね。流石は『冥府の死神』と言ったところかな？』

「……………その異名は関係ない」

『知っているならいい。それではね』

そう言つて電話が切れた。

俺はちつと舌打ちをして寮に帰った。

第十四弾 花火

レキが恋人になって次の日、

病院に行つて、やつと足が復活した。

やっぱり自分の足で自由に動けるのは嬉しい。

アドシアードも、もう明日に迫っている。

俺は何にも出場しないので適当に狙撃科に行つていた。

そこではレキが練習をしていて、世界記録を出していた。

おぉー。

さて、授業も終わり、約束通りレキと祭りに行くことになった。そのまま行つても良かったが、流石に時間的に早かったので時間を空けて行くことにした。

そして、少し日が傾き始めた頃、俺は駅前でレキを待つていた。浴衣とかは着るのが面倒なので武偵高の制服だ。

「梓さん」

と、レキの声が聞こえたので見てみると、淡い水色の浴衣を着たレキがいた。

「おお。可愛いな。凄く似合ってるぞ」

「ありがとうございます」

俺が素直な感想を言うと、レキは少し照れたような気がした。

「それじゃ、行くか」

「はい」

こうして、俺たちは祭りに向けて歩き出した。

しかし、電車に乗った時もその間も会話は無かった。

でも、駅を通過して祭りに行く人たちでごった返している時にレキが俺の腕に抱きついた。

「……………何してる?」

「日本では恋人は腕を組んで歩くと聞いたものですから」

「少なくとも付き合って2日目のやつらはしない。ほら、離れる。はぐれないように手は繋いどくから」

そう言つて俺はレキを剥がして手を握る。

「……………ありがとうございます」

「おう。」

そして再びの無言。

……なかなかつらい。

歩くこと数十分経つが、花火の音は聞こえてこない。

そして、周りの人たちは次々と帰って行くのを見た。

どうやら花火は終わっていたようだ。

「すまん。レキ。どうやら時間を間違えてもう終わったらしい。」

「構いません。」

「それではおれの気が済まないんだが、お？ちよつと待つてろ」

俺は遠くに花火を売っている店を見つけて花火を買う。

……これで多少の気晴らしにはなるか。

俺が花火を買って戻って行くと、数十人にレキが囲まれていた。

……またか。

そこで、レキが俺を見つけて駆け寄ってきた。

「梓さん」

「あ？んだてめえ」

……面倒くせ。

「あー、俺はこの子の恋人だが？」

俺がそう言うと全員笑い出した。

……何かおかしなこと言ったか？

「じゃあ、じゃあさ！お前の彼女！俺たちに貸してくれよ！ちゃんと可愛がつてやるからさー！ぎやはははー！」

「お前から見たいなゴミに大切な彼女を貸すと思うのか？勘違いも甚だしい。」

「ああ!!舐めたんじゃねえぞー!!」

逆上してきた男が殴りかかってくる。

俺はその拳を掴んで握り潰した。

あ、メキヤって言った。

「ぐああああ！お、俺の手があー！」

「こ、この野郎！」

「レキ、少し下がってろ。」

「はー」

俺はレキを少し下がらせ、構えを取らずふらつとする。

殴りかかってきたのを手で払い腹に一発。

そいつの腕を掴んでそのまま後ろにいたやつに殴りかかる。後ろのやつを叩き潰したあと、ジャイアントスイングで投げ飛ばす。

「はい。あと七人。」

「く、くそおー！」

一斉に三人殴ってきたのをしゃがんでかわし、くるつと回りながら一人を足払いをする。その二人に両手で裏拳を決め、一人を踵落として腹を蹴って倒す。そして、裏拳をした二人纏めて蹴り飛ばす。

「あと四人」

一人は足を踏んで肘打ちその流れで裏拳。一人は拳を外に払って膝蹴りして一本背負いで投げる。一人は左足で蹴ってくるのを手で受け止め、もう一つの足の膝を踵で膝カックンしてシャイニングウイザードを決める。

最後の一人は風を使って後ろに周り、バックドロップを決めた。

俺は手をはたき、ため息をついた。

「はあ、こっちが武偵高なのは制服見て分かるだろうに。レキ、行くぞ」
「はい」

俺はレキを待つて歩きだした。

無言で歩いて行く二人。

途中でプチつと言う音が聞こえた。

「ん？ああ、鼻緒が切れたのか。」

「すみません。」

「いいさ。……仕方ない。空から帰るか。」
「？」

俺はそう言つて膝に手をやって抱え上げた。
要はお姫様だつこだ。

「……………」

「行くぞ？しつかり掴まつてろよ。ふっ！」

俺は力いっぱい飛び上がった。

風に乗つてゆつくりと進む。

「どうだ？気持ちいいだろ？」

「……………はい」

「もう少し飛ばすぜ！」

俺たちはこうして空の散歩を楽しんだ。

少したが、レキが楽しそうにしているように見えた。

そして、白雪からメールが届き、その内容を見て俺はほくそ笑んだ。

第十五弾 魔劍

アドシアード当日。

俺は昨日白雪にメールを貰って、地下倉庫ジャンクシヨンにきていた。白雪が『魔劍』デユランダに指定された場所で、そして、ここは火薬などがあつて銃を使いにくいところだ。火薬に当たれば大爆発だからだ。

そして、今ケースD7が出ている。

——ケースDとは、アドシアード期間中の、武偵高内での事件発生を意味し、D7となると、『ただし事件であるかは不明確で、連絡は一部の者のみに行く。なお保護対象者の身の安全のため、みだりに騒ぎ立ててはならない。武偵高もアドシアードを予定通り継続する。極秘裏に解決せよ』——という状況を表す。

まあ、俺は既に敵地に乗り込んでいるが。

こうして張り込んでいると、下がざわざわしてきた。

金次とアリアでも来たか。

そして、風の流れが変わった。

恐らく『魔劍』デユランダが入って来たのだろう。

風を操作して探る。

不自然に風が滞る場所を見つけた。

見ると、一人の人影が見えて白雪に変装しようとしていた。

俺は無理矢理足音を鳴らして近づく。

その人影は飛び下がるように俺から離れた。

「白雪に変装しようとしていたところ悪いが、チエックだ。」

「……………風切梓か」

「ほう？俺を知っているかジャンヌ・ダルク？」

「……………何故知っている」

「何故、か。その少し見えた銀髪に見覚えがあったからだ。」

「……………なに？」

「何の戦争か忘れたが市街地が戦場となった時があった。敵は何処に隠れているか分からなく、とある民家の地下があった。」

「そこには数人の人がいて、その中にお前の髪とそっくりなやつを見た。」

「……………」

「そいつが自ら名乗ったよ「ジャンヌ・ダルク」だったな。」

ま、俺は民間人を殺す趣味は無かったので、護身用に銃を渡してやった。それから

知らないが、こうして子孫がいると言うことはあの戦い以降も生きていた証だな」

「……………何故知っている？それは「何故って？」」

「見逃したのも、銃を渡したのも俺だからだ。」

「は？」

「お前の親玉から聞いてないか？『この世界にいるはずのない人間が産まれるかも』って……………そうだな。あいつらも来たし、改めて自己紹介をしてやろう」

俺が後ろを向くと、アリア、白雪、金次がいた。

「俺の名は赤霧碧。前世は奴隸、または傭兵。今はお前らの知る風切梓だ。」

「……は？」

「先に言つといてやる。イ・ウーにいるだろう、赤霧碧は偽物だ」

「貴様！何を言っている！偽物の訳ないだろう！ふざけるのも大概にしろ！」

「嘘じゃないさ。お前らの知る赤霧碧は超能力者だろ？」

「……………それがなんだと言うんだ!？」

「本物の赤霧碧は超能力者じゃない」

「う、嘘をつくな！」

「ま、折角だ。見せてやる。アリア達も見てな。これが赤霧碧だ。」

『赤霧の名の下に』

そう言うだけで、ガラツと雰囲気が変わった。

そう、俺のはスイッチの切り替えだから。

「さて、お前らの知る赤霧と違うだろ？ そいつは多分超能力の起動に使ってるだろう。俺は普通と殺人者の切り替えだからな。ん？ 今は武偵と殺人者か。そして、俺は仲間は大事にするが、敵には容赦しない！」

俺はそれだけ言つて駆ける。

ジャンヌは少し遅れて剣を構える。

しかし、もう遅い。

俺はベレッタを抜いて下に撃つ。

その弾が跳弾して行くのをジャンヌは剣で受け止める。

俺は上下左右に撃つと、跳弾し、その弾に擦れ、ずれてまた跳弾する。

ジャンヌはそれを防ごうとするがその寸前で弾同士がぶつかつて方向を変え腕と足にあたる。

「ぐっー！」

「どんどん行くぞー！」

俺はグロックも抜き、3点バーストとフルオートにしてマガジン全てを円を描くように撃ち尽くし、その弾全てが跳弾する。

俺はそこから走りだし、ジャンヌは防ぎ切れないと思ったのか

身を竦めるが全て寸前で弾が砕け散って、俺の視界がクリアになる。ジャンヌが驚いているところにグロック、ベレッタを上投げて、両手一度に掌底を放つ。

「砕け！」

「つーぐああー！」

掌底を放つとジャンヌは吹き飛んで壁に激突した。

「がはっ！」

俺は投げた二つを取ってホルスターにしまう。

俺はジャンヌに向けて歩く。

ジャンヌは剣を支えにしてギリギリで立っていた。

「こんなもんか。イ・ウーの最弱は。拍子抜けだな」

「くっ！」

「そうだ。ジャンヌ、お前、俺に本気で超能力を撃ってこい」

「な、に!？」

「なに、グレードがどれだけかは知らんが、それなら多少の傷は俺に与えられるかもしれん。普通に戦ったんではお前はあまりに弱すぎる」

「……………いいだろう。」

ジャンヌが何かの決意をし、剣に氷が纏う。

空気中の水蒸気が凍り、ダイヤモンドダストみたいに見える。

「食らえ、オルレアンの氷花。鮮やかな銀氷となって散れ！」

ジャンヌの剣から冷気が漂い剣を振り下ろした。

……。

「は、はは！やった！私を舐めるからだ！」

「何がおかしい？」

ジャンヌが笑っていた時に言っただった。

「は？」

「だから何がそんなにおかしい？」

「な、な、何故!? 真っ正面から受けたはず！」

「お前は効いたと思ったか？ 残念。多少は寒いけど損害はない。無傷だ。」

驚きを隠せないジャンヌ。

実際は当たってすごく痛い。

でも、赤霧の時にはもつと痛い思いをしている。

「終わりだ、ジャンヌ・ダルク」

そう言って、俺は首筋に衝撃を与え気絶させた。

「ふう」

俺はスイッチを切るために頭を殴る。

たったそれだけでスイッチがオフになる。

そして、後ろを向いて、啞然としているアリア達を見ながら、少し笑ってやり、意識を失った。

吸血鬼

第十六弾

泥棒

「知らない天井だ。」

と、俺は取り敢えずテンプレみたいなことを言う。
って言うかここ、前俺が入院したところじゃん。

「梓さん」

「レキ」

声のした方を見るとレキがいた。

俺は重い体を持ち上げて座る。

「レキ、今日は何日だ？」

「今は梓さんが倒れてから約1日です」

「そうか。俺はどうして運ばれたか知ってるか？」

「はい。全身に及ぶ凍傷でした。」

凍傷、か。

ジャンヌの全力は『赤霧』には効いたってことか。

まあ、食らうことを前提にはしていないからな。

「で？今は何時だ？」

「一時間目が終わったところですよ。ですが、今日は出席しなくていいとのことですよ」
「そうか」

……………休んでばっかだな。俺。

その後、医者が来て、寮に帰ってもいいけど安静にしているとされた。

……………そう言えば、

「レキ、お前どうして学校行ってないんだ？」

「梓さんが行ってないからです」

……………理由になってない。

「理由になってないぞ？」

「じゃあアリアさんにサポートしてやりなさいと言われたからです。」

「じゃあつてなんだじゃあつて。まあ、いい。帰る用意するから少し待っていてくれ。」

俺は風を起こし、指で動かして服をカバンに入れたりしてぱっぱと済ませる。

レキも手伝ってくれたので早く終わった。

病院を出て、レキと一緒に歩いていく。

カバンは手で持つフリをして風で浮かしている。体も、普通に歩くのは痛いので風で歩いている。

亜里沙に変われば早いのだが、こんな街中で変わりたくない。

こうして、やつとの思いで男子寮に帰って来た。

カバンを自室に投げ入れてソファに寝転ぶ。

時計を見るとそろそろ昼時になっていた。

「レキ、もうすぐ昼だが何食べたい?」

「いえ、私にはこれがありますから」

そう言つて、カバンからカロリーメイトを出した。

……それはダメだろ。

「待つてろ。どうせ、何も冷蔵庫に入っていないだろうから何か買つてくる。」

俺は台所まで歩き、胡椒を取つて振る。

「クシュン!」

そしてくしゃみをして亜里沙に変わった。

「それじゃレキ。待つててね」

「いえ、あの「そうだ」?」

「梓と恋人になったと思うけどそのウルスは女の人しかいないんでしょ?」

「はい」

「私たちはこういう特殊体質だけいいのかな？」

「………分かりません。少なくとも私は構いません。梓さんと亜里沙で一人ですから」

「そう」

私は梓の財布を持って外に出た。

下のコンビニではなく、近くのスーパーに行つて食べ物を買う。

「んー。レキにも体にいい物食べさせてあげたいよね」

そして、私はすつと食べ物を取つて行つて買つて帰つた。

男子寮について食べ物を持って入ると、無言でレキがソファに座っていた。テレビも点けずに。

「レキ、ただいま。」

「お帰りなさい」

「すぐ作るから待っててね」

「………」

私はフライパンを取つて温める。

そんなこんながあつて料理が出来た。

「はい、レキ」

「ありがとうございます」

私が作ったのは野菜炒めとミートスパゲッティだ。

「カロリーメイトよりは美味しいと思うけど」

私はいただきますと手を合わせながら言う。

レキは無言で手を合わせるだけ合わせていた。

「……………美味しいです」

「そ？…良かった」

少しレキの表情が緩んだような気がした。

夕暮れ時、くしゃみをして元に戻った俺は、

ぼーっと夕日を見てみると、何処からか銃声聞こえて来た。

「恐らく女子寮の屋上です」

と、レキが言ってくれる。

「ちよつと行ってくるわ」

俺はそのまま飛び出した。

風を使って女子寮の屋上付近まで行き、ワイヤーを使って登る。

そこにはアリア、金次。それとハイジャック犯の理子がいた。

銃声が聞こえて来たのに今はただ罵りあっている。

俺は金次の側に行く。

「金次、これはどう言う状況だ？」

「……………梓か。もう体は平気なのかい？」

「その口調はヒステリアモードか。そうだな。まだ痛いけど大したことはない」

「そうか。で、この状況は、俺も分からない」

「……………そろそろ止めたらどうだ？」

「そうだね」

理子とアリアがナイフと日本刀を振りかぶり振り下ろしたところに金次がアリアの日本刀はナイフで受け、

理子の腹にベレッタを突きつけた。

「キンジ!？」

「アリア、今理子と戦ってはいけないよ。」

「なんで止めるのよ!こいつにはお母さんの証言をさせなきゃいけないのに!それにハイジャックのことだって「司法取引だろ」

俺が途中で割って入った。

アリアと理子は俺の登場に驚いていた。

「風切!?! あんた無事だったの!?!」

「無事じゃないから入院してたんだが?」

「それはそうだけど。まあ、いいわ。それで司法取引?」

「そうだ。じゃなきやこんな早く帰ってこれないだろ?」

「でも、あーくんはハイジャックがあつたことしか知らないんじゃないの?」

「いや? 『武偵殺し』の犯人を見つけたのは俺だからな。」

金次は大して驚いてなかっただろ?」

「……………そう言うことかよ。」

俺が金次に助言したことを言うと、その時の情景を思い出したのか少し苛立ったように言った。

「お? それが本当の口調か。で? 何故今のタイミングで帰って来た?」

「そうだね! 私はキーくんとアリアとあーくんをお願いしたいことがあるの!」

「それは?」

そう言つて、理子は満面の笑みを浮かべてこう言つた。

「キーくん、アリア、あーくん。一緒に泥棒やろうよ!」

第十七弾 潜入

理子に泥棒と一緒にやろうと言われて次の日。

医者には今日は念のため学校には行くなと言われ、

寮にいた。

レキは俺のところ居ようとしたが、強制的に行かせた。

「私はあなたのものですから」

とか言つて居ようとしたが、なら俺の言うことに従え、と言つたら渋々と言つた感じで学校に行った。

今日の俺は昨日より痛みは引いて楽になった。

今俺とアリアとキンジは、理子に指定されて、秋葉原に来ている。

アリアと金次が帰つて来てからここへ来た。

「理子の奴、何でこんな所を指定したんだよ……」

「何ボヤいてるのよキンジ、さつきと行くわよ」

キンジが不満顔で辺りを見回し、それをアリアが咎とがめる。

とはいえアリアも初めて秋葉原を訪れたせいとか、キヨロキヨロと辺りを見回しているため、あまり説得力がない。

「——つと、ここだな」

しばらくして、理子が指定した店に到着した。

すると突然キンジとアリアが、まるで犯罪組織のアジトに突入するかのように扉の脇に移動する。

がちゃ。

緊張の面持ちで扉を開け、中に突入し——

「ご主人様、お嬢様、お帰りなさいませー!」

中にいる、ヒラヒラとした衣類を身に纏まどつている美女・美少女に丁重に挨拶されて驚く二人だった。

俺は呆気に取られていた。

——メイド喫茶。

俺は何かは分からないが取り敢えず喫茶店なんだろう。

アリアとキンジの顔が引きつりながら、近くにいたメイドさんに峰理子という少女と待ち合わせしている旨を伝えると、店の奥の個室に案内された。

「……じ、実家と同じ挨拶だわ……まさか、日本で聞くとは思わなかった……」

アリアは先程の挨拶にまだ引いていた。

一方のキンジはというと……ああ、既に帰リたそうな表情をしていた。ヒステリアモード持ちなら猛毒に近い場所だからだろう。とか言う俺も早く帰りたい。

「……な、何よあの胸、じゃなくて衣装っ！いくら給料が良くても、あれはないわ。イギリスならともかく、日本で着るなんて場違い。恥づかしい。なんて店なの。アタシだったら絶対着ない。絶対絶対、あんなもの着ないっ！」

アリアがメイドを指さしながらそう言った。

アリアが指している指の方向を見てみると、少々どころかやたらと胸を強調した衣装を着ているメイドさんがいた。

「……………頑張れ。」

「理子さまお帰りなさいませー！」

「きゃあーおひさしぶりー！」

「理子さまがデザインされた新しい制服、お客様に大好評なんですよー！」

しばらくして、枝毛を探していたアリアと水ばかり飲んでるキンジ、ぼーつとして

いた俺達の耳に、玄関付近にいたメイド？と呼ばれていた人達の歓声が聞こえてきた。内容的に、理子が来たのだろう。

「ごつめえーんチコクしちやつたー！急ぐぞブウーン！」

いつもの制服に、首もとに鈴を増設した理子が、飛行機の物真似をしながら走ってくる。その両腕には、恐らくゲームやファイギュアといった物がパンパンになった紙袋を提げていた。

「んと、理子はいつものパフェとイチゴオレ！根暗なほうにはマリアージュ・フレールの花摘はなつみダーズリン。女の子っぽい人にはエスプレッソ・リスレットのブラック。そのピシクいのにはももまんでも投げつけといて！」

席にポスン、と座った理子は、メニュー表を見ることがすらくラスラと勝手に注文した。

……なるほどな。今の言い方から察するに秋葉原に慣れている。理子にとつては、ここはホームグラウンド。ここで話をすることによって、慣れていない俺達への会話権のアドバンテージを取るってことか。

「——まさか、リュパン家の人間と同じテーブルにつくとはね。偉大なるシャーロック・ホームズ卿もきつと天国で嘆かれてるわ」

イヤミだったらしく文句を垂たれつつ、アリアはモフモフともまんを食う。

かたや理子はタワーのような巨大パフェをすでに半分まで平らげていた。

「理子。俺達は茶を飲みに来たんじゃない。アリアと俺にした約束は、ちゃんと守るんだらうな？」

………約束？

紅茶を一度口にしてから、キンジが訊ねる。

「もちろん！理子は約束はきちんとして守る子なのです！」

キンジに訊ねられた理子は頷き、そう答えた。

そして、何やら揉めているところにアリアが静肅にと言わんばかりに机を叩いた。拳銃で。

「そこまで。理子、風穴あけられなくなければ——いいかげんミッションの詳細を教えなさい」

「——お前が命令すんじゃねえよ、オルメス」

いきなり乱暴な男言葉と三白眼になって、アリアを射殺すように見えた。

アリアすら一瞬怯ませる凄みを見せたウラ理子（キンジ命名）は、紙袋からノートパソコンを取りだして起動させつつ——

「——では只今より、『大泥棒大作戦』作戦会議を始めたいと思いまーす！」

と、オモテ理子に戻りながら、声高らかに宣言した。

——そう、俺達がここ、秋葉原に来た理由。それは、理子の宝物を取り返す、『大泥棒大作戦』の作戦だ。(理子命名)

「横浜郊外にある、『紅鳴館』——ただの洋館に見えて、これが鉄壁の要塞なんだよおー」
カタカタとパソコンを操作し、くるつと俺達にディスプレイを見せる。

地下3階・地下1階建てと思われる建造物の詳細な見取り図と、そこにびっしり仕掛けられた無数の防犯装置についてが資料にまとめられていた。

……スゲエ。侵入経路や必要な道具とかまで、ビツシリ書かれている。プロでもこのレベルだと半年はかかるぞ。

「これ……アンタが作ったの？」

「うん」

「いつから？」

「んと、先週」

……アリアの目が真ん丸になってる。金次曰くアリアは弾丸みたいに突っ走るだけだから、こういった作戦はロクに立ててないそうさ。

「どこで誰に作戦技術を学んだの？」

「イ・ウーでジャンヌに習った」

ジャンヌ又って……この前戦ったやつか。

——そういえばジャンヌ又ってどうなったんだらう？

多分捕まってるだろうけど。

「……で、理子。ブラドはここに住んでるの？ 見つけたら逮捕しても構わないわね？ 知ってると思うけど、ブラドはアンタ達と一緒にママに冤罪を着せたカタキの一人でもあるんだからね」

「あー、それムリ。ブラドはここに何十年も帰ってきてなくて、管理人とハウスキーパーしかないの。管理人もほとんど不在で、正体がかめてないんだけどねえ……」

理子の言葉に不満顔のアリアだが、自制したのか口をへの字に曲げただけだった。

「まあ……分かった。で、俺達は何を盗み出せばいいんだ？」

「——理子のお母さまがくれた、十字架」

「アンタって——ほんと、どういう神経してるのっ!？」

ガタンツ！とアリアは眉をつり上げ犬歯をむき出し、立ち上がった。

「アタシのママに冤罪を着せといて、自分のママからのプレゼントを取り返せですつて!?!アタシがどんな気持ちか、考えてみなさいよ!」

「おいアリア、落ち着け。理子の言うことでいちいち頭に来てたらキリがないぞ」

「頭にも来るわよ！理子！アンタはママに会いたければいつでも——」
「——アリア、落ち着け」

俺は少し殺気を出しながらアリアに言う。アリアは不満げに座ったので、俺は理子の方を見る。

——その顔は、ひどく悲しげなものだった。

「どうしてアリアを止めたの？」

「……理子。お前には——家族がもう、いないんだろ？」

「……え？」

俺の発言にアリアが驚いた表情をする。その中に、先程までの怒りはない。

「……何で、知ってるの？」

「なんとなくだ。わざわざ、あいつのところには危険を冒してまで行く理由がないからな。」

「……ブラドを知ってるのか？」

裏の理子になりながら聞いて来た。

「ああ、知ってる。と言うか「冥府の死神」の血が欲しいとか言っただけだから四肢切断して腹に穴開けてやったのに生きてるのか。あの犬っころ」

「……………」

理子は俺を見ながら魂が抜けてるみたいにポカーンとしていた。

「ま、俺のことはジャンヌに聞いてくれ。あいつがこの世界で一番俺の怖さを知ってるだろうから。」

「……………うん。理子の両親は、もういない。十字架は、理子の5歳のお誕生日にくださった物なの。あれは理子の大切なもの。命の次に大切なものなの。でも……………」

そこで理子は少し顔を伏せたかと思うと……………

「ブラドのヤツ。アイツはそれを分かかってて、あれを理子から取り上げたんだ。それを、こんな警戒厳重な所に隠しやがって……………ちくしょう……………」

憎悪に満ちた声で、ボソボソと続けている。その目にはうつつすらと涙が滲んでいた。

「ほ、ほら。泣くんじやないの。化粧が崩れて、ブスがもつとブスになるわよ」

泣いている理子の前に、アリアは横を向きつつトランプ柄のハンカチを投げた。

さつき理子に対して親がどうこう言おうとしたことへのお詫びのつもりだろう。

「ま、まあ……………とにかく、その十字架を取り戻せばいいんだな?」

と、場の空気を元に戻すようにキンジが言うと、こくり。

理子はアリアのハンカチで少し目を押さえ、涙を吸い込ませながらうなずいた。

「泣いちゃダメ理子。理子はいつでも明るい子。だから、さあ、笑顔になろっ」

まるで自己暗示をかけるように独り言した理子が顔を上げた時に、ちようどメイドさ

んが入ってきて……楚々とお冷やを注いで回ってくれた。

おかげで少し雰囲気も和やかになり、理子はいつものいたずらっぽい笑顔を取り戻す。

「……とはいえ、このマップね」

ノートパソコンを閉じながら、理子はテーブルに身を乗り出す。

マップ、と言っているのは第三者メイドがいるから、ゲームの話を装っているんだらう。

「ふつーに侵入する手も考えたんだけど、それだと失敗しそうなんだよね。奥深くまではデータが無いし、お宝の場所も大体しか分かんないの。トラップもしょっちゅう変えてるみたいだから——しばらく潜入して、内側を探る必要があるんだよ！」

「潜入、か……」

確かに、その方が急なトラブルの対策もしやすいし、妥当な所だろう。

「潜入って……どうすんだよ」

キンジが尋ねると、理子はばんざいするように両手を挙げて、

「三人には——紅鳴館のメイドちゃんと執事君になつてもらいます！」

第十八弾

銀狼

理子にとつても嫌なことを言われた翌日。

完全復活、と言うことで学校に来ていた。

……アリアの目が死んでいる。

何があつた……。

さらに、理子は俺たちも特訓をすつて来た。

その昼休み、俺たちは空き教室に来ていた。

理子が何故ここを指定したか分からなかつたが。

すると、そこに女子達がこの教室に向かつてきた。

俺と金次は咄嗟に、金次はロッカーに、俺はダンボールに隠れる。

そこに女子達がきて制服を脱いでいる。

俺は亜里沙と言う人間がいるから興奮したりしない。

と言うことは金次の特訓か。

そこへ理子からメールが届いた。

『しつかり見てるか確認！1分以内に理子の下着の色を当てて見て！出来なきやロツ

カーを開けちゃいます！」

「……俺は別に良いんだが。」

ま、取り敢えずハニーゴールド、とうって送信する。

理子は解答を見てニヤツとロッカーを見た。

あいつ、ロッカーが空いているの知ってたな。

そこへ一人の男が入ってきた。

小夜鳴先生だ。

探偵科インクェスタの先生で確かDNAとかの生物学とかも教えていた気がする。

小夜鳴先生は女子達が制服を脱いでいることに驚いていた。

そして、血の検査をするだけだったと言う。

検査キットを置いた瞬間、

「……ボソボソ」

と何かを呟いた。

確かルーマニア語だったか？

すると、レキがロッカーを見つめて、ロッカーを開けた。

金次がバレた。

そこへ風を切って何か走ってくるのを感じた。

俺は制服を脱いで入っている胡椒を振って、

「クシュン！」

くしゃみをして、女に変わる。

私はばつとダンボールから出て、

「金次！そこから出て！」

私がそう言うと、察したのか素早く金次が前に出た。

そこに、何かが飛び込んだ。来た。

それは一匹のオオカミだった。

ロツカーを突き飛ばしてその上に立った。

「ぐわあ！」

と、ロツカーから声が聞こえた。

武藤、あんたか。

その武藤が銃を取り出して、オオカミに向ける。

「ダメ（だ）！女子達は防弾制服を着てない！」

と金次と私が同時に言う。

そしてそのオオカミは小夜鳴先生に飛びかかった。

私は風を使い、オオカミの下に潜り込んで、

「白雷！」

下から電氣を通すように掌底を打った。

オオカミは苦しそうに声を漏らす。元来た場所から飛び出していった。

「待て！」

私は走り出して、レキに梓が脱いでいた制服を渡す。

「はい、レキ。どうせ来るんでしょ？」

私はレキにウインクして、風を使って跳び出した。

その風を使い、滑るように乗る。

途中、空中を踏みしめて飛び上がって、周りを見渡しながら、

何かが走っているのを見つけた。

それは一匹のオオカミだった。

「見つけた！」

私は風を解除して降りる。

「亜里沙！」

そこへ金次の声が聞こえた。

何処にあつたのかバイクにレキと乗ってきた。

私は風を使い、金次の近くまでいってスピードを合わせて並走する。

「金次! どうする!?!」

「取り敢えずあそこまでいくぞ!」

「了解!」

そう言つて私達はオオカミを見たビルまで行つた。

「どうする? 私は銃もナイフも持つてないよ。梓に銃を調達するように言つとかなきゃ。」

「そうか。レキは?」

「通常弾で仕留めます」

「……そうか。俺は正面から行く。レキは狙撃してくれ」

「はい」

そう言つて別れる。

私はレキが狙撃の体勢になつたところで、

「レキ、麻痺させるよね?」

「はい」

レキが無感情にはい、とだけ答えた。

そして、いつものようにレキは唱える。

「私は一発の銃弾。銃弾は人の心を持たない。ゆえに何も考えない。ただ、目標に向

かつて飛ぶだけ」

そう言つて引き金を引いた。

その弾は、オオカミを掠つていった。

「バン」

私はそういつて、レキの手をとつて風を使いオオカミがいた方は移動する。

「レキでも外すことがあるんだな」

「外してませんよ。(外してないよ)」

そう言つてオオカミが倒れている。

レキはそのオオカミに近づく。

「——脊椎と胸椎の中間、その上部を銃弾で掠めて瞬間的に圧迫しました。今、あなたは脊髄神経が麻痺し、首から下が動かない。ですが——5分ほどすればまた動けるようになるでしょう。元のように」

そう、レキは殺すために撃つたのではなく、麻痺させる為に撃つた。

「逃げなければ逃げなさい。ただし次は——2キロ四方何処へ逃げても私の矢があるを射抜く。——主を変えなさい。今から、私に」

そう言つたレキに対して狼はよろよろと立ち上がり、レキの前まで来ると、そのふくらはぎに頬ずりをした。まるで従順な犬のように。

その後、ハイマキと名付けられ、武偵犬としてレキに飼われることになった。

第十九弾 紅鳴館

レキが武偵犬（ハイマキ）を手に入れて、次の日。

私達は理子からの要請の紅鳴館こうめいかんに潜入するためにモノレールで理子を待っている。

何故、私かと言うと梓はやつぱり人に使われるのが嫌なんだってさ。

実際は三人が三人とも同じ武偵高の生徒って言うのが良くないって。なんとなく嫌な予感がするからと言っていた。

そんな訳で、理子を待っていると、

「キーくん、アリアと……誰？ お待たせ」

茶髪の人が近づいてきた。

金次は知っている人なのかとても驚いていた。

「……………り、理子！ なんでその顔なんだよ！」

「くふつ。理子、ブラドに顔が割れちゃってるからさあ。防犯カメラに映って、ブラドが帰って来ちゃったりしたらヤバいでしょ？ だから変装したの」

「だったら他の顔になれ！ なんで……………よりによつてカナなんだ！」

「カナちゃんが理子の知ってる世界一の美人だから。それにカナちゃんはキーくんの太

切な人だもんね。理子、キーくんの好きな人のお顔で応援しようと思ったの。怒った？」

「……いちいち、ガキの悪戯に腹を立てるほど俺はガキじゃない。行くぞ」

「その前に……誰？」

理子は私を指差した。

「あ、私？私は風切亜里沙。梓のそうだね。双子、かな。梓は突然、急な依頼が入ったからそつちに行つてるよ。『理子悪かったな』だつてさ。」

「そうなんだ」

私達はぼーんとしていたアリアを忘れて歩いて行く。

アリアは金次がこの女の人を知っている事にとても驚いていた。

「な、何。急にどうしたのよキンジ。理子が……ずいぶん美人に化けてきたけど、これ、誰なのよ。ねえ——キンジ、理子！ ちよつと！ 誰なのよそれ！ ねえ——カナつて誰よつ！」

金次と理子は全然取り合わず、私達はそのままモノレールに乗り、降りた先からタクシーで目的地の紅鳴館まで来たわけだが、その間カナに変装した理子とキンジが話しかけ、それをアリアが不安そうに見ている、それをぼーつと見ていた私と、空気は良くなかった。

「の、呪いの館って感じね……」

紅鳴館を見てアリアが言った。金次も同じ気持ちなのか顔をひきつらせていた。

私は梓と記憶が一緒だからもつと怖い館を見たことがある。

理子が管理人に挨拶をしようと行ったので静かに待つ。

理子がベルを鳴らし少し待つと、

「あれ？遠山くんに神崎さん」

小夜鳴が出てきた。

「いや、依頼を出したらまさか武偵高の生徒が来てくれるとは思いませんでしたよ」

「本当ですわ。まさかこの子達と知り合いだったなんて」

なんと、ここの管理人はこの小夜鳴だったらしい。

理子も驚きを隠しながら言う。

「それに君は前に助けてくれた」

「風切亜里沙です。東京武偵高の風切梓の双子なんです」

「そうだったんですねえ。」

「今回は梓が急な依頼が入ったものですから取りあえず、人数合わせで私が来させても

「らいました。」

「わざわざありがとうございます。そう言う事情があるなら言ってくれば良かったんですけどね」

小夜鳴は、はははっと笑う。

その笑い方に嫌な予感がした。

しかし、アリアも金次も何も感じて無さそうなので心だけに留めておこう。

「それでは私はこれで失礼しますね」

「はい。ここまで、遠山くん、神崎さん、風切さんを連れて来ていただきありがとうございます。良かったです。」

そうして、理子は会釈をして紅鳴館を出て行った。

「それでは、各自に部屋が用意されてあります。」

そこで、着替えをしてもらい、御飯時だけ働いてもらいます。それまでは好きにしてもらって構いません。二階にビリアードなどもありますから、好きに使ってください。私は地下の研究室にいますから、その御飯時に呼びに来てください。お願いしますね」

「は、」

そこから私達は別れる。

私の部屋に入り、執事服をとる。

あとで小夜鳴に聞いたところ梓が来ると思っていたので、メイド服を準備できなかったのだとか。

私が執事服を着て、金次も同じ執事服を着る。

金次には小夜鳴に言われた通りに言った。

最後のアリアで、まだ来ていなかっただったのでアリアの部屋に行く。

「アリア………ごめん邪魔だったね」

「ちよ、ちよつと待ちなさい！」

部屋に入ると「こういうのもいいわね……」なんて呟いていたので見て見ぬ振りをして出て行く。

アリアは慌てて出て来たが、分かっている分かっていると行って受け流した。

あと、金次と同じ事を聞かれたので同じように答えた。

小夜鳴へのご飯は少し多っただけのレアステーキだった。

少し塩胡椒を振ってにんにくとかは何も使わない。

ここでもう既におかしい。

でも証拠が少ないので何も言わない。

こうして初日が終わりを告げた。

第二十弾 作戦

あつという間に7日目の深夜2時。

当初の打ち合わせにあった理子達との定期連絡の時間。

それは3者間通話サービスを使った携帯で行われている。

しかし、何故か私のはなく、キンジの部屋に赴いてそれに参加している。

「——アリア、理子、聞こえてるか」

『聞こえてるわ。理子、あたしの声はどう?』

『うっうー! ダブルおっけー! そんなじゃアリアから中間報告ヨロ!』

テンションが1人だけ違う。

『……理子。あんたの十字架は、やはり地下の金庫にあるみたいよ。1度、小夜鳴先生が金庫に出入りするのを見たけど……青くてピアスみたいに小さい十字架よね? 棚の上にあつたわ』

『——そう、それだよアリア!』

「だが、地下にはいつも小夜鳴がいるから侵入しにくいぞ? どうする」

『だからこその2人チームなんだよ、アリアとキーくんは、超・古典的な方法だけ——』

「誘き出しルアー・アウト」を使おう。先生と仲良くなれた方が先生を地下から連れ出して、その隙にもう片方が十字架をゲットするの。具体的なステップは……」

そうして理子は作戦を修正しながら私達にこれからの動きを指示していった。

潜入10日目の夜。

作戦も順調に遂行しつつ、その日も理子達と電話連絡をすることになっていたが、私は前回キンジの部屋に行つて会話に参加したが、今回はアリアの部屋に行つてみた。

理由はまあ、3人のリアクションでも楽しもうと思つて。

入つた時は普通の反応だった。

「亜里沙？あんたなんでこっちに來てるのよ」

「だって、私は女の子だよ？金次に襲われちゃう」

「それはないと思うわよ？今からキンジの部屋に……」

「おつ、時間だね。繋がないと何かあつたと思われるよ？」

「ま、あんただから良いか、面倒だから余計な事言わないでよ」

「へいへい」

それからアリアは携帯を取り出して理子達と繋いでいった。

『なあアリア。亜里沙がこっちに來てないんだが、そっちにいたりしないか？』

「単に私のところで参加するみたいよ。」

『そうなのか』

「理子、キンジ。マズいわ。掃除の時に調べただけど……地下金庫のセキュリティが、事前調査の時より強化されてるの。気持ち悪いぐらいに嚴重。物理的な鍵に加えて、磁気カードキー、指紋キー、声紋キー、網膜キー。室内も事前調査では赤外線だけってことになってたけど、今は感圧床まであるのよ」

『な……なんだそりや……』

……なんだそりや。

感圧床って確か、床に負荷がかかったら警報が鳴るんだよね。

『よし、そんじやプランC21で行くかあ。キーくん、アリア、キョーやん、なんにも心配いらないうよ。どんなに嚴重に隠そうと、理子のもは理子のも！ 絶対お持ち帰り！ はうー！』

さすが泥棒。

『んで、いま小夜鳴先生とは誰が仲良しになれてるのかな？ かなかな？』

『アリアじゃねーの。お前、新種のバラにアリアとか命名されて喜んでたもんな』

「よ、喜んでなんかないわよつ。何言ってるの？ バカなの？」

『おいアリア、気をつけろよ？ 小夜鳴には、女関係で悪いウワサがある』

「別に……悪い人には見えないけど？」

『いや。俺には少し怪しく見えるぞ。少なくとも、あまり好きじゃない』

『『おお？ おおおー？ 痴話ゲンカつてやつですか？』』

『『違う』わよ！』

理子と私はその話に割り込む。

なかなかお似合いだね。

『じゃあ、とりあえず先生を地下金庫から遠ざける役目はアリアで決まりね！ どう？』

できそう？』

「……彼は研究熱心だわ。おびき出しても、すぐ研究室のある地下に戻りたがると思う」
『夜もいつも起きてるし……いつ寝てるのか全くわからん。何の研究をしてるんだろうな』

「こないだちよつとお喋りしたとき聞いたけど……なんか、品種改良とか遺伝子工学とかって言ってたわ」

『キーくん、アリア。じゃあ時間でいえば、何分ぐらい先生を地下から遠ざけれそう？』

『アイツの普段の休憩時間の間隔から見ても、まあ、10分つてとこだらうな』

『10分かあー。なんとか、15分がんばれないかなあ。たとえばアリアがー、ムネ……』

は無いから、オシリ触らせたりして。くふっ』

「バ、バカ！ 風穴！ あんたじゃないんだから！」

『おおこわいこわい。まあその辺は理子が方法考えとくよ！ じゃ、また明日の夜中2時にね！ 理子りん、おちまーす！』

理子は言いたいことだけ言つて消えた。

「キンジ、ちよつと聞きたいんだけど」

まだ話すの？

「……仮に、あくまで仮によ？ あたしがあのバラのこと、喜んでたように見えてたとしたら、ね？ どうしてあんたが不機嫌になるのよ」

『……別に不機嫌になんか』

「なつてるじゃない」

『そんなこと、お前に関係ない。切るぞ』

「ちよつと待ちなさいよ。この流れでついでに聞いとく。——カナつて誰。……あんたの……その、昔の……いわゆる、えつと……も、元カノ、とかだつたり……するの？」

『それこそ——そんな事、お前には関係ないだろ』

「——そうね。関係ないわね。誰にだつて……触れられたくない過去はあるもの。自分でもなんでか分かんないけど、今のは……ちよつと踏み込みすぎたわ。あたし、理子が

カナって子に変装した時のあんたの態度、ヘンに……気になってたの。でも、もう聞かないよ。ごめん。謝る」

『別に謝らなくていい。俺も……ちよつと言いがキツかったかもしれん。ごめんな』

それからキンジとの通話を切ったアリアは、力なくベッドに横になり背中を向けた。

私はその時思った感想を言う。

「アリア」

「……………何よ」

「金次のあの反応について言っておくよ」

「……………」

「あの反応は親しい家族に向ける反応だ。」

「……………」

「しかも、その人は既に亡くなっている可能性がある。だからこそそのあの反応になった。それだけは私の感想として送っておくよ」

そう言っ私は部屋から出た。

第二十一弾 気配

そして、作戦最終日。

私は普通にいる。

全員が全員何処かへ行けば怪しまれる。

アリアが誘い出すとはいえ、時間がかかれば危険になる。

そこで少しサポートするのが私の仕事だ。

まあ、実際トランシーバーも何もないからどうなってるのか分からないけど。

そこへ理子から電話がかかってきた。

「はい？」

『やばい！小夜鳴が戻ってくる！如何にか出来ない!？』

んーと私は考える。

ピコンつと考えついて、

「アリアに静電気って言っというて」

『へ？あ、うん。わかっ、ってそれで大丈夫なの!？』

「大丈夫だよ」

そう言つて私は電話を切る。

そして、扉の向けて側に風の壁を設置した。

それから壁の前に立つて外の声を聞く。

「痛っ！」

「大丈夫ですか？」

そうアリアと小夜鳴の声が聞こえる。

「もしかして静電気ですか？」

「ははっ、この時期にですか？ま、可能性はありますね」

その会話が終わった瞬間に風の壁を解除。

すぐさま、扉を開ける。

「痛っ！」

「す、すみません！大丈夫ですか!？」

「ああ、大丈夫ですよ大丈夫」

「すみません。雨が降つて来ましたのでお呼びしようと思つたのですが、それが裏目に出てしまいましたね。すみません、絆創膏取つて来ます。少し待っていてください」

「はい」

その返事を聞いて、少し小走りする。

私は小さく溜息をつきながら走って行って、救急箱を取って戻った。

「二週間、ありがとうございます」

こうして作戦も成功してこの潜入が終わった。

「いえいえ、私も助かりました」

「すみません。最後の最後にミスしてしまつて」

「大丈夫ですよ。それでは」

「「ありがとうございます」」

そう言つて、理子との待ち合わせ場所である横浜ランドマークタワーに急いだ。

高度296メートル。

日本一高い超高層ビルである横浜ランドマークタワー。

俺達は取り返した十字架の受け渡しのために、理子が指定したこのビルの屋上に来ていた。

「キーくうーん！」

そんな俺達の元に理子がとててとと改造制服をなびかせながら近寄ってきて金

次に抱きつく。

「やつぱりキーくんとアリアは名コンビだよ！ 理子にできないことを平然とやつてのける！そこにシビれる憧れるウー……あれ？ 亜里沙は？」

「ああ、済んだから帰ったよ。『疲れた』だつてさ」

「そうなんだ」

「キンジ。さつさと十字架をあげちゃつて。なんかソイツが上機嫌だとムカつくわ」

「おーおーアリアんや。キーくんを取られてジエラシーですね？ 分かります」

「ちがうわよぎいー！」

喚くアリアを横目に金次はポケットから十字架を取り出し理子に見せる。

「これだろお望みの物は。やるから離れろ」

渡された理子はそれを素早く首につけていた細いチェーンに繋ぐ。

「乙！ 乙！ らん・らん・るー！」

そして子供のように飛んだり跳ねたりして喜びを表現する理子。

それにはアリアがますます不機嫌になる。

「理子。喜ぶのはそのくらいにして、約束は——ちゃんと守るのよ？」

「アリアはほんつと、理子のこと分かつてなあーい。ねえ、キーくうーん」

苛立つアリアにそう言った理子は、怪しく笑いながら金次を手招きした。

「お礼はちゃんとおあげちゃう。はい、プレゼントのリボンを解いてください」

言われて金次が理子の頭に結ばれていたリボンを解くと、理子は怪しく笑ってから金次に不意打ちのキスをしたのだった。

ヒステリアモードにしたかったのか？

「り……りりりりり理子おっ!? な、なな、ななな何やってんのよいきなり!」

それを見たアリアが動揺しながらそう叫ぶと、理子は何も言わずにふわっと移動して、階下へ続く扉の前に立ちふさがった。

「ごめんねえーキーくうーん。キーくんがさつき言った通り、理子、悪い子なお——。

この十字架さえ戻ってくれば、理子的には、もう欲しいカードは揃っちゃったんだあ」

「もう一度言おう——『悪い子だ、理子』。約束は全部ウソだった、って事だね。だけど……俺は理子を許すよ。女性のウソは、罪にならないものだからね」

この感じ……ヒステリアモードだな。

まあ、あんなに近づいたらなるよな。

「とはいえ——俺のご主人様は、理子を許してくれないんじゃないかな?」

「ま、まあ……こうなるかもって、ちよつとそんなカンはしてたけどね! 念のため防弾制服を着ておいて正解だったわ。キンジ、闘るわよ。合わせなさい。梓も」

俺関係ないんだが。

「くふふつ。そう。それでいいんだよアリア。理子のシナリオにムダはないの。アリアとキーくんを使って十字架を取り戻して、そのまま2人を斃す。キーくんも頑張ってる？ せっかく理子が、初めてのキスを使ってまでお膳立てしてあげたんだから」

理子はスカートの中から、ワルサーP99を2丁抜き放った。

「先に抜いてあげるよ」

「へえ、気が利くじゃない。これで正当防衛になるわ」

それを聞いたアリアも理子と同じく漆黒と白銀のガバメントを抜き放ち構えた。

「風穴あける前に——1個だけ教えなさいよ、理子。なんでそんなモノが欲しかったの。何となく分かるけど……ママの形見、ってだけの理由じゃあないわよね？」

「——アリア。『繁殖用牝犬』って呼ばれたこと、ある？」

「繁殖用牝犬……？」

「腐った肉と泥水しか与えられないで、狭い檻で暮らしたことある？ ほらあ。よく犬の悪質ブリーダーが、人気の犬種を殖やしたいからって——檻に押し込めて虐待してるってニュースがあるじゃん。あれだよ、あれ。あれの人間版。想像してみなよ」

「何よ、何の話……？」

そして理子は突然感情を爆発させたかのような表情をしてみせた。

「ふざけんなっ！ あたしはただの遺伝子かよ！ あたしは数字の『4』かよ！ 違う！

ちがうちがうちがう！ あたしは理子だ！ 峰・『理子』・リユパン4世だつ！ 『5世』を産むための機械なんかじゃない！」

「だから？」

理子が『個』を主張している時に俺は割り込んだ。

「………何？」

「繁殖用牝犬だったからどうした？ まだ、子を産める可能性があるだけマシじゃないか？」

「お前！ 私の苦しみも知らないくせに！ 「知ってるよ」

「………何？」

「知ってるんだよ。それより下の苦しみを。俺は奴隷だったから」

「………！」

「腐った肉も泥水すら与えられない。それがどんなキツさが知ってるか？ 偶にくれたと思ったら、戦死した友人だぞ？ 発狂して精神が壊れた友人はたくさんいる。お前は考えられるか？ 自分の親しい友人、もしくはお前の大切な両親を食べないといけないとしたら。そう考えるとそうやって与えられるだけ救われものだ。と言うかジャンヌに聞かなかったか？ 俺の正体。ま、ジャンヌが信じてるかは知らないが。さ、話の続きをどうぞ」

そうやって空気を読まず続きを促す。

理子はどうするか迷っていたが、とりあえず話を続けることにしたようだ。

「……『なんでそんなモノが』って訊いたよね、アリア。この十字架はただの十字架じゃないんだよ」

「これはお母さまが、理子が大好きだったお母さまが、『これは、リュパン家の全財産を引き替えにしても釣り合う宝物なのよ』って、ご生前に下さった——一族の秘宝なんだよ。だから理子は檻に閉じ込められてた頃も、これだけは絶対に取られないように……ずっと口の中に隠し続けてきた。そして——」

そこまで言った理子は、ツーサイドアップの髪の毛のテールをわささつ、と自在に動かしてみせる。

「ある夜、理子は気づいた。この十字架……いや、この金属は、理子に『この力』をくれる。それで檻から逃げ出せたんだよ。この力で……!」

そして理子はその髪で背の襟に隠していた2本のナイフを器用に持ち構えた。

その様はさながら4刀流。言うならアリアと同じ双剣双銃だな。

でも、3人とも気付いてないな。この場に『別の気配が近付いてる』ことに。

そう言うことに敏感な俺だから感じていることだけだ。

「さあ……決着をつけよう、オルメス。お前を斃して、理子は今日、曾お爺さまを超える。

それを証明して、自由になるんだ……！ オルメス、遠山キンジ——お前たちは、あたしの踏み台になれ！」

理子が叫んだ瞬間。

バチツツツツツツ——！！

小さな雷鳴のような音が上がり、突然理子が強張った顔をして振り返り力なく膝をついた。

その後ろにいた人物は……

「小夜鳴先生——!?!」

アリアが言ったとおり、館の管理人、小夜鳴だった。

第二十二弾 正体

理子との待ち合わせをして、話をしているところに小夜鳴がスタンガンで理子に当たった。

小夜鳴は手にしていたスタンガンを足元に捨ててから、懐にあった拳銃を取り出し倒れる理子の後頭部に狙いを定めた。

「遠山君、神崎さん、それに風切君も。ちよつとの間、動かないでくださいね？」

小夜鳴は俺達に落ち着いた口調でそんな制止を促す。

そのすぐあと、小夜鳴の後ろ、扉の向こうの階段からハイマキと同じ銀狼が2匹姿を現した。

「前には出ない方がいいですよ。3人が今より少しでも私に近づくと、襲うように仕込んでありますんで」

それを聞いた金次が試しに少しだけ動こうとした瞬間、銀狼達は金次を睨み付けた。

「よく飼いやつらしてるな。あの時もオオカミと打った芝居だったってわけかよ。」

「紅鳴館でのお3人の学芸会よりは、マシな演技だったと思いますけどね？」

小夜鳴が言ってる間に、銀狼の1匹が理子から武器を取り上げ屋上から投げ捨てる。

「3人ともそのまま動かさないで下さいね。この銃は30年前に造られた粗悪品でして、引き金が甘いんです。つい、リユパン4世を射殺してしまつたら——勿体ないですからねえ」

理子がリユパン家の人間だって知ってるのか。

それに銀狼はブラドの下僕だったからな。

「どういうこと……？　なんであんたが、リユパンの名前を知ってるのよ！　まさか……まさか、あんたがブラドだったの!？」

「彼は間もなく、ここに来ます。狼たちもそれを感じて、昂ぶっていますよ」

「そ、そう。それにしても、そのブラドから理子のことも聞いて、銃も狼も借りて、そのくせ『会つたことがない』だなんて……半月前は、よくも騙してくれたわね」

「騙したワケではないんです。私とブラドは、会えない運命にあるんですよ」

「……あの時あんた、ブラドは『とても遠くにいる』なんて言つてたけど……あのあと、コツソリ呼んでたつてわけね。あたしたちの学芸会に気づいてながら泳がしてたのは……1人じゃ勝てないから、ブラドの帰還を待つてたんでしょ」

アリアがそんな推理をしている間にオレとキンジはアイコンタクトでやることを理解し、状況を把握しにかかつていた。

しかし、まずは理子をどうにかして助けないとダメだが、

ブラドは俺一人で事足りる。

そうアイコンタクトする。

「遠山君。ここで君に1つ、補講をしましょう」

「……補講？」

突然小夜鳴は金次に話を振り、金次も分析する作業をやめ視線を小夜鳴に向ける。

「君がこのリュパン4世と不純な遊びにふけていて追試になったテストの、補講ですよ。遺伝子とは——気まぐれなものです。父と母、それぞれの長所が遺伝すれば有能な子、それぞれの短所が遺伝すれば無能な子になります。そして……このリュパン4世は、その遺伝の『失敗』ケースのサンプルと言えます」

言つて小夜鳴は倒れる理子の頭を石でも蹴るかにように蹴った。

「10年前、私はブラドに依頼されて……このリュパン4世のDNAを調べたことがあります」

「お、おまえだったのか……ブラドに、下らないことを……ふ、吹き込んだのは……！」

「リュパン家の血を引きながら、この子には——」

「い……言、う、な！ オ、オルメスたちには……関係……な、い……！」

「——『優秀な能力が、全く遺伝していなかったのです』。遺伝学的に、この子は『無能』な存在だったんですよ。極めて稀なことですが、そういうケースもあり得るのが遺伝で

す」

「言われた理子は、知られなくなかった事実を俺達に知られて、顔を背けるように地面に額を押しつけた。

「自分の無能さは自分が一番よく知っているでしょう、4世さん？ 私はそれを科学的に証明したに過ぎません。あなたは初代リユパンのように1人で何かを盗むことができな。先代のように精鋭を率いたつもりでも……ほら、この通りです。無能とは悲しいですね。教育してあげましょう、4世さん。人間は、遺伝子で決まる。優秀な遺伝子を持たない人間は、いくら努力を積んでも——すぐ限界を迎えるのです。今のあなたのようにね」

「言った小夜鳴は、懐からすり替えてきた二セモノの十字架を取り出し、理子から本物を奪うと、二セモノを理子の口に押し込んだ。

「あなたにはそのガラクタがお似合いです。あなた自身がガラクタなんですからね。ほら。しっかり口に含んでおきなさい。昔、そうしていたんでしょ？」

「そして小夜鳴は理子の頭を踏み付け、その理子からは嗚咽だけが聞こえてきていた。「い、いいかげんにしなさいよッ！ 理子をイジメて何の意味があるのよ!」

「——『絶望が必要なんです』。彼を呼ぶにはね。彼は、絶望の詩を聴いてやってくる。この十字架も、わざわざ本物を1度盗ませたのは……こうやってこの小娘を1度喜ばせ

てから、より深い絶望にたたき落とすためでした。おかげで……いいカンジになりましたよ。……遠山君。よく見ておいてくださいよ？ 私は人に見られている方が、『掛かりがいい』ものでしてね」

すると、金次が変わるとかのような感じがした。

「ウソ……だろ……？」

「そうです、遠山君。これはヒステリア・サヴァン・シンドローム——」

「ヒステリア……サヴァン？」

「遠山君。神崎さん。風切君。しばし、お別れの時間です。これで、彼を呼べる——ですがその前に1つ、イ・ウーについての講義をしてあげましょう。この4世か、ジャンヌから聞いているでしょう。イ・ウーは能力を教え合う場所だと。しかしそれは彼女たちのように低い階梯の者達による、おままごとです。現代のイ・ウーには、ブラドと私が革命を起こした。このヒステリア・サヴァン・シンドロームのように、能力を写す業をもたらしただけです」

「聞いたことがあるわ。イ・ウーのヤツらは何か新しい方法で人の能力をコピーしてる」
「方法自体は新しいものではありません。ブラドは600年も前から、交配ではない方法で他者の遺伝子を写し取って進化してきたのです……つまり、『吸血』で。その能力を人工化し、誰からでも写し取れるようにしたのが私です。君たち高校生には難しいかも

しれません——レトロウィルスを使った選択的なDNA導入を用いて、ね。それから優れた遺伝子を集める事も私の仕事になりました。先日武偵高にお邪魔した時も、採血で優良そうな遺伝子を集める予定でしたが……遠山君がノゾいていたおかげで、あれは失敗してしまいましたね。不審な監視者がいれば襲うよう狼たちに教え込んであったのが、アダになりました」

「ブラド。ルーマニア。吸血……そう、そういうことだったのね。どうして今まで気づかなかつたのかしら。キンジ。梓。ナンバー2の正体——読めたわ。ドラキュラ伯爵よ」

やつと分かつたか。

「ドラキュラ・ブラドは、ワラキア——今でいうルーマニアに実在した人物の名前よ。ブラレスト武偵高で聞いたことがあるの。今もまだ生きてる、っていう怪談話つきでね」

「——正解です。よくご存じでしたね。遠山君たちは、間もなくそのブラド公に拜謁できるとですよ。楽しみでしよう？」

そこからまた長々と語り出した小夜鳴の話によると、ブラドは人間を吸血していくにつれて小夜鳴という人間の殻に隠されてしまったらしい。

そしてそのブラドを呼び出すのに、金次の兄の能力を使ってるという。

「さあ、かれがきたぞ」

話を終えた小夜鳴は変化を遂げる。

いや、変化というより『変身』か。

びり、びりびり、とスーツが破け、その下から出てきた赤褐色の肌。

筋肉はどんどん盛り上がり、身体はケモノのように毛むくじやらになった。

「Ce mai faci... いや、日本語の方がいいだろう。初めまして、だな」

声帯の変わった不気味な声の小夜鳴、ブラドは、そんな挨拶をしてきた。

そして足元にいた理子の頭を片手で掴み軽々と持ち上げた。

「おう4世。久しぶりだな。イ・ウー以来か？」

その瞬間、理子から銃が逸れたのを見逃さなかった金次が、その腕と拳銃を撃ち抜く。

しかし撃たれたブラドの腕は何事もなかったかのように治ってしまった。

「遠山。お前は、トマトを握り潰せるだろ？ オレにとつて、人間の頭を握り潰すのはそ

の程度のコトだ。だからもう、こんな道具で脅す必要もねえ」

言ったブラドは持っていた拳銃を握り潰してしまった。

「ブ……ブラドお……！ だ、だました、な……！ オ、オルメスの末裔を斃せば、あ、

あたしを解放するって、い、イ・ウーで……約束、した、くせに……！」

「——お前は犬とした約束を守るのか？ ゲウウウアバババハハハハハハ！ 檻に戻

れ、繁殖用牝犬。少し放し飼いにしてみるのも面白えかと思っただがな。結局お前は

自分の無能を証明しただけだった。いいか4世。お前は一生、オレから逃れられねえんだ！ イ・ウーだろうがどこだろうが関係ねえ。世界のどこに逃げて、お前の居場所のはあの檻の中だけなんだよ！ ほれ、これが人生最後の、お外の光景だ。よく目に焼き付けておけよ！ ゲハッ、ゲババババッ！」

言われた理子は、頭を掴まれて振り回されながら、何の抵抗もできずに、見れば大粒の涙を流していた。

「それはどうかな？」

「あ？」

そうして俺が割り込む。

「分からないか？ 犬っころ。お前をせっかく、四肢切断して土手っ腹に穴開けて頭に銃弾を撃ち込んでやったのに」

「て、てめえ！ まさか！」

「そうだ。俺が『赤霧碧』だ。ま、あんな体験したことなかっただろうから覚えてるか」「テメエ！ 死んだんじゃなかったのか!？」

「死んだよ。しつかり。だから名前が違うんだよ。そうだ。理子がまた檻に戻るって？ それはありえない。何故なら俺がいるから。犬っころごとき傷を負うまでもない」

「テメエ！ さつきから舐めやがって！」

「かかってこいよど三流。格の違いを見せてやる」
こうして俺とブラドの戦いが幕を開けた。

第二十三弾
ブラド

「かかってこいよど三流。格の違いを見せてやる」

そう俺はブラドに言った。

「凶に乗るなよ！クソガキ！」

そう言つて飛び出してきた。

その横を二匹の銀狼が駆け抜けてくる。

俺はグロックを抜いて、レキがやっていたことを実践する。

レキのやっていたような軌道を銃弾が描き、脊椎と胸椎の間を瞬間的に圧迫する。

銀狼たちはそのまま崩れて行つて、その向こうからブラドが拳を振るってくる。

俺は下に潜り込んで手首を撃ち、足に風を纏つてオーバーヘッドキック見たく蹴り飛ばす。

ブラドは少しだけ吹き飛んだがやつぱり傷は回復していた。

「ゲバババ！効かねえよ！」

「知ってるよ。金次！アリア！理子を頼む！あとこれも！」

そう言つて、胸ポケットから十字架を取り出す。

「これは!？」

「それが本物だ。理子が押し付けられたのもブラドが持っているやつも違う。が、説明は後だ。ブラド、お前に懐かしいものを見せてやるよ」

そう言つてブラドの方に向き直り、

『赤霧の名の下に』

そう口にする。

すると、雰囲気が変わる。

「これは!?!あの時の」

「そうだ。お前を瞬殺したやつだ」

「ゲバババああ!待つてたぞ!それにやり返す時をなあ!あのヒステリア・サヴァンの遠山と手を組まれても厄介だ。『ワラキアの魔笛』に酔え。」

そう言つて胸が膨らむほど息を吸つていた。

…まさか!

「金次!耳を!」

ビャアアアアアアウヴァイイイイイイイイイイイイ——ツ!!

そう叫んだ。

俺の予想では金次のヒステリアモードを無くす為のさげびだろう。後ろでは金次が

ヒステリアモードが切れたことに驚いていた。

「ゲバババハハ！これで遠山は使い物にならねえぞ！その雰囲気はテメエは効かなかつたか」

「俺のは金次と違って血流とかじゃないんでねっ！」

そう言つて目を撃つ。

一つをわざと口元に撃つと、そちらを庇つた。

（ほう？！目を守らず口を守るか）

俺はそれを見て、ナイフを取り出し、弓を撃つ様な構えを取る。

そして、ナイフの横を摩擦が起こる様な撃ち方をして風を送ると、その銃弾が燃え上がった。

その弾が肩の目の模様のところが焼ける。

「ゲバババハハ！効かねえな」

「いや、前にこれで腹に穴開いてるから」

思わずそうツツコミをいれる。

すると、ブラドが5メートルはあろうかという携帯基地局アンテナを屋上からむしり取つて自らの武器にしていた。

「ゲバハハハ、これでも食らえ！」

そう言つて、そのアンテナを投げてきた。

俺はそのアンテナをしゃがみながら避け、と同時に自分の元で竜巻を起こした。

アンテナは風によつて打ち上げられて俺の横に落ちる。

ブラドはその間に走つてきて拳を振り上げて、叩きつける様に殴つてくる。

俺は風を手に纏い、思いつき殴つた。

「おおりやあー！」

衝撃波が発生してわざと金次たちの元へ飛んでいく。

「粹！」

「大丈夫だ。カスリもしてない。が、このままではラチがあかない。お前らがトドメを

させ。俺がわざとやられるからその隙に」

「だが、俺はヒステリアモードじゃないぞ!？」

「理子、金次に胸を押し付けてやれ。」

「な、何言つてるのよ!あんた!」

「アリアよりその方が早い。準備が出来たら一発ブラドを撃て」

俺はそう言い舌を出して、走り出す。

ブラドは先程投げたアンテナを拾っていた。それを横殴りに振つてくるのでしゃがんで避け、膝を撃つ。

倒れ込んできたので顎を蹴り上げ、コケたところで足の裏を撃つ。

そして、ワイヤーを取り出し足を縛って、切る。

「ちっ！小賢しい！」

そう言っつてブラドは体を起こしながらアンテナを振ってくる。

俺はそれをジャンプして避けるが、もう一度横殴りにしてきて、防ぎ切れず飛ばされる。

「ぐふっ！」

「ハハ！そんなものか赤霧！」

そう攻め続けてくるブラドに、パンつと音が鳴った。

その方を見ると金次が引き金を引いていた。

金次はこくつと頷く。

……………しっかり意図が通じた様だ。

「効かねえよ！」

「それはどうかな？」

「何？」

そう疑問を持ったブラドに俺は風を使って空を飛び、

「パイルトルネード！」

そう言つて、腹に文字通り風穴を開けた。

しかし、ブラドはアンテナを振るつてくる。

俺は吹き飛ばされるが金次たちが四つの魔蔵をしつかり撃ちぬいた。

そして、倒れたブラドにアンテナが倒れて下敷きになっていた。

俺は頭を叩いて、元に戻る。

そうして、金次たちが理子と話してる間に倒れている銀狼二匹に近づく。

「よう。お前たちの主は倒した。」

銀狼はしつかりと俺を見つめる。

「これからはお前たちの好きにするといい。元の森に帰りたければ帰してやる。それでも、俺と来るならレキが飼っているハイマキと楽しく暮らせばいい。来るならついてこい。」

そう言つて俺は金次たちの方へ行く。

銀狼たちはゆつくりだが、俺についてきた。

俺が金次たちに近づくがそこから理子がハンググライダーで飛び去つて行つた。

金次たちはやれやれといった表情で見えていた。

こうして、戦いが幕を閉じた。

イ・ウー

第二十四弾 不可視の銃弾

ブラドとの戦いが終わって数日。

俺はレキの部屋に泊まっている。

実際、レキの食生活に疑問を持って晩飯を作りに来ただけ。

流石に毎日カロリーメイトはダメだと思う。

しかし、何故か泊まっていけと言う。

出ようとする、ハイマキに襲われる。

……………何でだよ。

と言うわけで仕方なくレキの部屋に泊まっている。

まあ、学校には絶対に部屋をずらして出る。

今日、学校に行くと、珍しく金次とアリアと一緒に登校して来た。

……………本当に珍しい。

そして、実習で俺は強襲科に来ている。

誰も戦いに来ないので、実際暇だ。

と、そこへ、

「ちよつと」

「ん？」

一人の女子が近づいて来た。

そして、この人の変装を見たことがある。

「なんだ？」

「神崎・H・アリアって子はどこにいるかな？」

「そこにいるじゃないか。というか、わざわざ聞かなくても分かるだろ？金次の兄よ」

「あら？私の事を知ってるの？」

「さあな。でも、前に理子がお前に変装していた。だから名前も知ってるし、何故ヒステ

リアモードかも大体わかる。なあ、カナとやら」

「ふふつ。そこまで知ってるのね。流石は赤霧碧と言ったところかしら」

「ほう？俺のことも知ってるか。お前らの親玉から聞いたのか。で？今日はアリアにな

んの御用で？」

「そうね。アリアを試したいのよ」

「試す？」

「ま、見てのお楽しみ」

「アリアの命が危ないと思つたら乱入するぞ？」

「ええ。教プロフェッショナル授が今の赤霧を見てこいつてね」

「イ・ウーにいる偽物見てりやいいだろう」

「偽物と分かつてて見る必要はないの」

「さいで」

「それじゃね」

そう言つて、アリアの方に歩いていく。

アリアは突然現れたカナに驚いていた。

そして、何かを話した後アリアが紛糾し流れるに戦うことになつていた。

蘭豹も酒に酔っているのかとても笑いながらM500をぶつ放す。

それが開戦の合図になり、アリアがアルllカタを仕掛けに行こうとするが、

「うぐっ！」

見えない弾丸に撃たれた。

そして、数発アリアに撃ち込まれる。

………恐らく、あの銃は『ピースメーカー』

俺が知ってる中で一番、早撃ち出来る。

「おいで、神崎・H・アリア。もうちよつと——あなたを、見せてごらん」

そう言つてカナはもう一発アリアに撃ち込んだ。

アリアは足払いされたかのように倒れる。

「蘭豹、やめさせろ！　こんなのどう考えても違法だろ！　また死人が出るぞ！」

そう入つて来た金次が叫ぶ。

「おう死ね死ね！　教育のため、大観衆の前で華々しく死んでみせろや！」

「カナ！　やめろ！」

「くおらこの遠山ア！　授業妨害すんなや！　脳ミソぶちまけたいんか！」

そう言つて金次の足元に威嚇射撃する。

金次は何かないかというような感じで周りを見て、

俺を発見し、こちらに走つて来た。

「梓！」

「なんだ？」

「今すぐカナを止めてくれ！　アリアが殺される！」

そう金次が言う。

………と言われても試すだけって聞いているしな。

「はあ、分かったよ。蘭豹に言っといてくれ「最強が入った方が面白いだろ?」と」
そうやって俺は走り出す。

グロックとベレッタを抜いてカナに撃つ。

その弾は髪を振るっただけで弾かれた。

「あ、梓!?!何やってるのよあんた!」

「選手交替だ。アリア。流石にお前でも勝てん。あの弾が見えてないのならな」

「な、なんですって!?!」

「もう割り込み?赤霧君」

「カナ、俺の今の名前は赤霧じゃない。風切だ」

「そう?ごめんなさい」

「というわけでアリアとチェンジだ。殺す気が無いにしても金次が困ってるんでな」

「そうなの。全く、キンジったら」

「そう言いながら発砲してきた。」

俺は勘で避ける。

「あら?この『不可視インヴィジビレの銃弾』が見えるのかしら」

「見えないさ。今のはただの勘だ。だが、もう見えた」

「そうやって、俺も『不可視の銃弾』で撃つ。」

それをカナは同じ『不可視の銃弾』で撃ち返してきた。

「それじゃ、まだ『不可視の銃弾』じゃないわよ?」

「やっぱりか。じゃこれで」

『赤霧の名の下に』

そうして霧囲気が変わる。

すると、蘭豹とカナの注意度があがる。

「大丈夫だ。殺しやしねえよ。ただ『不可視の銃弾』を使えるようにしたいだけなんだから」

そう言つて『不可視の銃弾』を撃つ。

「くっ!」

「おっ? 成功か」

「ええ」

そう言つて欠伸をするカナ。

俺はため息をついて頭を叩く。

「こ、こらあー! 何をやっているんですか! 逮捕します! この場の全員、緊急逮捕します!」

そこからは湾岸署の婦警がホイッスルを鳴らしながら近寄つてきていた。

「じゃあね」

「またな」

そう言つてカナがその場から離れて言つた。

俺は蘭豹に捕まるのが嫌だったのですぐにかえつた。

第二十五弾 偽物

アリアがカナと戦って、何やら祭りがあつて数日。

俺たちは金次の単位を取るために、カジノに来ていた。

何でも単位は1・9も足りないそうさ。

俺はもう、卒業できるほど単位は取っている。

さて、今回は金次とアリア、白雪、俺、レキの五人でやっている。

金次は若手IT社長みたいな格好で、アリア、白雪、レキはバニーガール。俺は金次の秘書、て感じだ。

アリアは堂々としていて、白雪は人気で、そういう目に慣れていないのか顔を真っ赤にするので更に人気を呼ぶ。最終的には退場させられていた。

「何やってるんだ。あいつ」

金次も同じ意見のようだ。

そこで、電話がかかって来た。

「すまん。少し外す」

「おう」

そう言つて、少し外に出る。

「はい」

『やあ、赤霧君』

「赤霧じゃない。今は風切だ」

『そうだったね』

「で？今回は何のようだ」

『少し礼を言いたくてね』

「礼？」

『そうだよ。あの子を、アリアを見てくれてありがとう』

「俺は何もしていない。アリア自身の頑張りで、それをサポートした金次の方が感謝されるべきだろ。それで？何の風の吹きまわしだ？」

『いや、なに。もう少しで私の寿命が尽きる頃なのでね』

「流石のシャーロック・ホームズでももう無理か」

『「条理予知」でも今日までだったからね』

「そうか」

『それではね』

「ああ」

そうして、電話を切ろうとすると、

『ああ、少し待ってくれ』

止められた。

「なんだ？」

『君自身で何か変わったことはないかい？』

「変わったこと？」

『ああ』

……変わったこと、か。

そう言えばレキに目の色がおかしいって言われたな。

「そういえば、目の色がおかしいと言われたな。白っぽくなってるのかなんだか」

『……そうか。白か』

「なにか気になることでも？」

『いや、ありがとう。それではね』

「お、おう」

そう言っただけで電話が切れる。

………何だったんだよ、全く。

俺はぶつぶつ言いながら会場に戻ると、なにやら盛り上がっていた。座っている金次に話を聞く。

「何があった？」

「粹！いや、その男が賞品とか言つてレキが欲しいとか言い出して」「ほう？俺の彼女を、賞品か」

……あのやろう、『赤霧』でぶつ殺してやろうか。

「粹、抑えろ」

「大丈夫だ。殺しやしねえよ」

「赤霧混ざつてんじゃねえか」

そうツツコむ金次をほつといて、レキに視線を送る。

レキが気がついてこちらを見たところで、

親指を首に当て、切るような仕草をし、指を下に振り下ろす。

レキはこくつと頷き、机に向き直る。

そして、予告通りにその野郎が負けた。

……ざまあ。

すると、その男に忍び寄る何かがあった。

俺はレキの横で立ちベレッタを構える。

「悪いな。この子は俺の恋人なんだ」

「な、なんだ君は」

「そのの奴。伏せろ」

その男に振り下ろそうとしていたやつ腕をうつ。

騒ぎ立てている中で、俺は机を踏み台にしてジャツカル？ 見たいなやつを蹴り飛ばす。

こけたところで首に銃を当て撃ち抜く。

後ろから斬りかかってくるジャツカルを胸から出したナイフで受け止め払ってナイフで真つ二つにする。

すると、一体ジャツカルが逃げ出した。

「金次！」

俺が金次に合図し、金次が頷いた。

「レキー！俺たちも行くぞ！」

「はい」

そう言つて、俺たちも水上バイクに乗る。

「しつかり掴まっておけよ！」

「はい」

ハンドルを握って飛ばす。

ジャツカルを追っている金次たちを追う。

その時、スナイパーの音が聞こえた。

俺は咄嗟に風の壁を配置するが、ずるつとレキが落ちた。

「レキ！」

俺はレキを抱きかかえる。

水上バイクに乗せて、すぐに傷口を圧迫する。

「レキ！しつかりしろ！レキ！」

「あずさ、さん。す、みま、せん」

「黙ってる！傷が開く！」

そう言つて俺は風を使つて、血を集める。

レキはゆつくりと手を伸ばしてきて、俺の頬に触れる。

「だい、じょうぶ、です。はあ、はあ、私は、所詮、47人の、うちの一人、ですから、

悲しむ、必要は「ふざけんな！」

レキの言葉を遮つて俺が叫ぶ。

「何が47人の一人だ！お前はレキだ！レキと言う存在は俺の中でお前だけなんだよ！
そのウルスとやらがお前を物と扱つても！俺だけはお前の味方だ！だからそんな事言

うな！」

「……………」

「お前はどうかなんだ！レキ！ウルスとしてのお前ではなく！お前自身はどうかなんだ！」

「……………生き、たいです。梓、さんと一緒に」

「任せろ！」

そこに飛んできた銃弾をベレッタで撃ち落とす。

そこへ電話がかかってくる。

俺は電話を取る。

『お姫様の具合はどうだ？本物？』

「撃つたのはお前か、偽物」

『ああ、そうだ。それでお姫様を撃たれた感想はどうだ？』

「ふざけるなよ。何故、関係のない奴を撃つ」

『その方が面白いからさ』

「……………なんだと？」

『お前は仲間を殺されるのが大嫌いだったなあ。殺されない為に自分が一番前に出て戦った。仲間が目の前で死んで行くのを見るのが嫌だったんだろお？だから関係のないお姫様を撃つたのさ。今のお前の顔が見たくてなあ。あっはははは！』

「もういい黙れ」

『はっ..』

俺はそのまま、偽物に向けて撃つ。

風を使って勢いをつけ、偽物のスコープを吹き飛ばす。

目が熱くなっていく。

シャーロックが言った変化はこれのことだったのだろう。

「待ってる。今からお前のところへ行く。どうせ、俺の偽物を語るなら接近戦の方が得意なんだろう？」

『.....』

俺は無理矢理電話を切り、レキを降ろす。

「梓、さん」

「待ってる。すぐに終わらせてくる。」

そう言っただけ俺はレキの額にキスする。

そして、風を使い風に乗って走って行く。

風を使って飛んでいき偽物が撃っていたビルの屋上に着地する。

そこには男が立っていた。

「よう、本物。顔合わせは初めてだな、俺は赤霧碧だ」

「よう、偽物。俺は風切梓だ。そうだ。偽物に一つ言っておいてやる」

「あ？」

「俺の赤霧碧は本名じゃない」

「なんだと？」

「赤霧碧は俺が拐われて名前を言わされた時に咄嗟に考えた偽名だ。赤霧碧の本名は赤井霧青。あかいきりと赤霧碧は本名をバラバラにしたただけだからな」

「それがどうした」

「いや何。わざわざ赤霧碧になる為に戦ってるのを笑ってやりたかっただけさ」

「……………」

「さあ、始めようか。偽物」

「ああ、お前を殺して！俺が本物になる！」

『『赤霧の名の下に』』

そう言つて俺の雰囲気が変わり、偽物は全身が赤く光る。

俺たちは同時に踏み出し、偽物が引き金を引く。

俺は『不可視の銃弾』で撃ち返そうとするが、

「レッドライナー！」

その銃弾が赤く光り速さが増し、俺の弾を弾き飛ばして俺に迫る。

俺は咄嗟にナイフを抜き、切る。

偽物はもう一度、同じように撃ってきたので、弓を撃つように構え、引き金を引く。俺の撃った弾が燃え、今度こそ撃ち落とす。

「どうだ？俺の超能力は」

「俺の超能力は『光』か」

「そうだ、ぜっ！」

そう言つて、偽物が上に撃つ。

俺は何をするか分かり、その場から離れる。

その逃げた先で偽物が撃ってくる。

俺はナイフを上投げ、グロックも抜きバーストを入れ替えて撃ち落とす。

偽物がその光景を見て、ニヤツと笑う。

その瞬間、光の雨が降ってくる。

「ぐっ！」

「レッドライナー！」

俺は風を使って勢いをつけて避ける。

しかし、数本俺の体を貫く。

俺は下に血を吐き捨てる。

「は！そんなもんか本物！」

そう言つて、レッドレインを撃つてくる。

俺は前に出て、ナイフを拾い偽物に斬りかかる。

偽物は受け止めて腹に銃口を突きつけ、

「レッドレイン」

撃つ。

「がはっ！」

俺は後ろに下がる。

「ゴホッ！ゴホッ！」

「おいおい、もう終わりか？本物。そうだ。お前が死んだらどうなるか教えてやるよ」

「あ？」

「お前のお姫様。レキつつつたか？そいつを殺してやるよ。犯して、痛めつけて、ボロボロの状態でお前のところに送ってやるよ！あっははははは！」

その言葉を聞いて俺の中で何かが切れた。

その瞬間、『不可視の銃弾』で撃つ。

「ちっっ！」

笑っていた偽物は舌打ちをして避ける。

俺はレキのことを思い浮かべながら、すっと振り切る。

「もういい。武偵として、生かしてやろうと思ったよ。だが、お前だけは殺す。レキに、俺の大切な人に手を出させるかあ!!」

そう言って、俺は地面に風を叩きつける。

「ぐおっ！」

偽物が風を食らって少し浮く。

俺は風を使って飛び、偽物の上に移動して、

「パイルトルネード！」

踵落として風を叩きつける。

「がはっ！」

叩きつけた後、そのまま風を使って勢いをつけ拳を振るう。

「いっはっ！」

俺は跳びのき、手を合わせる。

風を手の中心に集め、ぶつける。

ばちっ！と音を立てて、エネルギーの塊を作っていく。

「プラスマ」

サッカーボールぐらいの大きさになったところで偽物に叩きつける。

「ぐああああー！」

偽物が膝立ちになる。

「ちっ！はあ、はあ、テメエ！超能力持ってたのかよ！」

「持っていないとは言っていないぞ。さて、もう終わりだ」

そう言っつて俺は腕を広げる。

風で空気を動かしていく。

「ぐっ！息が！」

エンブレインストワールド
「真空の世界」

このビルの屋上が真空になる。

「つつっ！」

偽物が喉を抑え、全身から血が噴き出る。

そして、偽物が倒れる。

俺は銃を抜き、頭に合わせる。

「じゃあな偽物」

そして、引き金を引く。

偽物の頭を貫き、ドサッと倒れた。

「ゴホッ！ やつと倒したか。あゝあ、やつちまった。ま、いいか」
俺は頭を叩く。

そして、レキの元へ飛んでいく。

そして、レキのいた水上バイクに着陸する。

「レキ！ 大丈夫か！」

「梓さん。大丈夫です」

「少し、見せてもらおうぞ」

そう言ってレキの服に手をかけ、撃たれた胸の上を見ると、

「傷がない？」

そう。傷がなかった。

「はい。梓さんが私にキスをしてくれた時になぜか治りました。」

「そ、そうか。とりあえずよかった。ゴホッ！ゴホッ！」

「梓さん。大丈夫ですか？」

「ああ、腹に穴が開いたぐらい、ゴホッ！」

「本当に大丈夫ですか？」

「大丈夫、死にはしない。金次たちのところに行くぞ」

そう言つて水上バイクに乗つて行く。

すると、海の中からも大きな船が出てきた。

第二十六弾 シャーロック

偽物を倒した後、大きな船が水中から出てきた。

そこには文字が書かれていた。

伊・U

呼び方からしたらイ・ウーになるんだろう。

この船は俺が死んだから作られたものか。

「レキ、あそこに行くぞ」

「はい」

ハンドルを握って、船に向かって行く。

船に行く途中に携帯を取り出して、金次に電話をする。

しかし、何コールしても出てこない。

「ちっ！あいつあそこにいるのか」

「梓さん」

「なんだ？」

「あの船の前に小さな船が見え、そこに金次さんがいます」

「分かった！」

そう言つて俺は少し進路を変える。

風で押しながら勢いをつける。

もう少しで到達する時に俺は金次の名前を叫ぶ。

「金次！」

その声が聞こえたのかちらつとこちらを見た。

何か目で訴えているような気がして、ショートカットすることにした。

夥しい程のマズルフラツシュ。

船の上の男が撃ち落とし金次とカナ？が登つて行く。

しかしカナ？がやられて、金次がそちらに行く。

「レキ、お前はカナ？のところにおいてくれ。俺はカナを治してから中に入る。カナに手

助けが必要ならしてやつてくれ」

「分かりました。……………気をつけてください」

「おう」

そう言つて、レキの少しの変化を喜びつつ、カナのところに降りる。

「な、なんじゃ！貴様は!?!」

「赤霧だ。本物のな。治療するからちよつと退いたろ」

そう言つて俺はカナの手を握る。

すると、カナを淡い光が包み傷がなくなつていく。

「おお。そんな事になつてたのか」

「な、何をしたのじゃ！ 貴様は？」

「治したただけなのに何故そんな口調で言われなければならん」

「風切」

「お、大丈夫かカナ、じゃないな。兄か」

「ああ、金一だ」

「そうか。じゃ、俺は金次を助けてくるぜ」

「待て風切。相手は「シャーロック」！」

「だろ？ 見えてたし」

「……………そうか。頼んだ」

「頼まれた」

そう言つて走り出す。

奥へ奥へ進んでいくと何となくこの船がわかつてくる。

実にシャーロックが好きそうな感じになつている。

一つの部屋に入ると、金次とアリアが言い争いをしていた。

「おうおう。なかなか楽しそうじゃねえか」

「梓!?!」

そして、俺の傷を見て顔を青ざめる。

「なんだ？俺の傷を見てなんで立ってるんだ？つて？」

「当たり前よ！」

「そりゃあの馬鹿に一つ言つてやらないとな」

「馬鹿つて？」

「シャーロックだよシャーロック。自分の運命に孫を関わらせるな。じゃ、頑張つて仲直りしてくれよ」

そう言つてアリアの制止を振り切つて進む。

実際、止血してアドレナリンで無理矢理動いている感じだ。

奥に進むごとに雰囲気が変わっていく。

最後の部屋に着き、一回ため息をついて入る。

入ると生前、赤霧の時に一度だけ会った、

それでも今は初老の男がいた。

その男の名はあの有名なシャーロック・ホームズ。

「やあ、風切君」

「おう。シャーロック久しぶりだな。2000年ぶりぐらいか？」

「そうだね。あの時の君は絶望、見たいな目をしていたが今は充実してそうだね」

「あの時は無理矢理戦わされたからな。今は自分の為、仲間の為に戦ってる。お前も随分と有名になったものだ」

「あの頃の僕は駆け出しだったからね。大目に見てくれたまえ」

「そうだな。で？アリアを金次と戦わせる理由は？」

「あの子が私の言うことを振り切ってここまで来るかと思ってるね。金一が仕掛けようとしていた「フォーリングアウト同士討ち」をアリアと金次君にしてあげたのさ」

「そうか。なら、お前は俺が倒そう。殿つて訳じゃないが、ここまで来て何もしないと言うのはなんか嫌なんだね」

「そうかね。まあ、君も無関係じゃないからね」

「行くぞ！」

そう言つて俺はベレッタを抜いた。

第二十七弾 戦闘不能

「行くぞー！」

そう言つて俺はベレッタを抜き、胸と足に一発ずつ、もう片方の手で風を集めて撃つ。しかし弾はシャーロックがカナ、金次の兄から盗んだ技術の『不可視の銃弾』^{インヴィジビレ}で弾かれ、風の弾は避けられる。

「読めているよ」

「だろうな」

俺は走つて行き横と上に撃つ。

撃つたその弾が弾き、方向を変える。

その間、シャーロックから飛んで来た弾を撃ち、シャーロックに向けて飛ぶ。

シャーロックは身体をずらすだけで避ける。

俺は舌打ちをして、ナイフを出し横に一閃するが腕を止められ、傷口の腹を蹴られる。

「がはっー！」

「君は直線的すぎるよ。赤霧とは大違いだ」

「当たり前だ。赤霧は使つてないからなっ！」

ベレッタをフルオートにして全弾周りに撃ち尽くす。前にジャンヌにやった技だ。

弾が弾に当たって軌道を変える。

しかしシャーロックは氷を使って弾を止めていた。

俺は後ろに大きくジャンプして、弓を撃つ構えを取り撃つ。

弾が燃え上がってシャーロックに飛んでいき、飛び交っていた弾に当たって爆発した。

「これなら効くだろう」

「そうだね」

そう煙の中から声が聞こえた。

「弾を何度も当てて粉を作り出し、その粉に火を当てて粉塵爆発か。中々に良い手だったよ。防御が遅れていたなら大怪我だった」

「ちっ！大して当たってないのによく言うよ」

「あるかもしれないと推理したままだよ。そろそろ金次君達が来る頃だろう。君は戦闘不能にしておこう」

「はっ！やれるものならやってみろ！『赤霧の名の下に』」

そう言っただけの霧囲気が変わる。

風を纏って突っ込む。

ナイフを順手に持ち替え、前に突き出す。

防がれる瞬間に手を引きその勢いを利用して反転しながら回し蹴りをする。

「ほう？動きが良くなった」

「当たり前だよっ！」

そう言つて手のひらを広げ、風を押し付ける。

シャーロックは氷を使って相殺する。

俺は後ろに飛んで壁を蹴って手に風を集めて地面に叩きつける。

しかし、

「惜しかったね。もう終わりだ」

そう告げた。

「あ？がっ！」

シャーロックから見えない何かが飛んで来て身体を貫いた。

「僕の推理以上に動いてくれたね」

「よく、言うよ。元々大して、動け、ないのは、分かった、だろうに」

「お腹に穴が空いていて動いてる時点で予想外だったよ。ともかく、これで君は戦闘不能だ。大人しく見ていてくれたまえ」

「ちっ！分かって、るよ。ゴホツゴホツ！」

「梓!？」

扉の方を見ると金次とアリアが入って来た。

「よう、ゴホツゴホツ！」

「大丈夫!？」

「大丈夫に、見え、るか？」

「見えないわよ！って言うか亜里沙に変わればあなたの痛みは多少はマシになるんじゃないの？」

「亜里沙、を、危険な、目に、合わせる、訳には、行かないから、な」

「それで、あんたが死んだら意味ないでしょ！」

「大丈夫、死には、しねえよ。だが、少し、休ませて、もらうぞ」

そう言っって目を瞑った。

第二十八弾 白銀の弾丸

俺の戦いが終わって、金次とアリアがシャーロックと戦っているのを音で聞いていた。

実際、意識を保つのはもう限界に近いが、音を聞いていると、この部屋にかかっていた音楽が変わった。

それを機にぱったりと止んだ。

俺は痛む身体を起こして胡椒を取り出して、振る。

「クシュン！」

くしゃみをして入れ替わる。

「驚いた。このオペラが独唱曲になる頃には——君たちを沈黙させているつもりだったのだがね。君たちは僕が推理したよりも長い時間を戦い抜いた。つまり僕は生まれて初めて、推理をし損じたのだ。君たちは、賞賛されるべき男たちだ。さて、戦いの最中で悪いけど、ここから先は僕の『緋色の研究』について話す時間だ」

そこでシャーロックが私を見た。

「亜里沙君だね？ 済まないが今すぐ梓君に変わってくれたまえ」

「ダメ。梓は死にかけてる。話だけなら私が聞く。私たちの記憶は一緒だから」

「……………なら、今はいい。後で少しだけ変わってもらおうよ」

「ええ」

シャーロックの光が勢いをまし、緋色に変色していく。

「僕がイ・ウーを統率出来たのはこの力があつたからだ」

その光景を見ながら金次が呟く。

「あの、『緋弾』を……………撃てるのか、お前も」

「キンジ君が言つてるのは恐らく違う現象のことだろう。アリア君がかつて指先から撃つたはずの光球、それは緋弾ではない。古の倭言葉で『緋天・緋陽門』という緋弾の力を用いた一つの現象に過ぎないのだ」

そう言いながらシャーロックはアダムズ1872・マーク3。かつて大英帝国陸軍が使用していた、45口径ダブルアクション拳銃。

「これが『緋弾』だ」

そう言つて取り出した弾丸は血のような薔薇のような、炎のような緋色をしている。

「この弾丸が、緋弾なのだよ。いや、形はなんでも構わない。日本では緋々色金と呼ばれる……………要は金属なのだからね。峰・理子・リュパン4世が持っていた十字架を覚えてるだろう。あれも、この弾と同族異種の金属を含むイロカネ合金だ。イロカネとはあらゆる

るステルスがまるで兎戯に思えるような至大なる超常の力を人間に与える物質。いわば、超常世界の核物質なのだ。世界は今、新たな戦いの中にある。イロカネの存在、その力が次第に明らかになり極秘理にその研究が進められているのだ。僕の緋色の研究のようにね。イロカネを保有する結社はイ・ウーだけではない。アジア大陸北方にはウルス、南方には香港のランパン、僕の祖国イギリスでは世界一有名なあの結社も動いている。イタリアの非公式機関を陰からサポート、監視するバチカンのように、国家がイロカネの研究を支援・監視するケースも枚挙に暇がないほどだ。アメリカではホワイトハウスが、日本でも宮内庁が君の高校にも星伽のローいや、これは少々口が滑ったかな。そして、僕のように高純度で質量の大きいイロカネを持つものたちは互いのイロカネを狙いつつもその余りに甚大な超常の力に、お互いが手出しができない状態にある」

「素晴らしいながらシャーロックは緋弾を込めた弾をこちらに向けてくる。シャーロックの身体を覆っていた緋色の光が指先に集まっていく。」

「これだろう？君が見た現象は。そうだ。亜里沙君、梓君に変わってくれたまえ」
「……………」

私は無言を返すが、はあ、とため息をつき胡椒を取り出して振る。

「クシュン！」

くしゃみをして入れ替わる。

亜里沙が立っていたので、俺は力が入らず床に倒れる。

「うぐっ！」

「大丈夫か！ 梓」

「だから、大丈夫に、見える、か？」

全員が首を振る。

………やかましい。

すると、シャーロックが指先に集めた『緋弾』に共鳴するように目が熱くなってくる。

アリアから緋色の光が発せられ人差し指に集まっていく。

「な、何これ……」

アリアが戸惑ったように右手を顔に向けていた。

「アリア君。それは『コンソナ』だ。質量の多いイロカネ同士は、片方が覚醒すると共鳴する音叉のようにもう片方も目を覚ます性質がある。その際は、イロカネを用いた現象も共鳴するのだ。今、僕と君の人差し指が光っているようにね」

「さて、アリア君。これから僕はこの光弾『緋天』を君たちに撃つ。僕が知る限りそれを止める方法は同じ緋天を衝突させることのみだ。実験したことはないが日本の古文書にはそれによって緋天同士が静止し、その後には鏡なるものが発生するとある」

「曾………お爺様」

アリアがシャーロックを動揺しながら見る。

「さつき君はあなたに命じられない限り僕を撃たないと言ったね。ならばここで僕を撃ちなさい。その光で」

「曾お爺様、を……」

「そうだ、緋弾に心を奪われないように落ち着いて指先に力を集め、保つイメージをするのだよアリア君」

「よく……わからないな。あれもこれも。まあ、わかりたくないこともばっかりだけどな、お前は王手をかけてきた。そして、俺達もまだ一手撃てる。そういうことだろシャーロック」

金次がアリアに歩きながら言った

「ご名答だ、キンジ君。どうかその優れたHSSの理解力と状況判断能力でこれからもアリア君を助け続けてくれたまえ梓君達とね」

キンジが口をへの字に曲げながら迷ってるアリアの手を取る

「……キ、キンジ？」

俺も近づいてアリアの小さな肩に手を置いた。

「大丈夫だアリア、お前はパトラと戦った時、無意識にこの力を使ってるんだ」

金次はアリアの震える手を握る。

「後は何の助けにならないかもしれないけど……俺が、ついててやるよ。何がどうなるうと、最後までな」

金次がそう言うのと、アリアの震えが消えていく。

アリアは、指先の光をシャーロックに向けた。

「良いチームメイトを見つけたねアリア君」

シャーロックは満足そうに微笑みながら、

「かつて僕にワトソン君がいたようにホームズ家には相棒が必要だ。人生の最後に二人が支え合う象徴的な姿を前に出来て、僕は……幸せだよ」

同時にシャーロックが緋天を放つとアリアの手からも緋天が飛ぶ。

光が俺達の間で衝突し、空中で静止し融合する。

「僕には自分の死期が推理できていた。どんなに引き延ばしても今日、この日までしか保たないと。だからそれまでに緋弾を子孫の誰かへ『継承』する必要があったのだ。元々、緋弾はホームズ家にて研究するようにと女王陛下から拝領したものだからね」

強まった2つの光はすぐ、まるでお互いを打ち消しあうように急速に収まっていく。

「しかし、その後の研究で分かった事だが緋弾の継承には難しい条件が3つあった。一つは緋弾を覚醒させられる人格に限りがあること。情熱的でプライドが高く、僕は自分がそうとは思わないが……どこか、子供っぽい性格をしていなければならないらしい。

しかしホームズ家の一族は皆、そうではなかったのだ。だから僕は条件に合う子孫が現れるのを待ち続けなければならなかった。そして現れたのがアリア君。君だ。2つ目の条件は詳細は伏せるがアリア君が女性として心理的に成長する必要があったことだ」

シャーロックの手前の光球が透明になっていく。

「3つ目の条件として継承者は能力を覚醒させるまで最低3年のあいだ緋弾と共にあり続ける必要があった。片時片身離さずに」

融合していく二つの光がレンズのような形に変わっていく。

「これは簡単なようで最も難しい条件だった。なぜなら緋弾は他のイロカネ保有者達から狙われていて覚醒したものでなければ守ることができなかったからね。だから、今日までは覚醒した僕が緋弾を保有し、今日からは覚醒したアリア君が緋弾を保有する。これを成立させるために僕は今日までこの緋弾を持ち続け、さらに3年前の君に渡さなければならなかったのだ。これは僕にとっても、生涯最大の悩みだった。だが、その問題を解決してくれたのもまた、緋弾だったのだよ」

宙に浮かぶレンズに何かが浮かび上がってくる。

やがて、鮮明になった人影を見て絶句する。

「これだ……これが日本の古文書にある暦鏡、時空のレンズだ。実物を前にするのは僕も初めてだよ」

レンズの中に映ってるのはアリアと、スナイプしようとヘカートを構える俺だった。アリアの髪の色は亜麻色のツインテールに瞳はサファイアのような紺碧の瞳だった。俺は何処にでもいるような兵士の姿。

「アリア君。君は13歳の時、母親の誕生パーティーで銃撃されたことがあるね。梓君は確か15歳の時に戦場で」

「う、撃たれました。何者かに。でもそれが今、何だと……」

「撃つたのは僕だ」

「お、お前の、せい、だったのか」

アリアが驚きに全身を強張らせる

俺はシャーロックを睨む。

「いや、これから撃つのだ。これはどちらの表現も正しい」

言つてシャーロックは拳銃の撃鉄を起こす

「緋弾の力を持つてすれば過去への扉を開くことさえできる。僕は3年前のアリア君に今から緋弾を継承し、梓君は女神の瞳を」

「女神の、瞳？」

「そう。君に撃つたのはこの弾だ」

そう言つて一つの弾丸を取り出す。

それは『緋弾』と違い真っ白。

葉莖と区別がつかないほど全て真っ白だ。

「この弾は『緋弾』の研究をする中で、緋々色金、瑠璃色金、瑠璃色金。それらを共鳴させて見たのさ。その過程でたまたま出来たのがこの弾だ。テレビの光の三原色を知ってるだろう。赤、青、黄色を重ねると白くなる。僕は白銀の弾。『白銀の弾丸』^{ブリチナブレット}、君の目が白くなった事から「女神の瞳」と呼んでいる」

レンズの中に、拳銃をシャーロックが向ける。

「や、やめろー！」

金次がシャーロックに飛びかかる。

「なに、心配には及ばないよ。僕は銃の名手でもあるんだ」

その瞬間、引き金が引かれたと同時に過去のアリアの背中から血が吹き出て、俺は目を抑えて痛みを耐えていた。

「アリア君。2つ断っておこう。緋弾の副作用についてだ。緋弾には延命の効果があり、共にあるものの肉体の成長を遅らせる。あれから君は体格があまり変わらなくなっただろう。それと文献によれば、成長期の人体にイロカネを埋め込むと体の色が変わるらしいのだ。皮膚の色は変わらないようだが、髪と、瞳が美しい緋色に近づいていく。

梓君はその女神の瞳は全然研究は進んでいない。だが、恐らく白くなるのは目だけだ

ろう。以上で僕の緋色の研究に関する講義は終わりだ。緋弾について僕が解明できたことはこれが全てだよ。『白銀の弾丸』はわからない部分が多い。見ていたが、金一君の怪我を治していたね。どうやって治しているか、その治癒の力以外に何が出来たのか。梓君が研究を続けてくれたまえ。後、『緋弾』のように髪の色は変わらないだろう。緋弾を失ったせいでいきなり歳をとったようなシャーロックが言った。

「き、キンジ、梓」

アリアが歩いてくる

「アリア君、キンジ君、梓君。緋色の研究は君達に引き継ぐ。イロカネ保有者同士の戦いはまだ、お互いを牽制しあう段階にある。しばらくはその膠着状態が続くだろう。もしかしたら戦いは本格化し君たちはそれに巻き込まれるかもしれない。その時は、どうか悪意ある者から緋弾を守り続けてくるたまえ世界のために」

「ふざ、けるな！お前の、運命に、孫を、アリアを、巻き込んで、んじゃ、ねえよ！」

「ふむ、流石仲間を大切にすることに定評のある赤霧君だ。しかし、自分のことをもつと大事にしてあげたほうがいい。君の身を心配してくれる人の為にもね。これは前世の友人のアドバイスでも思ってくれ。そろそろ限界だろう。ゆつくりと休むといい」

「ちっ！」

俺は薄れる意識の中で金次に声をかける。

「金次、あの、馬鹿に、一撃、入れてやれ、頼ん、だ、ぞ……」
そう言って意識を失った。

第二十九弾 序曲の終止線

「知らない天井、ではないなもう」

俺は天井を見上げて言った。

見上げたと言っても寝転がっているからだが。

「梓さん起きられましたか」

「レキ、か」

横を見るとレキが座っていた。

心なしか元気がないように見える。

「あれからどのくらい経った？」

「3日と20時間過ぎました」

「そうか」

恐らく、シャーロックとの戦闘後、直ぐに運ばれて来たのだろう。その間、見舞いが少し来たようだ。

レキをよく見てみると、目の下にクマが出来ていた。

「レキ、今日はもう寝ろ。寮に帰るなら亜里沙になつて送るが？」

「いえ、ここで良いです。既に医者から許可を得ています」

「そうか。椅子で寝るのは身体に悪いし、今日はベツトの上で寝ても良い。しっかり風は張るから安心しろ」

「……………分かりました」

そう言っついていそいとベツトの上に乗って布団の下か入ってくる。

その数秒後寝息が聞こえて来た。

目の下にクマが出来ていたし相当疲れていたのだろう。

俺も直ぐに眠気が襲って来たので一度、レキの頭を撫でて寝た。

次の日。

いつも武偵高に行く時間に起きた。

レキはまだ寝ていて、俺の病院服を掴んで寝ている。

俺がその光景を微笑ましく見ていると、扉がガラツと開いた。

「失礼し……………ました」

金次とアリアが入ってこようとして、俺のベットにレキが寝ているのを見たのかすぐに扉を閉めた。

俺はため息をつき、風で携帯を取ってメールする。

『昨日の夜中に目を覚ました。その時にレキがいて目の下にクマが出来ていたから、寝させた。お前が勘違いしていることは何も無い。というか何か用があつたんじゃないのか?』

そうメールを送ると、少しして金次たちが入って来た。

俺はレキの耳に届かないように風を操作する。

「よう、金次。4日ぶりだな」

「おう、梓。目を覚ましてよかったぜ」

「そうよ。生きてるのがおかしいって医者にも言われてたんだから」

「大量出血で死にそうだったからな。金次、その手は?」

「ああ、シャーロックに一発かましてやろうとした時の怪我だ。お前よりマシだ」

「ちよつとこつち来て包帯を取れ」

「は? 何でだ?」

「いいから」

金次は渋々と言った感じで包帯を取って手を出してくる。

俺はその手を取って力を使う。

金次の手が淡く白く光って傷が治った。

「済まないな。傷跡が残った」

「いや、ありがとう。凄いな、その力」

「この力がある時に死んだってことが無ければそうかもな」

それからはシャーロックの話だった。

シャーロックは消えたそうさ。

元々、あの日までと言っていたんだからな。

シャーロック曰く、あの戦いは『プレリユード・ファイネ序曲の終止線』だそうさ。

「シャーロックが言ってたがこれからは色々起こるそうさ。イ・ウーがいたから他の奴らが手を出せなかったと。」

そのイ・ウーが消滅して、リーダーのシャーロックもいない。これから、色金を持つているアリアや梓が狙われる事になるだろうってよ」

「そうか。ま、アリアにはお前がいるもんな？正義の味方さん？」

「よせよ。俺は武偵をやめるんだぞ」

「お前の兄が生きていて、アリアの力になるって言ってたのに、か？」

「……そうだよ」

「ま、お前が決めたのならいいさ。だが、武偵をやめてもアリアの味方ではいてやれよ？」

「分かってる」

「それじゃ、授業が始まるから俺たちは行く。ゆつくりと休めよ」

「おう」

「そうだ、シャーロックからこれを」

「これは」

金次から渡されたのは俺の身体ぐらいある剣。

それには見覚えがあった。

「シャーロック曰く、お前の大事な剣なんだってな」

「ああ、これは赤霧で戦場に出ていた時に、死んだ友人から貰ったものだ」

「これは梓に渡しておくぞ」

「ああ、ありがとう」

「それじゃ梓、お大事に」

「おう、アリアも頑張れよ」

そう言つて金次たちが出て行く。

俺はその間、未だ寝ているレキの頭を撫で続けた。

その後は、警察や公安の人たちが来て、根掘り葉掘り聞かれたり、シャーロックやイ・ウーについて黙っておくように言われた。

修学旅行Ⅰ

第三十弾

ココ

金次からシャーロックとの戦いの後の話を聞いた次の日。

俺は退院して男子寮に戻っていた。

今は歩くのも痛いので車椅子で、激しい運動は禁止、あと2日に一回は輸血しに来いという事だった。

あと、シャーロックからなすりつけられたこの女神の瞳つてのが少し分かって来た。

この目は、あの力は自分を治せない。

どういう原理で相手を治してるかも分からない。

後は、相手の脈が分かったり、相手のどこが怪我してるとかどこが悪いかが見える。

今気づいていることと言えばそのくらい。

男子寮に帰ってきて、まず思ったのが部屋にコンビニ弁当の食べ跡が残っていたりコップが洗わずに放置してあったりした。

「ひどいな……あいつら。せめて片付けろよ」

そう言つて台所を片付ける。

届かないところはレキにとつて貰っている。

レキに学校へ行かないのかと聞くと、自分のせいで怪我をしたから看病する、だそう
だ。

現在、レキに車椅子を押し貰っている。

風を使つてもいいがこんな所で意地を張つても仕方ない。

まあ、階段では使つたけど。

というわけで部屋も片付け、とりあえず冷蔵庫にあるものだけで料理を作る。

まあ、亜里沙に変わつてするのだが。

その晩、金次が中学生に負けたと言つていた。

そいつは「ココ」と名乗つたらしい。

アリアみたいなツインテールだったそうだ。

それで「裸絞め」をされて負けたらしい。

その話を聞いた後、風呂には入らないのでタオルで身体を拭く。背中レキが拭いて
くれた。

金次とアリアが冷めた目で見てくるが無視する。

その夜、着替えて寝ようとしてみるとレキがベッドの上に乗つてくる。

「……何で乗ってくる?」

「いけませんか?」

「……別にいいけど」

そう返して布団を被る。

レキは布団の中に入って来て手に抱きついた。

俺はその少し柔らかい感触を振り切るように眠りについた。

次の日。

レキに車椅子を押しして貰いながら、学校に行く。

学校に行くと周りの目がキツかった。

まあ、眼の色変わってるし、車椅子だし、あのロボットレキに車椅子を押しして貰っている、そういうのもあってそのような見方になっている。

普通に授業を受け、体育は見学。

そう言えばもうそろそろ修学旅行キャラバン・ワンがある。

五、六時間の実習は狙撃科スナイプにレキと行って、ヘカートの整備をする。

そして、少しスナイプの練習をして授業が終わる。

放課後にあややのところに行って友人の剣の持つところを改造してもらうことにし

て、依頼し、出て行く。

武偵高を出ようとすると、

「きひっ」

そんな笑い声が聞こえて、誰かが降ってくる。

その少女はアリアのようなツインテールをしていて着物を着ていた。

「なんか用か？」

「私、^{ウオ}名前、ココいうネ。お前も名乗るね」

「お前なんかの名乗る義理はない。それと、お前、なんか酒臭いぞ。ガキがそんなもの飲むな」

俺はココが持っていた瓢箪を指して注意すると、ココは目を見開いた。

「……ガキ違うネ！ココは昨日で14歳ネ！」

「ガキじゃねえか」

「しよがないネ、ちよとお試しするヨ。ウルスの姫離れるネ」

酒に酔っているのか訳の分からないことを言ってくる。

ココがそう言うのとレキはココにドラグノフを突きつける。

俺はレキの銃を手で降ろし、

「大丈夫だ、レキ。こんなやつに負けはしない。例え怪我人だとしてもな」

目で一瞥するとレキはコクンと頷き離れる。

俺は車椅子をゆっくり立ち、ココを見据える。

ココはふら、ふらり……千鳥足で倒れるような動作に側転を繋げながら、ぱつといきなり、飛びかかってきた。

そして身体をヘビのように這って、俺の背中にへばりつく。

そして、俺の首に左右からロープ、じゃなくてツインテールを巻きつけてくる。

「きひっ!」

耳元で笑ったココは、更に俺の首に両腕を絡ませてくる。

金次がやられたのはこれのことだろう。

「きひっ、チビと思つて舐めすぎネ。ほれ、何も出来ない力?何も出来ない男は、いらない男ネ。殺すヨ」

「誰を殺すつて?」

俺は絡ませてきた腕を風を使って緩め、思いつきアイアンクローをしてやる。

そして、俺が力を強めると段々首に左右から巻かれたツインテールが取れて行く。

「い、痛いネ!」

「ほらよ」

そのまま、アイアンクローをした手で地面に叩きつけた。

「がはっ！」

俺は手をはたき、車椅子に座る。

「残念だったな、ココ。俺には絞め技は効かないんだ。じゃあな。行くぞレキ」

「はい」

そうココを見ながら言っつてその場を離れて行つた。

第三十一弾 武偵弾

ココが襲来したその日、

五階のフードコートに飯を食いに行っていた。

金次がオススメしていた新都城と言うラーメン屋に来ていた。

たまには外食もいいだろうと言うことだ。

小さいテーブルに腰を降ろした。

「何が食べたい？」

「ではこれで」

そうメニュー表を指差す。

それをよく見てみると、

『新メニュー・超壺麵ちようつぼめん！5000円 　ただし30分以内に完食できれば無料！』

と書かれていた。

「食べれるのか？」

「はい」

……もうなにも言うまい。

そして、やって来たウエイターさんに、

「俺は醤油ラーメン」

「私はこれを」

そう言う。

ウエイターさんはレキの方をじつと見て、かしこまりました、と言って下がって行く。

そのあとは双方無言で料理を待つ。

数分後、

「ーお待たせしたでござるー」

「……風魔、か？」

「おや、風切殿」

と言う風には珍しい話し方のウエイターが来た。

諜報科^{レザド}一年、風魔陽菜

金次の戦^{アマミカ}兄妹だ。

確か風魔小太郎の子孫だった気がする。

「風切殿、ご注文の品をお届けに上がつたでござる」

俺の前に醤油ラーメンが置かれる。

上に乗っているナルトが皿に切られている。

………何故この形に？ま、いいが。

「こちら、レキ殿がご所望なされた、超壺麵でござるよ」

そう言って持って来たラーメンは壺に入っていた。

………バカじゃないの？

「………レキ、本当に大丈夫か？」

「はい」

「それでは30分、只今より計測開始！はいスタートっ！」

風魔はポニーテールを振って、ストップウォッチを押す。

レキは………パチンと割り箸を割る。

頑張るなー。

レキは麵を一本ずつ食べて行く。

その独特な食べ方で、食べて行く。

その麵を食べる間断ウェイトがない。

そうこうしているうちに麵を食べ終えた。

そのまま、メンマやナルトをぼんぼん口に入れ、汁を飲もうとしたのか壺に手をかけ

る。

俺は壺を持って手伝う。

んくつ、んくつと普通に汁を飲んで行く。

そして、10分と少しで全部食べきってしまった。

おぉー、すごい。

「なっ……なんで……ござると……っ?」

「私の感覚ですが、今、風魔さんが計測を開始されてから10分47秒です」

そうケロッとした表情で言う。

そりゃ、この量を10分足らずで食べ終えたのだから驚くだろう。

と言うわけで意外と大食いなことが分かった。

そして、数日後。

俺は怪我がマシになった。

念のため、杖を借りている。

今日は装備科アムドに来ている。

友人の剣を少し改造してもらっている。

とりあえず、レキも付いて来た。

「あやや〜!来たぞー!」

「おや？ 梓ちゃんなのだ！」

「例の物は出来てるか？」

「出来てるのだ！ ええっと、これじゃなくて、これでもなくて……」

あややが剣を探していてド〇えもん見たいになっている。

そして、剣を見つけて引つ張り出した。

「あつたのだ！」

「そうか」

「この剣はなかなかの業物だったのだ！」

「そうなのか？」

「そうです！ この剣には梓ちゃんの要望通りワイヤーを仕込んでみたのだ！ この出っ張り部分を引つ張るとワイヤーが出てくるのだ！ 後、この出っ張りを引つ掛けてぶら下がることも出来てるのだ！ 強度は一人ぶら下がるぐらいで重量で言うところ100kgが限界なのだ！」

あややから剣を受け取って出っ張り部分を引つ張る。

その感触に少し頷きながらワイヤーをしまう。

そこに少し風を纏ってみる。

風を這わせても何も起きなかつたので風を解除する。

たまにあるのだ、ことう風を纏うと壊れてしまうのだ。

「ありがとう、あやや。鞆も見繕ってくれ。そういえば武偵弾は出来てるか？」

「ご要望通り出来てるのだ！しかし、一発だけなのだ！」

「別にいいよ。ありがとう」

一発10万ぐらいする武偵弾を買う。

……無駄に高いんだよな、これ。

剣の改造代と武偵弾の代金をきつちり支払う。

「ありがとうございませうのだ！梓ちゃんはきつちり払ってくれるので弾を買う時は安くするのだ！ではまたご贖戻にしてくださいなのだ！」

「おう、またなあやや」

剣を背中に背負って、武偵弾を貰って装備科を出た。

第三十二弾 京都&大阪

修学旅行I当日。

腹の傷も完治して、京都に来ていた。

1日目は京都で社寺見学すること、最低三ヶ所に行つてレポートを提出すること。

2日3日は自由行動、大阪か神戸の都市部を見学すること。

アリア、武藤、白雪は2日3日は確か呉くわで金次は……どこだったかな。

俺はレキとハイマキと行動している。

学校外と言うことで俺もヘカートを背負つて来ている。

ちなみに友人の剣を背中に背負つていて某黒の剣士みたいになっている。

片方は剣ではないが。

清水寺と金閣寺を見て回り、三つ目に三十三間堂に向かった。

理由と言つてはこれと言つてなく、ただ誰も居なさそうな所に行こうと考えたわけである。

レキは終始無言のまま付いて来ていた。

受付で拝観券を買いつつ、壁の注意書きに『武偵育成学校からの修学旅行生の方は、銃

器・刀剣類をお預けください』と買っているのを見て、一応、武器を全部預けた。

「レキ、お前も預けるよ?」

俺がそう言うのと素直にドラグノフと銃剣を預けている。

「念のために聞くが口の中に何も仕込んでいないか?」

「はい」

「そうか、なら行こう。ハイマキはそこで待機」

と、視線をハイマキに逃してから、堂内に入っていく。

三十三間堂は、古くから弓矢の腕を試す場として有名な所。

120mもある長い本堂の軒下を利用して和弓を射る「通し矢」と呼ばれる大会が、今でも形を変えて行われているという。

ー言うなれば、狙撃と関わりのある寺とも言える。

千手観音立像が千体、ズラリと並んだ御堂の廊下を歩き、あつという間に堂内を身終えてしまった。

「さて、どうしよう。レキ、行きたい所……はないよな。どうしよう」

「……………」

んー本当にどうしよう。

「…………大阪にでも行くか。レキはどうせ私服とか持ってないんだろ?」

「持っていません」

「警戒するというのは疲れるものだ。多少は羽を伸ばすのもいいだろう。行くぞ」

「……はい」

と言うわけで京都から大阪・心斎橋へは、電車で小一時間といったところだ。

ここは若者の集う、まあ、東京で言えば渋谷や原宿みたいな雰囲気^アの街だ。服屋やアクセサリーショップもあちこちにある。

亜里沙に偶にこういふところに行ってもいいと行っているので雰囲気^アには分かる。レキとハイマキを連れて適当に周囲を見渡す。

コンビニやクラブハウス、猫のマークのカフェ……とまあ、都会だなあ、と思う。

そこで『シャトント^ベ』という女の子向けのセレクトショップを見つける。

「……だが、男がレキの服を選ぶというのも周囲の視線が痛そうだ」

「私は気にしません」

「俺が気にする。というわけで亜里沙が変わる。ハイマキ、ジャンプ」

「わおっ！」

ハイマキがジャンプして視線がそっちに向いてる間に、胡椒を取り出し、振って、

「クシュン！」

くしやみをして入れ替わる。

「行こっか？レキ」

「……はい」

そうして、猫の図柄をマークにしていた『シャトンb』の店内は森をイメージしてるのか、棚やケースが全部木製だった。装飾も葉っぱとかツタ植物を意識してるカンジだ。

店内に入ると、日焼けした茶髪の女性店員さんは「いらっしやーい、おーかわええー！」などと言って、ハイマキに抱きついてる。

ここはぺつとOKな店らしい。

そうして私は適当にレキに似合いそうなものを探してみる。何でも似合いそう。

色々試させて貰って、最終的に白のノースリーブのワンピースが一番似合っていた。

「うん、よく似合ってる」

「ありがとうございます」

さて、選んだし、財布が無いので梓に変わろう。

「ハイマキ、ジャンプ」

「わおんっ！」

梓と同じ手を使って胡椒を取り出して振る。

「クシュン！」

くしやみをして入れ替わる。

「おお、よく似合ってるじゃないか」

「…ありがとうございます」

さて金額は…：…ていうか亜里沙、自分の分も買ったのか…。

まあ、良いけど。

そこで、

『大好評！本日15時より シャトンb&シャトン・カフェ合同イベント ☆シャ

トンコール ☆優勝者には当日お買い上げのシャトンbの商品を全品半額キヤツ

シュバツク！』

という看板を見つける。

「おい、あれに挑戦してみよう」

「……？」

レキはハテナを浮かべていたが手を引き、その方向に歩いて行く。

このイベントは猫をどれだけ引きつけられるかというものらしい。

そうレキに説明すると、

「ニヤーン」

ニヤーン、だと……。

レキからは想像も出来なかつた言葉が出た。

レキの足元にこれでもかと言うぐらい猫が集まつた。

「これで良かったですか？」

「……」

……正直何も言えん。

まあ、多少、金は浮いたからいいか。

そうしてお金を払い、今夜の泊まるどころの民宿に向かって行つた。

第三十三弾 民宿

京都、大阪に行つて、比叡山の森の山奥にある民宿『はちのこ』に来ていた。さつきまで賑やかなところにいたので夜だけでも静かなところに行こうと言うところだ。

ガラガラと、入り口の戸を開けると、中から若い女将が出て来た。

「あらあら。おいでやすう」

「すいません。予約していた風切です」

「お待ちしております。わたしはこの女将をしております。沙織と申します。今日は他のお客はんもおらんさかいに、ええお部屋を使つてくださいな」

沙織さんはこつちに背を向けて、案内モードに入つていった。

案内された『西陣の間』は、畳も真新しい豪華な8畳間だった。部屋名の通り、壁には色彩豊かな西陣織の反物がタペストリーのように飾られている。絹布の前には人が入れそうなくらいに大きな壺もあり、部屋の高級感を高めている。

俺とレキは木製の座卓につき、早速おかの沙織さんが出してくれた夕食を食べている。

あ、おいし。

ちらつと前を見ると、正座をしたレキは御膳を右から左へ。

いきなり白米を全部食べ、次に天麩羅を全部食べ、それから刺身、最後に味噌汁を一気飲みする。

こうして、食事を終え、充電器を携帯に差しして、テレビの上に置く。

することをないので、鞘から剣を抜いて少し月に照らす。

傷らしい傷もなかったのでしまう。

「失礼します」

剣を置くとフスマが開いて、廊下に正座した沙織さんが再登場した。

「――お食事は、いかがでしたか？」

「美味しかったです。ごちそうさまでした」

「お食事がお済みでしたら、お湯へどうぞ。今日は、お客はんがお二人だけですから……」

温泉貸し切りですよ」

「そうですか。ではお言葉に甘えさせてもらいます」

沙織さんが帰って行き、俺はベレッタ、グロックを置いてレキの方に向く。

「レキ、お前は どうする」

「後で伺います」

……何う？まあいいか。

「わかった」

そう言つて部屋を出る。

民宿に併設された浴場には『男湯』『女湯』の表記がなかった。

……レキはこれを知つてたのだろうか。

この民宿には、入浴中に沙織さんが服を洗濯してくれるというサービスがあった。

ので、俺は洗濯カゴに服を入れて……ガラガラとスライド扉を開けて、岩と竹垣に囲まれたスノコを渡り、かけ湯をし、サツと体を洗つてから、温泉に浸かった。

「なかなか気持ちがいいな」

と、温泉の感想を言う。

ゆつくりと湯に浸かっていると、人の気配した。

俺は目を瞑りながら風だけを動かせるように準備をする。

しかし、そこに入って来たのは、

「梓さん」

レキだった。

ドラグノフを持つて。

「レキはここが混浴だと知っていたのか？」

「いえ、知りませんでした」

レキはそのまま入って来て俺の横まで移動する。

「嫌な風の流れを感じたもので…迷惑でしたか？」

「……いや、嫌な予感がしているのは同じだ。しかし、ドラグノフを持って来たたら湿気で不発になる可能性がある」

「銃は私を裏切りません」

「可能性の話だ。でも、お前が銃を大切にしなければ裏切られるぞ。俺はヘカートのことを考えて持って来ていない。人の気持ちと同じで気まぐれなんだ」

「……よく分かりません」

「大丈夫だ。今分からなくても一緒に過ごせば分かるようになる。出会った頃よりは感情が分かるようになってるからな」

「……そうですか」

そう言っただ俺は風呂を出る。

浴衣を着て部屋に戻る。

部屋に入ると布団が一つしかなかった。

要らぬ気を回してくれたんだろう。

……まあ、いつも一緒に寝ているから良いけど。

「梓さん」

「ああ、分かっている」

俺はベレッタとグロツクのマガジンを確認し、ヘカートもボルトを引いて装填する。それを背に背負い、剣を鞘から抜く。

そこへ一つの弾丸が見えた。

第三十四弾 大陸の姫君

俺たちが泊まっている旅館に一つの弾丸が見えた。

俺は剣の上を滑らせて上に跳ね上げる。

「レキ、俺の後ろに」

俺がそう言うのとレキはコクンと頷き俺の後ろに下がる。

パシュ！パシュ！と障子を破って弾が飛んで来るのを一つ一つ叩き切っていく。

「レミントンM700、距離は2180m。山岳方面から撃ってきました」

「そうか」

レキの絶対半径は2051m。

俺の絶対半径は3000m。

傭兵だった俺には及ばないが武偵高最強のスナイパーを超える奴か。

なかなかやる。

「ここは危険です」

「分かっている。行くぞ」

剣を鞘に戻し部屋を出る。

警察に電話しているであろう沙織さんを背に、勝手口から屋外へ出る。

その時、どこからともなく声が聞こえた。

「風切梓 レキ 2人とも 投降しやがれ です」

母音と子音を切り貼りして作ったような、人工音声が届いてきた。

「レキ、そいつは任せる」

「はい」

俺がそう言うのとレキはドラグノフを空に向けて撃った。

黒く着色されたラジコンヘリが、ドライブウエーの方に墜落していった。

俺は地面に手をつけ風を縦に流す。

上空から更に何発もの銃弾をばらまいて来るのを風で吹き飛ばし、上昇気流を起こして銃弾を逸らす。

「――私は一発の銃弾――」

レキが上空に3発撃つ。

その度に空中で爆発が起き……煙の帯を引きながら、ラジコンヘリが墜落するのが見えた。

「逃げたら そ……と」

途切れ途切れに何か言おうとしているのをベレッタで破壊する。

「ヘリはもうありません。旅館の陰にから森へ入り、回り込んで反撃しましょう」
ドラグノフを低く持ったレキの声に頷く。

ボーカロイドによる脅迫音声、短機関銃サブマシンガン

これは『武偵殺し』——峰理子の攻撃方法と同じだ。

俺とレキは駐車場を抜け、木々の陰に身を潜めるようにして、

まずは林、そして、すぐその裏に続いている森へと入った。

声を潜め、ヘカートを下ろして暗視スコープに切り替える。

「レキ、こここの地形は頭に入ってるな」

「はい。先ほど旅館に向かうバスから、地形を見ていました」

「よし。ここを移動……は出来ないから二手に分かれる。レキはそのまま」

「危険です」

「大丈夫だ。相手の狙撃は風を使って避けられる。微光暗視照準器スタライイト・スコープは持つてるか？」

「いえ、ライティング・レティクルのみです」

「恐らく相手は長期戦を想定し、こちらに何かを向かわせてるはずだ。だから短期戦でいく。レキは音響弾カノンか閃光弾フラッシュユ。どっちか持つてるか？」

「両方持っています」

「そうか」

「梓さん」

「なんだ？」

「撃ち合いになり、私が撃たれても私のところには戻ってこないでください」

レキは覚悟を決めた顔だったが俺はため息をついてデコピンをする。

「…っ！」

レキが何をやる、みたいに少し睨んで来る。

「俺がこう提案したのは2人ともが無事に助かる可能性が一番高いから提案した。それに、レキが怪我をしても治る。その考えはダメだが。……お前だけに重荷は背負わせないや」

そう言つて俺はレキの額にキスをする。

すると、レキの体が淡い光で覆われた。

「これは？」

「ある程度痛みを緩和する光だ。これは俺にも使えたから撃たれても多少は安心だろ？ 撃たれないことに越したことはないが。それでは行くぞ。最初は閃光弾フラッシュユ、その後音響弾カノンだ。行くぞ」

『赤霧の名の下に』

そう眩くと雰囲気が変わる。

俺は風を集め、人型にして飛ばす。

その風を撃ち抜いて来たのでそのすきに走り出す。

そこで飛んで来た弾は『不可視の銃弾
インヴィジブル
で弾く。』

そこでレキに合図し、レキが閃光弾フラッシュを撃つ。

暗視スコープを外し、ヘカートを覗く。

覗いてみるといきなりの光に目がやられたのか目を抑えている。

その顔はココによく似ていた。

そのココ？は苦し紛れに撃って来る。

それを撃って撃ち落とす。

レキが次に音響弾カノンを撃つ。

俺は追撃されないようにレミントンM700の銃口を狙う。

「俺は銃だ。遠くてもなお相手を沈黙させる。何事にも束縛されない。赤霧の名の下に。その力を持って敵を穿て」

そう遠距離狙撃の時の言葉を呟いて引き金を引く。

その銃弾は銃口に吸い込まれるように入って行き、銃が碎け散った。

「対象の沈黙を確認」

スコープから目を離し、レキの方に近づく。

「レキ、ここを離れるぞ」

「……はい」

……レキの反応が遅い。

少し体を見ると脇腹辺りが少し赤くなっていた。

「銃弾を受けたな」

「かすり傷です」

「ダメだ」

俺はドラグノフを取って背に背負い、膝に手を入れ抱え上げる。

所謂、お姫様だっこだ。

「あの……」

「行くぞ」

そう言って飛び上がる。

木の枝に乗り、飛んでまた木の枝に乗る。

そうして移動しているところに犬の鳴き声が聞こえた。

「ハイマキか？」

そう思って飛び降りる。

レキに負担がかからないように着地しハイマキのところに行く。

しかし、こちらには目もくれず向こうを見続ける。

そこから数匹の犬が出て来る。

「ハイマキ。行くぞ」

俺はその集団を一瞥する。

ハイマキも俺の雰囲気がかかったのか目を離したときに、

飛びかかって来た。

俺は風の壁を作ってガードする。

そして、風を集め、一匹ずつ頭を揺らす。

全匹が倒れたのを確認し、頭を叩いて、走り出す。

走って走ってあの場を離れる。

風を使ってブーストしながらも走る。

流石に走りすぎて疲れた。

そこにオートバイの音が聞こえた。

それに乗っていたのはココ。

俺は『インヴェイジビレ不可視の銃弾で撃つ。

「きひっ！」

笑いながら、急ブレーキをかけながら俺を掠めるように擦れ違った。

振り返った俺はしっかりとココを見つめる。

バイクを傾けて停止させたココが、数m後ろから俺へと銃を向けている。

サブレッサ減音器をつけたUZIを。

「銃を捨てるネ」

「断る」

くいくい、とココが銃口で藪の方を示すが俺は応じない。

ココはいらつとした表情を浮かべるが何のことか話し出す。

「レキはー90点。いい駒だから、貰うネ。梓は100点ネ。だから貰って帰るヨ」

「……貰う？何の話だ？」

「これからはステルス超能力者、みんな滅びる。お前らみたいな『ただの人間だけど強い駒』、早

く手に入れておくの、良いネ」

「滅びる、ね。しようがないから見せてやる」

俺は踵で地面を蹴る。

その瞬間、突風にも似た風が起こった。

「な!？」

「俺は超能力者だ。こうして風を操る、な」

その風を集め、ジャンプして蹴り飛ばす。

ココが弾を撃つて来るがその風に阻まれる。

その時、ココを撃つ一本の矢が飛んで来た。

「粹!」

その飛んで来た方向、オープンカーのある車に見覚えある顔が見えた。

ココはパツとバイクに乗ると、

「ココは代々、逃げるときは逃げるヨ。最後に笑えればそれで良いネ。再見」

ツアイチエン

そう言って逃げて行った。

俺は力を使ってレキを治す。

「何があつた!？」

金次がこちらに近づいて聞いて来る。

「ココに襲撃されて追い返したただけだ。レキと一緒にな」

「蕾姫?」

小声で呟きながら、車を降りて来た一人の巫女が来る。

「……そ、そんな。間違いないのですか?」

「あ?」

その巫女が少し驚くようなことを言った。

「この御方は源義経様——チンギス・ハン様の末裔。大陸の姫君です」

第三十五弾 蕾姫

「この御方は源義経様——チンギス・ハン様の末裔。大陸の姫君です」
そうレキを見ながら言った。

……へえ、チンギス・ハンね。

随分と古い人が出て来たもんだ。

「それに、その目は占いで出ている3色金の継承者様ですね」
そう俺の方を見て言う。

「継承者、ねえ」

「な、なんですか？」

「俺は継承者じゃないぞ？ シャーロック曰く俺が初めてだ」

その言葉に更に驚く。

「し、しかしその目は一度死なないと発動しないとお姉様が」

「死んだのは俺だからな。正確には赤霧だが」

「キンちゃん！ 風切君とレキさんはっているね」

ひょこつと車から白雪が顔を出した。

俺はため息をつき白雪に少し文句を言う。

「白雪、すっかりと教えとけよ。『魔劍』デユランダの時に教えてやったろ？」

「ごめんね、風切君。とりあえず此処を離れて星伽神社に行くから車に乗って。レキさんも」

白雪たちが乗って来たオープンカーに乗って白雪の実家？分家？の神社に行く。

俺たちの場所が分かったのは閃光弾フラッシュの光と音響弾カノンの音で分かったらしい。

ハイマキは俺が風で掴んで連れて来ている。

ついでに俺たちが襲われたことを学校側に言っていると、

「ケースE8」だから動かないと言われた。

ケースE8：「内部犯の可能性が高いので周知は出さない。信用できる者にのみ連絡を取り、当事者の手で解決せよ」と言う意味の符丁サイファーだ。

『もし非武装の市民が巻き添えになるようなら、改めて連絡しろ』

とも言われた。

そうなるからでは遅いんだが……。

本当に危険なときは始末しよう。

星伽神社についた。

神社に入る前に俺だけが車から降ろされる。

何でも男子禁制らしい。

でも、遠山一族は別らしい。

レキは「あなたのそばにいます」と言つて車から降りていた。

その言葉に風雪？は戸惑つていた。

流石にチンギス・ハンの末裔を外にほっぽり出す訳にはいかないのだろう。

俺はため息をついて、ポケットから胡椒を取り出す。

それを見て頭の上にハテナを浮かべた風雪。

俺は胡椒を振つて、

「クシユーン！」

くしゃみをして入れ替わる。

風雪はそれを見て困惑していた。

まあ、いきなり男が女に変わったら驚くか。

「これでいい？」

私は風雪に聞く。

風雪は戸惑いながら白雪に確認して頷いたのを見て頷いた。
金次も白雪も、その手があったか、みたいな顔をしていた。
……忘れてたの。2人とも。

ここで一泊させて貰って次の日。

先に金次と白雪は電車に乗ったようでないかった。

私は昨日、ここに来てからレキの事を聞いた。

チンギス・ハンは源義経。

ゲンギスケン
源義経が訛ってチンギス・ハンになったらしい。

最初の頃はドラグノフを立て掛け膝を立てて寝ていた。

所謂、サムライみたいに。

そしてレキの髪の色に関する色金。

琉璃色金の近くで永い時間を過ごしたと言う。

星伽神社に伝わる史書には、

『琉璃色金は穏やかにして、その力、無なり。人の心を厭い、人心が災厄をもたらすとし、ウルスを威迫す。琉璃色金に敬服せしウルスは、代々の姫に己の心を封じさせ、琉璃色

金への心贄とした』

とあるらしい。

だから梓に結婚しろと迫ったのは、女を攫い、自分の妻とする——文字通りの『掠奪婚』の風習が融合・転化したものなのか。

ウルスには男がおらず、47人全員が女だから『掠奪婚』みたいに優秀な異性をどこから掠奪して子孫を残そうとする文化を女が継承していても無理はないと。

レキと言う名前もコードネームみたいなものだ。

苗字がないらしい。

かと言う梓も疑われた。

何処かの武将や歴史上の人物の子孫ではないかと。

実際、金次のヒステリア・モードのように雰囲気はおろか、頭の回転や技術。そして、心の変わり方など大きく変わるから血統に何かあるんじゃないかって。

でも、梓のは唯の心の持ちようだし血統とかではなく、スイッチの切り替えだからね。

こう回想に浸っていると、梓の携帯に電話がかかって来た。

「はこ」

『俺だ！金次だ！』

「なんだ？なんか用？」

と、ここで、何か聞いたことあるような事を金次が言った。

『新幹線がジャックされた！』

第三十六弾 能力

『新幹線がジャックされた!』

金次から電話がかかってきてそう言った。

「よくジャックされるよね。金次は」

『冗談はいい! 風雪に頼んで応援に来てくれ!』

「了解だよ」

私はそう返し、電話を切る。

私は武器がない。

実際はあるんだけど寮にある。

梓も持つて来てくれたらしいのに…。

そんな事も思いながら神社内を風雪を探しに行く。

そこで角を曲がった時に、

「きゃあ!?!」

「うわつとー!」

誰かとぶつかりそうになる。

よく見ると風雪だった。

「風雪ちゃん！」

「は、はい」

そう風雪の名前を呼び、金次からかかってきた電話の内容を説明する。

「と言うわけだから私とレキは先に行くよ。念のためにへりでも用意しといて！」

そう言つてまた走る。

次はレキのところへ行つた。

「レキ！」

「お話は聞いていました」

「オツケー！じゃあ飛ぶよ！」

私はレキの手を取り走る。

縁側まで走つて思いつきり飛ぶ。

神社の外に出て、私は梓と変わるために降りて胡椒を取り出す。

胡椒を振つて、

「クシュン！」

くしゃみをして入れ替わる。

「行くか」

「はい」

俺はレキの膝裏に手を入れて抱え上げる。

そして足に力を入れて飛び上がる。

風を蹴って進んで行く。

時々風に乗りながら進み、

「レキ、ドラグノフを使って駅を見つけてくれ。そこから追う」

「分かりました」

レキに確認を頼む。

実際、俺は本気で風を使うと音速を超えることが出来る。

そんなに長い時間使えないが。

「見つけました。ここから、約3kmです」

「了解だ」

了解して更に力を入れる。

勿論、レキに負担がいかないように風で覆う。

それからかれこれ10分ほど風を使って飛ぶ。

「あの、梓さん」

とレキが声をかけてきた。

「なんだ？」

「長時間能力を使っていますが、お身体の方は大丈夫ですか？」

「大丈夫だ。俺の超能力はグレードが低い。だから体にかかる負荷も少ないんだよ」

「しかし、白雪さんが最近、超能力を使いづらいついていました」

「あー……。レキ、誰にも言わないって約束出来るか？これは俺に関わる重大な秘密だから」

「はい、約束します」

そう言っただけでじつとこちらを見てくる。

その眼差しに俺はため息をついた。

「分かった。まず、最初に俺は超能力者じゃない」

「？」

「そのままの意味だ。俺は超能力者というものに分類されない。風を操ること自体が俺の能力だからだ」

「というと？」

「生物にはあるだろう？能力が。周りを視認する能力とか、相手の意図を理解する能力とか。俺のは風を操る能力があるだけなんだよ」

「ということとは最初から使えるんですね。周りを見るとかと同様に」

「そうだ。更に言えば俺にはリミットがない。白雪やジャンヌのように能力の使いすぎとかな。」

俺には使える風の大きさにリミットはあれど、時間制限はない」

「……………」

レキが驚いてるように見える。

表情が豊かになったような気がするなあ。

「電車が見えました」

「了解だ、つと電車の上に誰かいるな」

「……………金次さんがココにやられています」

「金次があいつに負けた技か。レキ、金次を締めているココのツイントールを撃てるか？」

「？」

「……………難しいです。1秒でも止まれば撃てますが」

「分かった。5秒後に揺れを止める。行くぞ」

「はい」

レキは肩にかけていたドラグノフを手に取りスコープを覗く。

「5……………4……………3……………2……………1……………」

「0、今だ」

俺は勢いを殺してパツと止まる。

その瞬間にレキが二回引き金を引いた。

その弾は真っ直ぐ飛んでいき、ココのツインテールを根元から撃ち抜いた。

ココのツインテールがショートカットになっている。

「よし、乗り込むぞ」

「はい」

そう言つて風を思いっきり使つて音速を超えるスピードを出し、新幹線の上にいる金次とココたちの間に降り立った。

「よう、金次。待たせたな」

第三十七弾 守る

「よう、金次。待たせたな」

新幹線の上に降り立ってそう言った。

風を操って抵抗をなくす。

「梓！来てくれたか！」

「おう。またやられそうになってたな」

俺が少しからかってやると顔が真っ赤になった。

「なっ！今はいいだろう！」

「隙ありネ！」

ココがシャボン玉を作って飛ばしてくる。

俺は風の壁を作って防ぐと爆発する。

「へえ、今の爆弾だったのか。まあいい。金次、レキお前らは電車の中で出来ることをしてろ」

「私も残ります」

「分かった」

「梓、俺も残るぞ」

「ダメだ。ここに3人も要らない。それよりもこの新幹線が加速している原因を止めろ」

「……分かった」

金次の返事を聞き、俺は鞘から剣を抜き2人目のココの銃弾を切る。

「レキ、狙撃のやつは任せた」

「はい」

そう言つて俺はホルスターからグロックを抜き、撃つ。

1人目のココが銃弾を剣で受け、3人目のココが迫ってくる。

俺は剣を前に向け弓を射るように構え、撃つ。

銃弾が燃え上がって、ココたちに迫る。

急に弾が燃え上がったのに驚いたのか、剣で受けようとするのが遅かった。

その弾は1人目のココの肩を掠め、ココの肩が焦げる。

「熱っ！」

俺はそこから走って行き、1人目のココに剣を振るう。

ココは剣で受けたところに、俺は剣を離し落ちる剣をグロックで撃つ。剣はくるつと回つてココの顔を擦り、その剣を避けようとしたココの腹を蹴る。

1人目のココが下がって、3人目のココが頸椎を狙って手刀を放ってくるのを手を受け止め腹を殴り、掌底で顎を打つ。そしてしゃがみながら足を払い、倒れたところを風で拘束する。

そこで2人目のココがこちらを撃つて来た。

その弾は『不可視の銃弾』で弾く。

そして1人目のココが振るってきた剣を受け流し、そのまま首を柄で殴って気絶させ、剣を鞘に、グロックをホルスターに戻して2人目のココにヘカートを向けるが、既にレキが倒していた。

俺はふうつと息を吐き、ヘカートを戻す。

「レキ、怪我はないか？」

「大丈夫です」

ココ達を回収し、新幹線内に入る。

そこには一般人もいた。

「金次、ココは倒した」

「おう、爆弾の解除はまだか!?平賀さん!」

「もう少しなのだ!」

トイレの中に何かもポンプみたいなものを入れている。

そこに、武藤が来た。

「金次！もう間に合わねえぞ！」

「平賀さん！」

「もう、少し！」

なにやら頑張っている。

俺は新幹線の継ぎ目まで行つて金次に声をかける。

「新幹線を止めればいいのか？」

「そうだ！でもこの爆弾はスピードが落ちると爆発するようになってる！」

「なら、解除し終えたら叫べ」

俺はそれだけ言い残し新幹線の上に出る。

新幹線の上を走りに走つて新幹線の先頭まで行く。

「梓あ!!」

金次の声が聞こえた。

俺は新幹線から飛び降りて、新幹線の前に出る。

そして、風を纏い、前方に集中させて受け止める。

「はあああああ！」

俺は全身から力を入れて全力で止める。

しかし、新幹線の勢いが強く、押されていく。もう少して東京駅に激突するところで、止まった。

「ふう、止まったか」

「梓！大丈夫か!?!」

金次が叫んできたので大丈夫の意味を込めて手を挙げる。

東京駅の新幹線のホームは前もって人払いされていたのか、無人だった。

爆発した際の盾にするつもりだったのか、駅には無人の山手線、京浜東北線、中央本線、東海道本線の列車が密集して止められている。

あややは爆弾の詰まったボンベを抱えながら出てくる。

「東京うく、東京うく、お降りのお客様はお忘れ物のないようお気をつけ下さい、と」最後に調子つ外れなアナウンスをしながらココ2人をズルズル引きずって出てきた。

×型に重ねられてホームに転がされたココ姉妹は、近づいたら嘔みつきそうな表情でこちらを睨んでいる。

アリアはココの袖の中からリーナイフや煙幕缶など、次々と武器や道具を取り出して
いる。

そこで、しぼんだゴム風船みたいなものが出てきた。

(あれは……)

何となく嫌な予感がしたのでグロツクとベレッタを抜く。

すると、先ほどのゴム風船が人型に膨らんでいく。

「まづいいー！」

俺はそのゴム風船を撃ち、風を感じたのでその方に銃を向ける。

しかし、3人目のココがこちらにM700を向けている。

「ー妹たち、撤退ヨ。一旦、香港に戻るネ」

ドラグノフを持ち上げようとしたレキに、

「レキ動くだめネー！」

ココが叫ぶ。

レキは俺が狙われていることに気づき、銃を構えない。

アリアもココ姉妹にしがみつかれている。

「風、レキをよく躡けた。人間の心、失わせてる。これらの戦いでよく分かったヨ。お前、使えない女ネ。だからもう、お前、いらない」

「……」

「レキーーお前、まだ弾を持つてるハズね。それで死ぬ。今、ここで」

「させねえよ」

俺が口を開く。

「レキが心を失ってるだ？ふざけたこと言ってんじゃねえよ。レキは最初から人間だ。他の人より感情が少ないだけの、ただの女の子だ。お前がレキを語るなよ。このアリアもどきが」

「いいんです」

レキが口を挟む。

「ココ、私が死ねば梓さんを狙わないと約束出来ますか？」

「バカにする良くないネ。ココは誇り高き魏の姫ヨ」

「ー誓いを破れば、ウルスの46女全員であなたを滅ぼす。かつて世界を席卷した総身を以って、あなたの命を確実に奪う。分かりましたね」

背を伸ばしたレキが、銃口を自らの顎の下につける。

「よせ……レキー！」

「梓さん。ウルスの女は銃弾に等しい。しかし私は……失敗作の、不発弾だったようです。不発弾は、無意味な鉄くずなのです。梓さん、あなたは自分を信じろと言ってくださいましたが、私はあなたを守るためにー私自身を撃ちます」

「……よせ……！」

「梓さん、ありがとうございました」

レキが自分を撃とうとした、その時、前世から今までの記憶が走馬灯のように蘇った。

（俺は、また守れないのか……。あの時のように、あいつらのように……。……ふざけんなよ、俺のために言ってくれたあいつらの想いを、自分が好きになった女を。戦いでいった仲間。その中にいた親友、あいつらの想いを絶対に守る！）

俺は銃を離し指を手前に引く。

風を使い、思いつきりぶつける。

そして、レキが引き金を引いた。

「……………えっ?」

しかし、その弾はレキには当たらず、

「ゴホッ!」

俺に当たった。

実際、手で風を使うのではなく、指で操ったから逸らすのがずれた。

そして、俺は地面を踏みつけて風を起こす。

その風を尖るように集めて放つ。

「きゃー!」

「うぐっ!」

持っていたココの手のM700を吹き飛ばす。

俺は風を纏い、跳躍してココの首元に蹴りを放った。

「がはっ！」

その蹴りを地面に叩きつけてココは倒れた。

俺は血を吐く。

銃弾が通ったのは心臓の少し上。

それだけでも奇跡だった。

「梓、さん」

俺の状況を見てレキが眩く。

俺はレキの近くまで行き、倒れそうになるのをレキに支えてもらう。

「……何故、何故そんな無茶を……」

「言った、ろ？お前を、守るって、それが、自分を穿つ、銃弾だとしても、レキを、傷つけるのは、許さない」

俺はレキの頭に手を乗せる。

その時、レキに笑顔が浮かび、笑いながら涙を流した。

第三十八弾 バスカービル

「知ってる天井だよ、もう」

天井を見上げながら言った。

何回も入院しているのもう慣れた。

ふと、布団の中を見てみるとレキが寝ていた。

俺がどれだけ寝ていたかは知らないが、多分、また心配をかけたのだろう。

結構ぐっすりと眠っていた。

傷のある胸もとに手を当てる。

傷は小さく、風と防弾制服おかげだろう。

今回は早く治りそうだ。

「……んっ」

そんな事を考えていると、レキが身をよじる。

俺はレキの頭を撫でながら、ぼーっとしておく。

「梓さん？」

「レキ、おはよう。今が何時かは知らないが」

「おはようございます」

それから、事の顛末を聞いた。

ココ姉妹は全員逮捕。

俺はすぐさま病院へ搬送された。

レキは俺に付き添い、金次とアリア、白雪は帰った。

ついでに、俺が寝ていたのは丸一日だと。

「風の」

「ん？」

「風の声が聞こえなくなっていました」

「いいじゃないか」

「……」

「これで、お前は自由、だろ？」

「……………はい」

そう言つて、今まで見たことがなかった笑みを浮かべた。

「よかった。すっかり笑えるじゃないか。可愛いと思うぞ」

面と向かつて言うと、照れたのか少し顔を赤らめた。

そして、はっ！と言う顔になり座り直す。

「梓さん。少しご相談があります」

「チームのことか？」

「はい。私は金次さんのところに入ろうと思うのですが、その為にはチーム全員、ディヴィーザ防弾制服・黒ネロで写真を撮る必要があります。ですから、あの」

「俺に無茶をしろって？」

「……すみません」

「大丈夫だ。その時、少しだけ抜けさせて貰えばいい。痛みは我慢できるさ」

「しかし……」

「ん？」

「その写真撮影まで、あと10分しかありません」

「は？」

「……マジで？」

レキの方を見ると、申し訳なさそうに目を伏せている。

「マジか！急ぐぞ！」

俺は窓を開けて、レキを抱えて飛ぶ。

風を蹴って全力で進む。

「レキ、俺の防弾制服・黒は持ってきてるか!？」

「はい！」

「オツケー！」

時々風に乗って電信柱や家を避ける。

八分後、東京武偵高についた。

写真を撮る場所まで痛みを我慢しながら走る。

病院服の上に　を着る。

というか今、血が出始めた。

「梓！早く！」

金次が手招きをしている。

アリア、理子、白雪も待っている。

俺とレキも急いで行くが、ゴホツ！と血を吐く。

やば、傷が開いた。

「おらあ！あとちよつとやぞ！」

蘭豹がどんどんつ！とM500を撃つ。

口元を拭い金次たちに駆け寄る。

「悪い！遅くなった！」

「大丈夫だ。間に合ったしな」

「おらあ！それじゃ締め切るぞ！」

「5……………4……………3……………2……………1……………」

「0！」

蘭豹がカシヤ、とシャッターを切る。

「9月23日、11時59分、チームバスカービルー承認、結成！」

こうして、金次がりーだーの俺たち『バスカービル』はチームになった。

極東戦役

第三十九弾 G O F O R T h e N e x t

チーム『バスカービル』が結成されてから、約一週間。

俺はいつものようにレキと夕食を食べていた。

最近、レキがたまにだが笑みを浮かべることが増えた。

……いい変化だ。

夕食を食べ終え、皿を洗っていると電話がかかってきた。

「はこ」

『ここ、これは、風切梓の携帯で合ってるか?』

……誰?

「どちら様で?」

『わ、私はジャンヌだ。2年、インフォルマ情報科の』

「ああ、イ・ウー最弱の」

『その覚え方は気に入らないが、まあいい。それより、今夜0時から『パンデイル宣戦会議』が開催される。お前も来い』

「宣戦会議？」

『ああ』

「なんだそれ？」

『レキから聞いていないのか？ 適当に言えば開会式だな』

「開会式、ねえ。どうせ危険な奴らがくるんだろ？ どつかの軍隊の隊長とか人間じゃない奴とか」

『まあ、否定は出来ないな。でも、お前や遠山も人間を辞めていると思うがな』

「何を言う。俺や金次は戦いたくて戦っているわけじゃない。

ただ、守る為に戦っただけだ。お前ともな」

『……まあいい。とりあえず、レキと一緒にいいから来ることだ。開催場所はレキから聞け』

「分かった」

そう言つて電話を切る。

「レキ、今日の夜に宣戦会議があるよな？」

皿洗いの続きをしながら、レキに尋ねる。

「はい」

レキがぼーっとした表情だが、肯定する。

「何処でやるか知ってるか？」

「……何故ですか？」

「ジャンヌに呼ばれたんだ。お前も来いってな。お前はウルス代表として行くんだろ？」

「……はい。ですが、梓さんは何処の組織にも属していません」

「多分、この目だからだろ？」

「……？」

「こうして会議をするのは恐らくシャーロックがいなくなつたからだろう。シャーロックは絶大な力を持つていたからな。そのシャーロックが偶然とはいえ出来たこの目の『白銀の銃弾』プラチナブレットは三種の色金が混ざつて出来たものだからな。この目欲しさに襲つて来るかもしれない」

「……ん？と言ふことはアリアも来るのか？」

「それともアリアの、チーム『バスカービル』のリーダーとして金次が来るのか？」

「それに、もしレキと結婚するなら、俺も無関係じゃない」

「……」

俺がそう言うと言顔を赤らめた。

「……俺も恥ずかしいが、表情には出さない。」

「だから、場所を教えてください」

「……レインボーブリッジ寄りの学園島の南端にある、曲がった風車の下です」
「了解」

その日の11時30分。

俺はグロツクにベレッタ、友人の剣「ルウト」

そして、ヘカートを背負ってレキの部屋へ行く。

レキも、ドラグノフを背負い、スカートの下に銃剣も装備している。

「行くか」

「はい」

俺はレキを抱え上げ、飛ぶ。

スピードはゆっくりで、学園島の南端の風車の上に着地した。

海の向こうを見ると、何やら嫌な雰囲気がある。

数人だが、手強そうな感じがある。

そこに、甲冑姿のジャンヌと、金次がきた。

「梓!なんでお前」

と、金次がそう言うて来るが、俺は手を挙げるだけにしておく。

金次がここへ来ると向こうの雰囲気が少しだけ変わった。

何やら金次を警戒しているようだ。

「――まもなく0時です」

レキが言つて、その時刻が0時を告げた瞬間。

曲がり風車を大きく円形に囲むように、複数のライトが灯り、その光の中にいくつもの人影が霧の中に浮かんだ。

その影の姿形は、人影ばかりではない。明らかに巨大メカと思われる影や、魔女っぽいシルエツト、何やらクネクネと体を動かすピエロのようなやつ。

……やっぱり人間じゃない奴がいるじゃないか。

「――先日は藍幫あまがまのココ姉妹が、とんだご迷惑をおかけしたようで。陳謝致します」

その影の1つが1歩前へ出てオレ達にお辞儀をしてきた。

……なるほど、あれがココ姉妹の親玉か。

その男に続いて近くの地面で、ゾゾ、と黒い影がうごめいているのが見え、その影はズズ、と人の形を成して地面から起き上がった。

「お前達がりユパン4世と共に、お父様を斃した男か。信じがたいわね」

這い上がってきた影は、白と黒を基調としたゴシック&ロリータ衣装に身を包んだ金髪ツインテールの少女で、手には夜なのにフリル付きの日傘が持たれていて、その背にはコウモリのような形の大きな翼が生えていた。

他にもデカイ十字架のような大剣を背負った白い法衣を着たシスターもいて、1人1人がリアクションに困らない存在感を放っていた。

次に現れたのは、獸耳が生えた少女に、きら、きら、と砂金を舞い上がらせて登場を演出してきた、砂礫の魔女パトラと、大鎌を担いだ金次の兄のカナ。

それで今まで黙っていたジャンヌが、役者は揃ったとでも言わんばかりに一同を見回して語り出した。

「では始めようか。各地の機関・結社・組織の大使達よ。宣戦会議——イ・ウー崩壊後、求めるものを巡り、戦い、奪い合う我々の世が——次へ進むために」

Go For The Next

第四十弾 前戯

「では始めようか。各地の機関・結社・組織の大使達よ。宣戦会議——イ・ウー崩壊後、求めるものを巡り、戦い、奪い合う我々の世が——次へ進むために」
Go For The Next

そんなジャンヌの声に気配がピリツとした。

「まずはイ・ウー・研鑽派^{ダイオノマド}残党のジャンヌ・ダルクが、敬意を持って奉迎する。初顔の者もいるので、序言しておこう。かつて我々は諸国の闇に自分達を秘しつつ、各々の武術・知略を伝承し——求める物を巡り、奪い合ってきた。イ・ウーの隆盛と共にその争いは休止されていたが……イ・ウーの崩壊と共に、今また、砲火を開こうとしている」

ほう、これが金次がシャーロックから聞いた「これから」か。

恐らくここにいる奴らは闇の組織や表舞台に立たない集まりの代表という事か。

「——皆さん。あの戦乱の時代に戻らない道はないのですか」

俺がこの集まりの目的に気づいたところに、先ほどのブロンド髪のシスターが口を開いた。

「バチカンはい・ウーを必要悪として許容しておりました。高い戦力を有するイ・ウーがどの組織と同盟するか最後まで沈黙を守り続けた事で、誰もが『イ・ウーの加勢を得た

敵』を恐れてお互い手出しができません……結果として、長きに渡る休戦を実現できたのです。その尊い平和を、保ちたいとは思いませんか。私はバチカンが戦乱を望まぬことを伝えるに、今夜、ここへ参ったのです。平和の体験に学び、皆さんの英知を以て平和を成し、無益な争いを避ける事は——」

「——できるワケねエだろ、メーヤ。この偽善者が」

とメーヤと呼ばれたシスターのそんな言葉に割り込みをかけたのは、黒のローブにトングリ帽子の右目に眼帯をしたおかつば頭の見るからに魔女な少女だった。

……変な奴だな。

「おめエら、ちつとも休戦してなかつたらろーが。デュツセルドルフじやアタシの使い魔を襲いやがつたくせに。平和だア？ どの口がほぎきやがる」

「黙りなさいカツエーグラッセ。汚らわしい不快害虫。お前たち魔性の者共は別です。存在そのものが地上の害悪。殲滅し、絶滅させることに何の躊躇いもありません。生存させておく理由が旧約・新約アンテイコ スオヴォ・外典アポクリファ含めて聖書ヒビアのどこにも見あたりません。しかるべき祭日に聖火で黒焼きにし、屍を8つに折り、それを別々の川に流す予定を立ててやってるのですから——ありがとうと言いなさい、ありがとうと。ほら、言いなさい！ ありがとうと！ ありがとうと！」

カツエーグラッセと呼んだ魔女の反論に、急に人が変わったようになったメーヤは、

物凄い剣幕で言い寄って、カツエのその首を絞めた。

……本当にシスターか？

「ぎやははは！ おうよ戦争だ！ 待ちに待ったお前らバチカンとの戦争だぜー！ こんな絶好のチャンス、逃せるかってんだ！ なあヒルダ！」

「そうねえ。私も戦争、大好きよ。いい血が飲み放題になるし」

「ヒルダ……一度首を落としてやったのに、あなたもしぶとい女ですね」

「ー首を落としたぐらいで竜^{ドラキュリア}公姫が死ぬとでも？ 相変わらずバチカンはおめでたいわね。お父様が話して下さった何百年も昔の様子と、何も変わらない」

敵意むき出しのメーヤに対して、ほほほつ、と指を口にあてがい笑いながらに語るヒルダ。

ドラキュリアという事はこいつもブラドと同じで吸血鬼か。

よく見るとブラドにあつたような模様が見える。

「和平、と仰いましたか——メーヤさん？」

ヒルダに続いて声を発したのは、藍髯の大使のメガネ男。

男はこの場の空気などものともしない笑顔で淡々と語り出す。

「それは、非現実的というものでしょう。元々我々には長^{チヤンジャン}江のように永きに互^{わた}り、黄^{ホアン}河^ホのように入り組んだ因縁や同盟の誼^{よし}みがあつたのですから。ねえ」

そう話す藍幫の大使は、横に腰掛けていたレキを見るが、レキは動かない。

「——私も、できれば戦いたくはない」

そんな思い思いの言葉を聞いたジャンヌが、また一同を見回しつつ話を進める。

「しかし、いつかこの時が来る事は前から分かつていた事だ。シャーロックの薨去こうきよと共にイ・ウーが崩壊し、我々が再び乱戦に陥ることはな。だからこの宣戦会議の開催も、彼の存命中から取り決めされていた。大使達よ。我々は戦いを避けられない。我々は、そういう風にてきているのだ」

ジャンヌの言葉により、皆がその運命を受け入れたような表情を浮かべると、話はいよいよ本題へ。

先ほどの言い争いは前戯だったようだ。

……でも実際仲悪そうだな。

第四十一弾

F a r E a s t W a r f a r e

「では、古の作法に則り、まずは3つの協定を復唱する」
 やつと本題に入る。

ヒルダやカツエたちのじゃれあい？も終わったから。

「86年前の宣戦会議ではフランス語だったそうだが、今回は私が日本語に翻訳した事を容赦頂きたい。

第1項。いつ何時、誰が誰に挑戦することも許される。戦いは決闘に準ずるものとするが、不意打ち、闇討ち、密偵、奇術の使用、侮辱は許される。

第2項。際限無き殺戮を避けるため、決闘に値せぬ雑兵の戦用を禁ずる。これは第1項より優先される。

第3項。戦いは主に『師団』^{ディーン}と『眷属』^{グレンダ}の双方の連盟に分かれて行う。この往古の盟名は、歴代の烈士達を敬う故、永代、改めぬものとする。

それぞれの組織がどちらの連盟に属するかはこの場での宣言によって定めるが、黙秘・無所属も許される。宣言後の鞍替えは禁じないが、誇り高き各位によりそれに応じた扱いをされる事を心得よ」

……今のジャンヌの言葉を要約すればこうか？

各組織が師団・眷属・無所属を宣言し、その組織の中心戦力をぶつけて戦う。

その際に数でものを言わせるような戦いは認めない。

師団から眷属へ。また眷属から師団への組織の移動も有り。

しかしそれ相応の対応はされる。無所属もまた然り。といった感じか。

「続けて連盟の宣言を募るが……まず、私達イ・ウー研鑽派^{ダイオ・ノマド}残党は師団となる事を宣言させてもらう。バチカンの聖女・メーヤは師団。魔女連隊のカツエ・グラッセ、それと竜^{ドラ}悴^キ公^{ユリ}姫^ア・ヒルダは眷属。よもや鞍替えは無いな？」

ルール説明を終えたジャンヌは、続けて連盟の宣言に移り、先程のやり取りからメーヤやカツエ、ヒルダを勝手に分けて各々の表情を確認する。

「ああ……神様。再び剣を取る私を、お赦し下さい——はい。バチカンは元よりこの汚らわしい眷属共を伐つ師団。殲滅^{レキョウ・テイシ}師団の始祖です」

「ああ。アタシも当然眷属だ。メーヤと仲間になんてなれるもんかよ」

「聞くまでもないでしょうジャンヌ。私は生まれながらにして闇の眷属——眷属よ。玉藻、あなたもそうでしょう？」

メーヤ、カツエ、ヒルダと宣言に相違ないことを述べると、ヒルダは次に金次の隣にいた玉藻と呼ばれた少女を名指しして尋ねる。

「すまんのうヒルダ。儂は今回、師団じゃ。未だ仄間そくぶんのみじゃが、今日の星伽キリストは基督教会と盟約があるそうじゃからの。パトラ、お主もこつちや来い」

師団に属すると答えた玉藻は、今度は近所の子供を呼ぶような気軽さでパトラに話しかけて師団に属するように言う。

「タマモ。かつて先祖が教わった諸々の事、妾は感謝しておるがのう。イ・ウー研鑽派の優等生どもには私怨もある。今回、イ・ウー主戦派は眷属ぢや。あー……お前はどうかのぢや。カナ」

「創世記41章11——『同じ夜に私達はそれぞれ夢を見たが、そのどちらにも意味が隠されていた』——私は個人でここに来たけれど、そうね。無所属とさせてもらうわ」

次々と連盟宣言が成されていく中、カナ。金次の兄だけが初めて無所属を宣言した。

……俺も個人だと思っから無所属でいいかな…。

ま、レキの敵にはなりたくないんでレキに判断を委ねよう。

「ジャンヌ。リバティイ・メイソンも無所属だ。しばらく様子を見させてもらおう」

金一さんに便乗する形で口を開いたのは、リバティイ・メイソンの大使であるトレンチコートを着た男だった。

「——L O O——」

次にそんなルウーという発声？をしたのは、3メートルはある巨大メカ。

……よく作つたな、あんなの。

そいつはそのあともルウー、ルウーと何かを喋っているようだったが、誰も理解できないので、ジャンヌが『黙秘』と判断し、それでルウーとひと声出したそいつはそれ以降黙つた。

「——ハビ——眷属！」

そうして唐突に宣言したのは、10歳ぐらいいに見えるトラジマ模様の毛皮を着た少女だったが、その少女は自分より大きな斧を軽々と片手で持ち上げてみせてから、それを地面に降ろすと、ずしんつ！ と圧倒的な重量感を足に伝えてきた。

よく見ればバサバサの髪、跳ね上がった前髪の下に2本のツノが見えていた。これも人間じゃないのね。

吸血鬼のあとは普通の鬼か。

「遠山、バスカービルはどちらにつくのぞ？」

「な、なんだ。なんで俺に振るんだよ、ジャンヌ」

この場にいる約半数が宣言を終えた辺りに、ジャンヌがここにいる理由が見えなかった金次に宣言を促す。

バスカービルは組織じゃないけどな。

「お前は、シャーロックを倒した張本人だろう」

「い、いや。あれはどっちかつつーと流れで……アリアを助けに行ったら、たまたまシャーロックがいたっていうか……」

「まだ分からないのか？ この宣戦会議にはお前の一味、そのリーダーの連盟宣言が不可欠だ。お前はイ・ウーを壊滅させ、私達を再び戦わせる口火を切ったのだからな」

そこでキンジもあれやこれやとジャンヌに抗議をするが、ジャンヌは全く取り合わずにどちらにつくかを問う。

その様子に見かねたヒルダが割って入った。

「新人は皆、そう無様に慌てるのよねえ。そのウルスのお付きはなかなか立派よ？」

そいつはどうも。

「聞くまでもないでしょう？ 遠山キンジ。お前たちは師団。それしかありえないわ。

お前は眷属の偉大なる古豪、ドラキュラ・ブラド——お父様のカタキなのだから」

「——それでは、ウルスが師団に付く事を代理宣言させてもらいます」

ヒルダの言葉でキンジが師団に付いたとみなされた瞬間、レキが間髪入れずに師団に付く事を宣言。

レキ自身もバスカービルの一員だから当然の流れだな。

「藍幫の大使、諸葛^{しよかつせいげん}静幻が宣言しましょう。私達は眷属。ウルスの蕾姫とその従者には、先日ビジネスを阻害された借りがありますからね」

……従者じゃねえよ。

「チツ。美しくねエ。ケツ——バカバカしいぜ。強えヤツが集まるかと思つて来てみりや、何だこりや。要は使いつ走りの集いつてワケかよ。どいつもこいつも取るに足らねエ。ムダ足だったぜ。……いや、一人いいのがいたな」

そう言つてみてくる男。

……俺はホモには興味ない。

と云うかお断りだ。

ジョーサード

「G III——ここに集うのは確かに『大使』。戦闘力ではなく、本人の希望・組織の推薦に加え、使者としての適性、一定程度の日本語が理解できる事などを基準に選出されている。また、義務ではないが——お前のような個人でない限り、大使にはかんがんないし好戦的ではない男か、若い乙女を選ぶのが古くからの仕来りだ。お前の求める様な面々ではない事は認めよう。だが、いいのかG III。このまま帰れば、お前は無所属になるぞ」

「——関係ねえなツ」

「……私達と同じ物を求め、奪い合う限り、いずれは戦う事になる。その際に師団か眷属に付いておけば、敵の数が減るのだ。私達は各々の組織の人数を明かしてはいないが、少なくともこの十余名のうち半数は敵に回さずに済む」

「関係ねえ。この中で戦いたいと思うのは、そこのお前、お前だけだ」

そうやってジーサードが指差したのは、

「俺か？」

そう、俺だった。

「ああ、お前だけが何もせずただジッと見ていたな」

「発言する機会がなかったからな」

「それに、その吸血鬼女には興味なしと最初から見えていなかったし、我関せずと傍観を極めていた」

「……」

「そして、こうやって俺たちがくるのを、その銀髪の女やウルスの女以外に気付いてたな。しかも、大体の実力を把握して」

「……はあ、よく見てるな。流石GⅢと言うべきだな」

「ほう？俺の事を知ってるのか」

「お前自身は知らん。でも、ジーサードという意味は分かる。が、今はいいだろう」
「ああ、じゃあな。また全力で殺しにくるぜ」

そうやって文字通り消えた。

……また、面倒なのが来たな。

しかしそれで全ての宣言が済んだことで、進行役のジャンヌが締め言葉を紡いだ。

「最後に、この闘争は……宣戦会議の地域名を元に名付ける慣習に従い、
『^F_a^r_E^a<sub>s^t^W_a^r<sub>r^a<sub>r^e 極東戦役』——FEWと呼ぶ事と定める。各位の参加に感謝と、武運の祈りを
……」</sub></sub></sub>

「じゃあ、いいのね？」

と、解散ムードに変わると思っ一瞬気を緩めた瞬間、怪しい笑みを浮かべたヒルダ
が最後まで聞かずに口を開いた。

第四十二弾 開戦

宣戦会議の締めを語っていたジャンヌに割り込むように不穏な言葉と怪しい笑みを浮かべたヒルダ。

……うわあ、何か始める気だ。

「……もう、か?」

「いいでしょ別に。もう始まったんだもの」

「待て。今夜は……ここでは、お前は戦わないと言っていないかったか」

「そうねえ。ここはあまりいい舞台ではないわ。高度も低いし、天気もイマイチよ。でも、気が変わったの。折角だし、ちよつと遊んでいきましょうよ」

そう話しながらに俺と金次を見るヒルダとジャンヌ。

よく見ればジャンヌはマバタキ信号で「逃げろ」と送ってきている。

俺は風を展開してレキを抱える。

その間、同時にデュランダルを持ち上げたジャンヌは、その刃に氷を纏わせ、ヒルダは足元の自分の影に溶け込んで姿を消した。

その光景に驚愕するキンジは棒立ち。手に持つベレッタも対象が定まってない。

「遠山、逃げろッ！ 30秒は縛る！」

「レキ、あの影を撃てるか」

「はい」

影に潜んだヒルダが金次へと近寄ってくる中、ジャンヌは叫んでデュランダルをうごめく影に投げつけてザクッ！

と影と地面とを縫い付けた。

「今！」

そこでレキが引き金を引く。

タアンタアンと後から聞こえるが、ブラドと同じなら効かないだろう。

「金次、下がれ！俺たちが対処する！」

俺は風を操作して金次を掴み、迫って来たボートへ投げ込む。

俺はナイフとベレッタを取り出し、弓を射る形を取る。

「ジャンヌ！離れろ！」

俺の意図に気づいて、ジャンヌが飛び下がる。

そして、銃弾をナイフに掠らせ燃え上がる。

その銃弾が影に当たり、穴が開く。

不意に視界に入った玉藻が、学園島の方を向いていることに気付き、俺もそちらを見

ると、ゾロゾロと他のやつらもそちらを向いた。

まあ、気づいてたからな。

その数秒後、その方向から小型のモーターボートの走る音が聞こえてきて、この空き地島に接触する音がしてから、その辺りから見覚えのある姿が現れた。

「SSRに網を張らせといて正解だったわ！　アタシの目の届くところに出てくるとはね。金次が飛んで来たのは驚いたけど、その勇気だけは認めてあげるッ！　そこにいるんでしょ!?　パトラ！　ヒルダ！　イ・ウーの残党！　セットで逮捕よ！　今月のママの高裁に、手土産ができたわね！」

……アリア、無謀にも程がある。

「アリア……ここは、ダメだって言ってるだろ!?!」

金次も叫ぶが、アリアはその手にガバメントを抜いて尚も接近してくる。

そのアリアに振り向くL O Oと音を上げる巨大メカ。

その動作で警戒レベルを上げたアリアが、いきなり発砲。

巨大メカの頭上に位置していた風車のプロペラを折ってその重量で巨大メカを潰した。

その様子に心底楽しそうに踊り始めたのは、身の丈以上の斧を軽々と持つツノ少女ハビ。

それと同じように潰れた巨大メカに爆笑していた魔女カツエ。

その背後にはそろりそろりと大剣を振りかぶるシスターメーヤが、

「厄水の魔女……討ち取つたりイー……ッ！」

そう叫びながら大剣を振り下ろした。

……倒す気あるのか？

折角の背面攻撃を台無しにしてる。

そのメーヤに最初から気付いていたらしいカツエは、その手に西洋短剣を持ち出して切り結んだ。

「あー、メーヤ……お前ホント、いっぺん死なないと治らねエなア。そのアホさ」

俺と同じようなことを言葉にしたカツエは、短剣で大剣をいなすと、大剣は足元のコングリートに落ちて突き刺さった。

「お、大人しく斬られないとは……ああ神よ、この者の罪をお許し……いえ、許さなくて結構です！ 神罰代行ッ！ 謹んで務めさせていただきます！」

そう言うメーヤは、すでに肩で息をしながら大剣を下段に構える。

……スタミナないな、シスターさんよ。

そんなメーヤに対して、カツエはその懐から骨董品のような形状の銃を取り出しメーヤに数発ほど発砲するが、明らかに近い距離内にも関わらず、その弾は1発としてメー

ヤには当たらなかつた。

「チツ。やつぱダメかよ。とことん運のいいヤツだな」

やつぱ、と言つた辺り、あらかじめ予測していた節のあるカツエは、その銃をすぐにレッグホルスターに収めて短剣を構え直しメーヤめがけて駆ける。

二人が切り結ぶ瞬間。

その間に素早く割つて入つた人物がいて、その人物、カナは、持っていたサソリの尾の背で大剣を、柄で短剣を器用に静止させていた。

……本当に器用だな。

「お2人さん。今はまだ——ちよつと早いわ。もう帰りましょう？　ね？」

転んだ2人に笑顔で語つたカナは、それでまた霧の中へ後退。

そのタイミングでアリアと金次が俺の元まで辿り着いた。

「アリア、今はギヤアギヤア暴れてる場合じゃないぞ。そのくらいわかるな」

「ギヤアギヤアなんてしてない！　でもそうらしいわね。最初は霧でよく分かんなくなつたけど……」

俺の言葉に1度噛みついたアリアだったが、そんなこともどうでもよくなる状況だと理解はしたようで、その手のガバメントを威嚇するように周囲に向けた。

「パトラはキンジのお兄ちゃんと一緒にみたいだし——ヒルダは、逃げたみたいだし」

アリアに言われてさつきデュランダルに縫い付けられていたヒルダを見ると、確かに影はなかった。

それで改めて周りを見回してみると、リバティー・メイソンを名乗ったトレンチコートを着た男はいなく、金次の足元には手毬？がある。

さらにさっきの巨大メカの中から出てきたスクール水着みたいな紺色のコスチュームを着た女の子が、アリアを指してルールー！ と喚いてどこかへと逃げてしまった。

「なぜ来た、アリア……！ 気をつけろ、ヒルダはまだいるッ。それも、近くに……！」
逃げるぞ！ ヤツはイ・ウーから——『緋色の研究』を盗んでいる！ 危険だ！」

そこへ地面からデュランダルを抜いてジャンヌが近寄ってきて、この周囲にダイヤモンドダストの霞を作り出し俺達の姿を隠していく。

ジャンヌの意図を瞬時に理解した俺は、そのダイヤモンドダストが濃くなるのを待ち、タイミングを図っていたのだが、不意にアリアの影の中からヒルダが現れて、その背後を取った。

「——Int·i·g·ndeste, a poi porneste. (よく確かめてから来れば良かったのにねえ。) Prilejulte face hot.:(まるで飛んで火に入る夏の虫……)」

恐らくルーミア語で何か言ったらしいヒルダは、その左手でアリアの後ろ首を掴ん

で捕らえる。

そのヒルダに対して先手を打ったのは、レキ。

レキの撃った弾はヒルダの頭部を左上から右下へ貫通。したのだが、そのヒルダはアリアから手も放さずに頭をグラリとさせただけ。やっぱりブラドと同じ、か。

「愚かな武偵娘に、おしおきよ」

撃たれても平然としていたヒルダは、笑いながらその口を開いて、鋭く伸びる2本のキバを見せてアリアの首に突き立てた。

第四十三弾 無風結界

「愚かな武偵娘には、おしおきよ」

撃たれても平然としていたヒルダは、笑いながらその口を開いて、鋭く伸びる2本のキバを見せてアリアの首に突き立てた。

悲痛で声にならない声を上げるアリアの顔のすぐ脇を、ヒルダめがけてジャンヌがデュランダルを突くが、ヒルダはアリアから離れたキバでデュランダルを受け流して距離を取った。

その距離を取ったところに俺が風を撃ち込む。

その風はヒルダを貫くが、やっぱり効かず下がっていった。

「嬉しい誤算だわ。私は第1態プリモのまま、もう『殻を外せる』なんて。おほほっ……おっっほっほほほほほっ！ F i i B u c u r o s ! F i i F e r i c i t !
(素晴らしいわ！ 素敵だわ！) ほほほほほほ！」

そんなヒルダの高笑いに苛立ちを覚えつつ、アリアの様子を伺うと、死ぬようなダメージではなかったようだが、がくつと片膝をついてしまっていた。

「毒——か!？」

「……マズいぞ、遠山の。毒よりマズい事になりそうじゃ」

そんなアリアの様子に金次が毒かと予測するが、その足元に転がっていた手毬状態の玉藻がそれを否定。

その疑問は、次に起こったアリアの変化で解けることとなった。

何やら苦しそうにし出したアリアの体から、緋色の光が漏れ始めたのだ。

それに伴って俺の目が熱くなってくる。

「ヒルダめ。お主、『殻金七星』カラガネシチセイ破りまで識っておったか」

「光栄に思いなさい。史上初よ。殻分裂かくぶんれつを人類が目にするのは——」

そうやって玉藻はヒルダと話をしてから、手毬の状態からさっきの子供の姿へと戻り巫女や神主が持つ御幣を持って構え、シスターメーヤにも何やら『戻せ』と指示をした。

……なんとなく嫌な予感がする。

そのすぐあと、アリアの体から緋色の光がいくつか散り散りに飛び、そのうちの2つほどを出た先から玉藻とメーヤ、ジャンヌが打ち合わせたように御幣や剣で受け止めて押し戻しアリアの体に戻した。

しかし飛び散った残り5つの光は、ヒルダ、カツエ、ハビ、諸葛、パトラ。眷属に属した面々の手に渡ってしまった。

光は収まるとどうやら小さな宝石のような固体になったようで、それが何なのかはわ

からないが、玉藻の慌てようがひどい。やはり何か不味いのだろう。

「おい！ウルスの従者！誰のでもいい！取り替えしてくるのじゃ！」

……だから従者じゃねえよ。

取り返す、か。

なら、

「ジャンヌ！玉藻？だったか。どれだけでもいい俺に超能力をぶつけろ！」

俺は風を集め始める。

ジャンヌはこちらの意図に気づいたのか、剣をこちらに向けてくる。

「受け取れ！風切！」

そして、俺に氷の塊をぶつけてくる。

俺はその氷を分解。

自分の力に変えて、半径1kmを風で覆う。

すると、こちらへの風がなくなっていく。

「無風結界 アストラルメイガース」

自分の力に加え、相手の力を利用して風を作る。

その風はすごい圧力になって、逃げられない、

……と思うのだが、

「ちっ！遅かったか」

既にヒルダやカツエなどはいなかった。

俺は手を上げて風を解除する。

「悪いな、止めれなかった」

「よい、俺もあわよくば、くらいにしか期待しておらんかったからの」

そう言って慰めてくれたような気がした。

未だ俺の目は熱く、ほのかに赤く光ってるような気がする。

……何か出来るかもしれない。

そう思って、アリアの手を取る。

シャーロックとの戦いで見ていた、アリアの胸のあたりに意識を持つていく。

「緋弾」の埋まっている辺り。

そこで、埋まっている銃弾を見つけ、力を流し込んでいく。

と言っても感覚的に、だが。

少しずつ、覆っていく。

一周回って、俺は力を解いた。

「ふう、これで多少はマシか」

「お主、今何をした？」

「ん？」

俺が立ち上がって汗を拭っていると、玉藻が聞いてきた。

「何って、『緋弾』の周りを白銀ブラチナブレッドの銃弾で覆っただけだが？」

「……は？」

「とりあえず、場所を変えよう」

というところで金次と俺の部屋に移動を開始した。

第四十四弾 鬼払結界

俺たちは宣戦会議のあと、俺たちの部屋に移動を開始していた。

その帰り道の途中で、シスターメーヤがコンビニに寄ると言い出し、金次と玉藻が先に行き、俺が同行して案内をすることとなって、メーヤと一緒にコンビニに入ったのだが、この人、コンビニの洋酒の酒ビンをはぼ全て買い占めて、菓子パンもいくつか購入。顔をひきつらせる店員から酒ビンの入ったビニール袋を貰って外へと出て、この買い物なんなのかを歩きながら尋ねると、シスターメーヤは優しい笑顔で隣を歩きながら答えた。

「私はI種超能力者でして、自分の体を削って能力を消費ちからします。ですから能力使用後は何かを経口摂取しないと死んでしまうのです。私の場合はアルコールでして。あ、いくら飲んでも酔わない体質なのですが、これから暴飲することをお赦してください」

……へえーそーだったのか。

俺はそんなの気にしたことないな。

「それって、必ず経口摂取での回復方法が当てはまるのですか？」

「そうですねえ。極々限られたI種超能力者はそれではダメという方もいる、とは聞いて

たことはありませんけど、噂程度ですので私には断言はできません。ですがどうしてそのようなことを？」

「いや、俺も超能力者なんですけど、そんなこと気にしたことがなかったですから」「そうなんですか」

俺がいきなり突っ込んだ質問をしてきたため、シスターメーヤも疑問を持って返してきたので、特に隠さずそう回答すると、何やら少し考える素振りを見せたが、すぐにやめて自己完結したようだった。

「それで、アリアの容態についてはどうなんですか？」

『緋弾のアリア』ですね。詳しい話はタマモさんがしてくれますでしょうが、今のところは問題ないはずですよ」

「今のところは？」

「はい。緋弾は7枚の殻金で覆い包むことによつてその力を人の操れるものとしていました。その殻金をあのヒルダが外したのです。内2枚は私達で戻しましたが、2枚では力は不安定。このままの状態が続けば、アリアさんはいずれ、『世界を壊します』」

あれは緋弾を覆っていた殻金？と言うものなのか。

俺のやったことでは気休めにもならないか。

「となると、眷属に取られた5つの殻金を取り戻すことが、アリアを救う唯一の方法、と

いうことですね」

「はい。制限時間タイムリミットの方は私にはわかりませんが、今日明日でどうこうなるような事態ではないかと思われれます」

でも、早く取り返したほうがいいだろう。

俺にはそこまで詳しいことは分からないが。

「大丈夫です。私も必ずや魔女狩りを完遂して、カツエーグラッセから殻金を奪い返しますので」

そうやって両手をヨイショと胸元まで上げて頑張るぞと見せたシスターメーヤだったが、持っていた酒ビンの重みのせいですぐにふらつき腕を下ろした。

……不安だ。普段ほんわかしすぎだろ。

そんな少しフラフラ——超能力を使用した影響か知らないが——なシスターメーヤと一緒に第3男子寮までやって来て、俺たちの部屋まで案内してあげると、部屋のリビングでは「ももまん……天国……」と寝言を言いながらソファーに寝かされているアリアがいた。

一つ安心しつつ、メーヤの買った酒ビンをリビングのテーブルに置く。

「既にこの浮島に『鬼払結界』きばらいけつがいを張っておる。これから周辺にも広げてゆくでの、数日は

守りに徹せよ」

と、何やら話が進んでいたようだ。

「さて、お主には聞きたいことがある。風切と言ったか」

「さつき、アリアにやったことだろ？」

「うむ。あれはなんじゃ？」

「あれは、『白銀の銃弾』を使ったものだ」

「まず、その『白銀の銃弾』とやらはなんじゃ？」

「『白銀の銃弾』はシャーロック曰く緋々色金、瑠璃色金、璃々色金を共鳴させてたまたま出来たものだそうさ。そして、その持ち主が一度死ぬことで発現出来る」

「一度死ぬじゃと？」

「ああ。俺は元々赤霧碧として生きていて、その時に『白銀の銃弾』を目に受けた。そして、風切梓になって発現したと言うわけだ。あと、『白銀の銃弾』って名前は緋々色金の緋、瑠璃色の青、璃々色金の黄色を混ぜて白というわけ。話が逸れたが、緋弾に抵抗させる為に瑠璃色金と璃々色金を使って覆っただけだ」

「ほう、という事は緋弾を無効化したということかの？」

「いや、アリアの『緋弾』俺の『白銀の銃弾』では質量が違う。多少時間稼ぎができる程度だ」

「まあ、あるだけでもマシということじゃな」
「そうだ」

というわけで、とても濃い一日が終わった。

第四十五弾 変装食堂

宣戦会議があつて次の日。

昨日から玉藻とメーヤがいて、アリアが騒いでいた。

めんどくさいので無視してレキを迎えに行き、一緒に登校する。

さて、今日は『アレ』の抽選がある。

学内では気に入っている人もいるし、大嫌いな人もいる。

まあ、俺もそこまで好きではない。

ということで学校に来て、教室に入る。

教室内が少し浮き足立っているような気がする。

そこに金次が一人で来た。

「結局、喧嘩したまんまだったのか？」

「していない。よくわからんがあいつが勝手に騒いで突っぱねられたんだ。というかなんで俺の顔を見て最初の質問がそれなんだ？」

「ま、あれだけ騒いでたからな。で？アリアは？」

「知らん。学校に行けないじゃないって騒いでたし、今日は来ないかもな」

それで金次は自分の席に突っ伏して、もういいだろ的な雰囲気醸し出したので、毎度ご苦労な金次に両手を合わせてから自分の席に着いて一般授業を受けていったのだった。

英語、化学、漢文といたって普通に授業をこなして、3クラス合同のLHRが行われる体育館に移動する直前。

来ないかもと言っていたアリアが、昨夜ヒルダに噛まれた首筋に絆創膏を貼って姿を現した。

……そういうことか。金次が騒がれたのは。金次が噛んだと思っただなあ。

そんなわけで体育館に移動を終えると、騒がしく自由な2年の生徒が思い思いに誰かと会話をしている、うるさい。

「ガキども！ それじゃ文化祭でやる『変装食堂』リストランテ・マスケの衣装決めをするぞッ！」

ドンツ！と騒がしい生徒を天井への威嚇射撃で黙らせて、蘭豹がそう叫ぶ。

静まったタイミングで今度はタバコを吸いながらの綴がむせながらチームごとに分かれるように指示を飛ばす。

俺たち『バスカービル』は合流して、俺たち2年が担当する『変装食堂』のくじ引きをする。

箱の中に何になるか書いてある紙があり、着た衣装の職業をきちんと演じ、それらし

く振る舞う事が求められるのだ。

つまり『なんちやって』は許されない。

真面目にやらないと教務科による体罰フルコースもあるとあって、みんな命がけである。

ここで金次の戦姉妹の風魔が登場。

先に金次がジャンヌの奴を引く。

ジャンヌは『ウエイトレス（アットホームカフェテリア）』に決定。

実際は一度選び直すことが出来るのだが、ここにいないのでそのまま。

続いては俺と金次とアリア。

「じゃあ、行くぞ?」

「「いっせーのーせー!」」

そう言つて三人一斉に引く。

そして、恐る恐る目を開ける。

そこには『女装（東京武偵高）』と書いてあった。

「ふう、良かった。そっちはどうだ?」

金次とアリアを見ると、顔が引きつっている。

金次……『神主』

アリア……『アイドル』

だった。

アリアは顔を真っ赤にして震えている。

「チェンジだ（よ）！」

そう言つて、持っていた紙を放り投げ、もう一度箱の中に手を入れて抜く。

その結果……

金次……『警官（警視庁・巡査）』

アリア……『小学生』

だった。

……少し似合うと思つてしまった俺。

「やったー！やったよアリア！ある意味ハマり役だよ！きゃはははははは！」

そんなアリアに我慢の限界が来た理子が、腹を抱えて床をゴロンゴロン転がつて笑い出す。

それに釣られて我慢していた白雪や金次も一斉に吹き出した。

その金次達の反応で現実に戻ってきてきて壊れたアリアが怒り爆発でガバメントを抜き放つ。

「今のは無し！ 無し無し無し無ぁー……しッ！ まずアンタは死刑！」

自制心を失ったアリアは、箱を持つ風魔にガバメントを向けて本気で撃とうとするが、いち早く察した金次と理子に飛びかかれて動きが鈍る。

「やめろアリア、撃つな！ 蘭豹もいるんだぞ！ 俺らまとめて処分されるだろうが！」
「あきらめようよ『アリアちゃん』！ 理子が衣装作り手伝ってあげる！ きやはははっ！」

「誰がアリアちゃんよ！ 風穴！ 風穴流星群！ 風穴ビッグ・バーンツツッ！」

「おい、落ち着けよ。嫌なのはお前だけじゃない」

そう言つて、金次と理子が抑えているアリアに俺の紙を見せる。

「……女装？」

「そう」

「きやははは！アリアだけじゃなくて、あーくんもある意味当たりだあ！きやははは！」

「ふっ」

そう言つて鼻で笑う。

「何がおかしいんだ？梓」

「俺にはこれがある」

そう言つてポケットから胡椒を取り出す。

「胡椒？　つてまさか！」

「そう、俺はこうすることが出来る」

俺は胡椒を振って、自分の周りを風で覆う。

そして、

「クシユーン！」

くしゃみをして、入れ替わる。

風を解除して、アリアを見て笑う。

「梓曰く、『上げてから落とす作戦』だって。残念だったね、アリア」

私はそう言つてニツコリと笑いかける。

「アリアは梓の作戦を聞いて、更に怒りのボルテージを上げた。

「死ね、死ね！　死ね死ね死ねみんな死ね！　見た奴が死ねば、無かつたことになるんだわ！

むぎいー！」

などと言つて暴れ回るアリアを白雪が羽交い締めし、金次の理子が左右の銃を必死に押さえる。

私とレキは体育館の外に逃げて、防弾扉の陰から顔を半分だけ出してじつと見てあげる。

どうかかしろ、つていう目で金次が私を見てくるが、笑つて、手を振つてあげる。

そして、この後体育館でアリアが「小学生やります」と言うまで蘭豹にジャーマン・スープレックスを30回ほど喰らわされていた。

第四十六弾 準備

変装食堂の衣装決めから数日。

その衣装の準備の締め切りが明日と迫った今日は、その仕上げを行うためにみんなで教室に集まって徹夜で作業することか伝統行事となつてゐる。

衣装の締め切りは文化祭よりだいぶ前に設定されているのだが、その締め切りに間に合わなければ命がないので、みんな死に物狂いで教室に集まっていた。

そんなやつらで賑わう夜9時過ぎの教室には、すでに衣装を着て歩き回るやつらもいて、パツと見でどこかのコスプレパーティーである。

一応言つておくが、

私はと言うか梓は『女装』、金次は『神主』から『警官(警視庁・巡査)』、アリアは『アイドル』から『小学生』、理子は『泥棒』から『ガンマン』、白雪は『チャイナドレス』から『先生』、レキは『研究所職員』だった。

私はレキと一緒に作業しているが一言も話さず、今も制服の上に白衣を羽織つてブラウスをチクチク縫っていた。

そのレキに対して、白雪との会話をやめた——白雪が何やら独り言を言い始めてるの

で推測——らしい金次が、近くに置いてあったメガネを作業中にも関わらずレキにかけ
る。

そのまま、レキが金次を見上げる。

金次は顔を赤くして離れていった。

恐らく、上目遣いのレキを見てヒスリそうになったのだらう。

そこに「みんな、おつはよー！」とガンマン姿の理子が現れた。

今は夜10時ぐらいだから絶対におはようではないが。

テンガロンハットを被ってへそ丸出しのブラウスを着て、革のチョッキとブーツ。デ
ニムのミニスカートと実に理子らしいガンマン姿で意外と似合っていると私でも思う。

「ほら早く！ 絶対ウケるって！ 可愛いのは正義だよー！」

ドア前で誰かの腕を引っ張る理子は、言いながら超笑顔で教室へその人物を引き入れ
ていく。

ズルズルと引きずられてきた人物、アリアは、ようやく見えてきた足に真つ赤なスト
ラップシューズとピンクと白のしましまソックスを履いていて、それだけでもう色々と
同情する。

……でも、意外と似合うと思うんだけどねえ。

「や、や、やつぱり！ いーやーやーよーっ！」

そしてアリアの全身が見えてしまい、その姿が明らかにになる。

キッズサイズのフリル付きブラウス。ピンクのミニスカート。赤ランドセル。その側面にはリコーダーのホルダーが。

……うん。やっぱり似合う。

「ずるいわよ！ 亜里沙になるなんて！」

いつの間にか近くにあったアリアが吠える。

だから、私もそれっぽい理由を答える。

「梓は私に少しでも学園生活を楽しんで欲しいって変わってくれたんだよ？ そんなこと言っちゃダメだよ」

「そ、そうだったの」

そう言って私は満面の笑みを浮かべてあげる。

「……本音は？」

「『上げてから落とす作戦』の続き」

「なんですって!?!」

私が本音を言うのとフリフリのスカートの中からガバメントを抜いてくる。

「冗談冗談。九割はさっきの梓の感想で合ってるよ」

「残り一割は本気じゃない！」

「あははは。退散っ！」

「あっ！こら！待ちなさい！」

私は走り出して、レキを抱えて逃げる。

レキも作業を終わらせていたので良かった。

あっ、私もちゃんと作業は終わらせてますよ？

VS 竜悴公姫&文化祭

第四十七弾 襲撃

リストランテ・マスケ
変装食堂の準備が終わり、アリアの母親の再審がある日。

俺は「るうと」の手入れをしていた。

「るうと」と言うのは友人の剣だ。

そこで、金次から電話がかかってきた。

「もしもし」

『梓か?』

「おう。どうだった?」

『……懲役536年の有罪判決だった』

「やっぱりか」

『やっぱり、だど?』

少し苛立ったように聞いてくる金次。

「ああ、イ・ウー自体秘密だったんだぞ?自ら出頭した理子や、捕まったジャンヌとブラドは誤魔化せないだろ。実際に捕まったんだから。しかし、パトラや俺が殺した偽物、

「イ・ウーのリーダー、シャーロック・ホームズは捕まってないからどうとも言えるしな」
『…………』

「こうしてアリアの母親が生きている以上、まだ時間はある。わざわざ事実上の終身刑にしているのには何かしらの理由があるだろうからな」

『…………そうだな』

「アリアを励ますような言い方をすれば、アリアの頑張りが足りないんじゃない。アリアの母親をわざわざ隔離する理由があると俺は思う」

『…………分かった。アリアに伝えて、つて、な、なんだ？』

突然、金次の声が焦りだす。

まるで、不測の事態が起こっているかのように。

「どうした、金次？」

『ぜ、前方の信号が消えている…………』

そう金次が呟く。

その後、バチバチバチバチチー！と音が聞こえ、
その途端、電話が途切れた。

「…………何があった…………。レキ！俺は少し出てくる！」

「私も行きます」

「……分かった。装備はしておけ」

「はい」

俺はレキに指示をして、ベレッタ、グロック、ソードブレイカーを胸元に装備し、「るう」とヘカートを背に背負う。

「レキ、行くぞ」

「はい」

レキもドラグノフを背負って返事する。

俺はレキを抱えて、窓から飛ぶ。

風を操作しつつ、ビルの屋上を伝って飛んでいく。

進んで行くと、信号が停止しているところに入った。

「レキ、止まっている車や横転している車とかあったら言ってくれ」

レキにそう言うとかクンと頷いた。

俺も下を見渡しながら進んでいく。

と、そこで、バチバチイー！と音が聞こえた。

「あそこです」

先ほど音がした方をレキが指を指す。

その位置が見える場所の屋上に着地して、レキを降ろす。

「レキ、金次が気づくのに遅れたのは恐らく姿が見えなかったからだ。宣戦会議パンデイエレの中で、姿が見つけないのは、恐らくヒルダだ。あいつなら影の中に隠れることが出来るから。ヒルダがいたら、頭を撃て。一度じゃなく、頭でも少しずらしたりして撃て」

「は、」

そう言つて俺もレキも狙撃体制に入る。

ヘカートのスコープを覗き、金次やアリア、理子の姿を確認する。

そこに、宣戦会議の時に見た、ゴスロリの格好をしたブロンドの髪の女、ヒルダが見えた。

俺はレキの肩をチヨンチヨンと叩く。

それを合図にレキが引き金を引く。

ヒルダの頭に銃弾が当たり、弾け飛ぶ。

その頭に何度も何度も銃弾を撃ち込む。

それを見て、俺もヘカートを見て、銃口の前に螺旋状に風を配置する。

そして、引き金を引く。

その銃弾は頭ではなく、体を貫通した。

「多分、これでも効かないだろうな」

ブラドとの戦い状、魔臓を壊さなければ意味がない。

なので、多少の時間稼ぎにすらならないだろう。

そこで、バチツと音が聞こえたので風の壁を配置する。

その風の壁にバチバチツ！とスパークが弾ける。

スコープを覗くと、ヒルダがこちらを見て嗤う。

そこに黒の車が登場し、そこから、茶髪の男子？が出てきた。

その男子が銃を突きつけると、少しヒルダが怯んだような気がする。

……何か入ってるのか？あの銃に。

持っている剣にも怯んでいるように見える。

ヒルダは影の中に入って消えていった。

俺もレキもスコープから目を離す。

「さて、終わったようだし帰るか」

「はい」

ヘカートを背負い、レキを抱えて男子寮に帰った。

第四十八弾 ワトソン

L. Watson

と、流麗な筆記体で黒板に書くど、

きやー、と女子から黄色い歓声が飛ぶ。

……うるせー。耳を抑えたのはこの音量だった。

「エル・ワトソンです。これからよろしくね」

男子にしては高い声で挨拶する。

……こいつにはおかしな点しかない。

恐らく、昨日ヒルダに銃を突きつけていた奴だろう。

金次はため息をついてるし、アリアはわなわなと震えている。

昨日、あいつらに何があったかは知らないが、何やら険悪な雰囲気だ。

……少し、あいつを問い詰めてみるか。

その後は話を聞かずにしらっとワトソンを観察する。

人が集まっているときは少しだけ注意力が散漫になるからな。

金次が女たらしと言うことに反応した。

さらに、顔を真っ赤にしていた。

……隠す気あるのか。

それからは金次につきまとうように行動していた。

そして昼休み。

少し話があると言つてワトソンを屋上に連れ出した。

「なんの用かな？ 僕をじつと観察していたようだけど」

「いや何、リバティーメイソンのやつがアリアに何の用かなと思つてな」

「僕はアリアの許婚だからね。そばにいる邪魔者を排除しようとしたまでさ」

「ほう？ 女のお前がアリアとどう結婚すると？」

俺がそう言い放つと、表情が変化したように見えた。

レキと比べれば分かりやすい。

「何を言つてるんだい。僕は男だよ」

「はあ、それならもう少し隠せよ。さらし外れてるぞ」

「そんなわけない。しっかりと感覚は、あつ」

「単純か。証拠は他にもある。金次が女たらしと聞いて口どもつたな。それに、声を少しも偽ろうとしなかったし、わざわざ香水もつけているな、自分の匂いを消すために」

「……………」

「後は、肩パットにシークレットシューズ、過剰なまでに固めた装備、まあ、装備は関係ないか。そして…」

俺は胸元に目掛けて拳を伸ばす。

ワトソンはその拳を払いのけた。

「……………何の真似だ？」

「その反応だ」

「……………何？」

「男なら胸元に目掛けて拳を伸ばしただけでは払いのけない。俺がナイフや銃を突きつけるなら払いのけるのは当たり前だと思っっているがな。ま、俺はこの目でお前の体を見ていたんだがな」

「それはそうだろう。観察するなら目で見る。」

「そう言う意味じゃない。俺の目は相手の体の内部を見ることが出来る。どこが怪我しているとかどんな病気が、とかがな。さて、ここまで証拠があつてまだシラを切るか？」

俺が言い切るとワトソンがため息をついた。

「……………はあ、いつから気づいていた？」

「最初から」

「最初から?」

「ああ、昨日、お前がアリアを助けに行つた時に、俺はその状況を見ていた。この目でな。その時に気づき、今日お前がここへ来て確信した。金次を見ているときの憤りと、金次が女たらしと知つた時の羞恥。その後の反応。諸々含めて断定した」

「そう、だつたのか」

「それで? わざわざ『転装生』^{チェンジ}として振舞つてるのはアリアのためか?」

「そうだよ。アリアは本家の人間から蔑まれてる。シャーロックのような推理力が無いせいで。だから僕たちのワトソン家で匿う、と言つてはなんだがな」

「お前はアリアをどう思つてる? 推理力が無いからと言つて落ちこぼれだと思ふか?」

「思わないよ。アリアはアリアだからね」

「俺も思わない。しっかりシャーロックの血を継いでいる。戦闘能力と勘の良さをな。アリアには妹か弟がいるだろ」

「よくわかつたね。妹がいるよ」

「そいつは推理力に長けているんだろ?」

「ああ」

「まあ、この話は置いて。俺はお前の性別をバラすことはしない。双方、何の得も無いからな。後、金次には気をつけろよ」

「やはり遠山キンジは危険な存在だな」

「お前にとつてのは」

「……………何故？」

「あいつは体質のせいで、女たらしと言われている。それはあいつが女を苦手としているのにも関係しているが。後はラッキースケベだからふとした時にお前が女だとバレル危険性がある。だから、お前の性別を隠して金次を追い払う時は気をつけろ。そういう意味だ」

「……………わざわざアドバイスカ？まあ、礼は言っておく。そろそろ昼休みも終わるだろうから教室に戻ろう」

「ああ、何か困ったことがあれば相談してくれ」

「ああ」

そんな会話をして教室に戻った。

教室に戻ると、わざわざ女子が文句を言いに来たので、風を配置して無視してやった。

第四十九弾 変わったこと

それからと言うもの、それと言う騒動はない。

ワトソンが金次に嫌がらせをして、グラビア写真を見せられて反撃されていた。

そこには武藤や不知火もいて、男だと思つてから気兼ねなく話しかけようとしていたのだろう。

……女が男のフリをするのは疲れそうだな。色々。

変わったことと言えば、金次とアリアの関係が悪化しているように見える。

それがワトソンの狙いだが、金次から離れて行っているような気がする。

男子寮の俺たちの部屋からアリアが出て行ったのもワトソンが言ったことで、アリアは金次に何とか話をしようとしているような気がする。

理子も何かに怯えているような気がする。

ヒルダはブラドの娘だからだろう。

最近は何トソンが話しかけてくるようになった。

主に金次の情報。

それと、男の仕草や態度とか。

……研究熱心なのはいいが疲れると思う。

男子と話すのが苦手なのか少し頬を染めながら聞いてくる辺り、隠す気があるのかと思ってしまう。

さて、強襲科アサルトの『戦略Ⅰ』を受講し終えて狙撃科スナイプにいたレキを回収して男子寮へと帰る。

そこに電話がかかって来た。

「もしもし」

『ジャンヌだ。風切で合ってるな？』

「そうだが？何か用か？」

『ああ、少し待ってくれ』

そう言って、誰かと話をして、電話が変わった？

『もしもし、風切梓さんでよろしいですね？』

「ああ、そうだが？」

『私は2年、通信科コネットの中空知です。早速本題に入らせていただきますが、先ほど、遠山キーンさんがいらつしやってました』

「それで？」

『ジャンヌさんをお願いされて、アリアさんとワトソンさんの会話を集音していました。』

遠山キンジさんは、その途中でどこかへ行ってしまったので、キンジさんに一番近い風切さんにも聞いて欲しいとの、ジャンヌさんからの電話です』

「それでかけて来たのか」

『はい』

「金次はどんな状態だったかジャンヌに聞いてくれ」

俺がそう聞くと、電話から耳を話してジャンヌと中空知が会話をする。

そして、戻って来て

『何の略称かは分かりませんが、HSSと言っていました』

「……そうか。分かった。金次の件はこちらに任せろ。ジャンヌにもそう言ってくれ」

『分かりました』

そう言つて電話を切る。

俺は考える。ワトソンとアリアの行動と、金次の行動を。

(ジャンヌが言つてたHSSはヒステリアモードのことだろう。しかし、興奮はしていないのにヒステリアモードになったのはトリガーが違うもので起こったものだ。アリアとワトソンの会話を聞いていたのなら、嫉妬か？この場合は『守る』ヒステリアモードじゃなくて、嫉妬からの強行手段の『奪う』ヒステリアモードつていうところか。それになつて出て行つたと言うことはアリアになにかあつたという事。この辺で、アリア

を連れて行って隠せる場所、それでいて金次をおびき寄せることが出来るところ……か)

思考から戻って、携帯の地図を開く。

ビルは隠せるがおびき寄せることが出来ない。

目立つもので隠せるところ……。

「レキ、この辺である程度大きなものを隠せて、それでいておびき寄せることが出来る場所に心当たりはあるか？」

「東京スカイツリーの建設現場なんてどうでしょう？」

「そこなら二つとも達成出来るか。レキ、今から東京スカイツリー全体を狙撃出来るところに移動してくれ。それで、俺が見えたら携帯を鳴らしてくれ」

「分かりました」

レキにそう指示して、風で飛ぶ。

東京スカイツリーに向けて一直線に進んでいく。

東京スカイツリーに着く直前から町の電気が消えていく。

そして東京スカイツリーに雷鳴が轟いた。

第五十弾 スカイツリー

雷鳴が轟いたのを聞いて、俺は階段を駆け上がる。

ヘカートは持つて来ていないが、「るうと」は持つて来ている。

とりあえず、グロックとソードブレイカーを手に持つて、ゆっくり進む。

相当上に登つて、大広間に出た。

そこには見知った顔が倒れていた。

「ワトソン！」

俺はグロックとソードブレイカーをしまう。

ワトソンの背を持つて座らせる。

「風切か」

「大丈夫か？」

「大丈夫だ。遠山に負けてしまった」

そう言いながら少し顔を染める。

「何だ？女とバレたか？」

「……………」

俺がそう言うのと顔が真っ赤になった。

「はあ、まあいい。とりあえず傷治すから、ちよつとごめんな」

そう言つてワトソンの手を握る。

すると、手を払つて来た。

「何をする」

「何つて、傷を治してやろうと思つただけだ。お前も知ってるだろう。俺の目の
『ブラチナフレッド白銀の弾丸』のことを。その中に相手を癒す力がある。それだけだ。ほら、手」

「……分かつた」

渋々と言つた感じで手を出してくるのを握る。

すると、ワトソンの体を淡い光が覆う。

「これは凄いな。傷が消えていく」

「残念だが、失つた血までは回復することは出来ない。あくまで応急処置だ」

「いや、ありがとう。傷が無くなるだけでマシだよ」

「女の子だから傷が残つたら嫌だもんな？」

「なっ!?!からかうな!」

「無理して男続けるより女らしくしておいた方がいいぞ?せつかく可愛いのに」

「か、かわい!?!……君と言ひ遠山といい、僕のことを……」

顔を真っ赤にしながらブツブツと呟く。

「……おかしなこと言ったか？」

その時、もう一度雷鳴が轟く。

そして、ポツポツと雨が降ってきた。

「レキは傘持つてないよな。……薄くなら行けるか」

「風切？」

ワトソンがハテナを浮かべる中、俺は手を上にかがける。

そして風を東京スカイツリーの上に形成していく。レキの絶対半径キリングレンジを考慮して、半径40000mぐらい風を広げる。

この辺りだけ雨が止み、ワトソンが疑問の声を上げる。

「……何をしたんだ？」

「ん？この辺り一帯に風を配置した。雨はレキが風邪を引いてしまうかもしれないからな」

「君は超能力者なのか？」

「ああ、でも学校には明かしてない。と、早く金次のサポートに行かなきゃな」

「僕も行く」

「いいが、あいつは電気使いの超能力者ステルスだろ？金属を体に巻きつけるのは危険だぞ」

「分かっている。当たらないように気をつけるさ」

「ま、危険な場合は俺が守るから安心しろ」

「……あ、ありがとう……」

「それと、もう一度手を出せ」

「あ、ああ」

ワトソンの手を取って、力を使う。

すると、先ほどのような淡い光がワトソンの体を覆う。

「これはさっきの」

「さっきの癒す力とは違う。それは、防御膜みたいなもので、体を包んでダメージを軽減することが出来る」

「ありがとう」

「ああ、それじゃ、行くぞ！」

俺とワトソンは階段を駆け上がって行った。

第五十一弾 毒

俺とワトソンが階段を駆け上がった行くと、弾丸が飛び交う音が聞こえる。

パンツ！パンツ！と音が聞こえ、階段を登り終わるとヒルダに接近戦を挑む理子の姿が見え、髪にナイフを超能力で持って、服を切り裂いていく。

恐らく魔臓を探すためだろう。

金次とアリアはその光景を見て、様子を伺っていた。

俺はその金次のところに駆け寄る。

「金次！」

「梓！それに、ワトソンも……」

「今、どういう状況だ？」

「理子が特攻しているが、あいつには10分で死に至る毒が体を回っている。ヒルダは接近戦を苦手としていて優勢ではあるが」

「……………無礼者！……下がれ！」

「おっと」

ヒルダが小さく電撃を放ち、理子がバックステップをして避けこちらまで後退してく

る。

「……4世イ……許さない、許さないわよ……」

対してあられもない下着姿のヒルダは、放電したまま憎々しげにこちらを見ながら、槍を抱えて傷を再生させていくが、今はそれが精一杯なのかその場から動かない。

「全部見つけたよ、目玉模様——白い肌だから、見つけ難かったけど」

その場に倒れ込みながら呟く理子。

俺は駆け寄って理子の手を持つ。

理子を淡い光が包んで、出来るだけヒルダから見えないように理子に言う。

「理子、毒はじき無くなる。だが、動くな。毒が無くなっても体は思ったように動かないだろう。後は俺らに任せてそれは待ってる」

「分かってる。すまないな、風切」

俺はふっ、と笑って膝から抱え上げて、ワトソンのところに連れて行く。

「ワトソン、隙が出来るまで介抱していてくれ」

「分かった」

「そのの、その剣貸してくれ」

「?ああ、別にいいけど」

「……両太もも、右胸の下、それとヘソの下だ。目玉模様は腿と腹に集中してた」

「分かった、伝えておく」

ワトソンから剣を受け取って、金次たちの元へ走っていく。

そして、理子から聞いた魔臓の位置を伝える。

「場所はわかった……だが、どうする。ベレッタには、あと1発しか弾がないぞ」

「あと……2発なら、あるわ……!」

しかし、現状でどうやらベレッタの銃弾はあと1発しかないようで、アリアもいつもつけてる角のような髪飾りを取って、その底を外し2発の銃弾を取り出しガバメントに装填する。

「というか俺がマガジン持つてるぞ」

「……………」

何とも言えない顔になった金次とアリア。

……別に俺は誰とも戦ってないし。

「あと、理子にも作戦があるみたいだ」

「ヒルダに……違和感を感じるんだ。理子に作戦があるなら、それは——今は、使うな。

4点同時攻撃で仕留めるぞ。そう理子に言ってくれ」

「大丈夫だ。まだ使うなと言ってある」

「そうか」

ヒステリアモードのキンジは、この状況で何かを感じ取ったらしく、いきなり4点同時攻撃を提案する。

雲行きがどんどん悪くなってきていて、遠くに聞こえていた雷ももうすぐ近くに落ちてきそうだったため、前回のブラド戦で落雷に驚いていたアリアのことを考えると、これ以上話し合ってる時間もなさそうだ。

「アリア。同時攻撃をやるにはアリアの力が必要だ。その2丁でヒルダの右胸と下腹部を撃つてくれ。強襲科では急所を撃たないよう訓練されてるが、撃てるな？」

「う、うん」

「梓はヒルダの右腿を頼む。4発目は——俺が何とかする」

「分かった」

全員がキンジの作戦に乗ってやることを決めると、翼以外の回復を完了させたヒルダが、ビリビリになったドレスを脱ぎ捨てて体に電気を纏ったまま立ち上がってこちらに歩み寄ってきていたので、アリア、俺、金次は前へと歩み出る。

「行くぞ……！俺が合図したら——撃て！」

叫んだ金次と俺は同時に駆け出して、ほぼ同時に前へ出て並走してヒルダに接近。

胸からグロックを抜いて、2人いることで狙いが定まらなかつたヒルダは、横風ぎでまとめて倒そうと槍を振るってくるが、ワトソンから預かつた剣で受け止め槍を上蹴

り上げる。

そして、槍を持っている手を切り落とす。

「梓！アリアー！——撃て！」

そのタイミングでヒルダの背後を取っていた金次が叫び、ほとんどタイムラグなしで俺とアリアがヒルダへと発砲。

ヒルダの体から3つの血しぶきが上がったのを認識するのと、キンジがその場でぐるん！と1回転したのが同時で、ほんの一瞬遅れてヒルダの背後から銃弾が撃ち込まれたのがわかった。

……ヒステリアモードはやっぱり動けるな。

その攻撃でピタリとその動きを止めたヒルダから離れた俺は、信じられないといった顔でキンジを見たヒルダの体にある目玉模様4つが撃ち抜かれていることを確認。

「……………」

魔臓を撃ち抜かれたヒルダは、その場でルーマニア語の詩のようなものを呟きながら、その膝を折り、前のめりに倒れてうつ伏せになって沈黙。

……嫌な予感がする。

倒れたヒルダを見ながらそう思い、起きた時の顔の位置に風を配置する。

ついでに、レキにも人差し指出して示しておく。

「……理子っ……!」

そんなアリアの声が聞こえてそちらを見れば、ワトソンのところにいる理子の元へ駆け寄る。

毒は治しているので心配は要らないが、解毒をしているのを二人とも知らない。

その時にちょうど近くに落雷があり周囲に稲光が起るが、理子はその表情を驚きへと変えたのを見て、異変に気付き金次と一緒に背後へと振り返る。そこには……

「ほほほっ——」
「気分はいかが? 4世さん」

三叉槍を手持って平然と立つヒルダの姿があり、撃ち抜いたはずの魔臓を示す目玉模様の傷も治っていた。

第五十二弾 灯台もと暗し

「ほほほつ——ご気分はいかが？ 4世さん」

三叉槍を手に持つて平然と立つヒルダの姿があり、撃ち抜いたはずの魔臓を示す目玉模様の傷も治っていた。

「ああ、いいわ。4人とも、とつてもいい表情。特に——理子。無念でしようねえ。命を投げ打つてまで戦つたのに……ほら。私はご覧の通り、平気よ。ねえ、今、どんな気分？ ほほほつ、もつと悔しがりなさい。それを串刺しにするから、面白いのよねえ。私は生まれつき、見え難い場所に魔臓があるわけではなかった。その上、この忌々しい目玉模様を付けられてしまったの。だから——これはお父様にさえ秘密にしてたけど——外科手術で、変えちゃつたのよ。魔臓の位置をね。ほほほつ、おーっほつ!？」

「タアン!と後から聞こえてくる。」

理由は簡単。

俺がレキに指示したからである。

先ほど出した人差し指。

ヒルダがもう一度起きたときに撃てという意味で出した。

頭を撃たれた程度ではすぐに戻るだろうが、その隙が欲しかった。

「位置を変えたからなんだ？ 体をバラバラにすれば関係ないだろ？」

『赤霧の名の下に』

そう呟くと雰囲気が変わる。

「くっ！ ウルスの従者の分際で！」

そう言つて槍を振るってくる。

それをグロックを発砲し同時に着弾させる。

槍を弾き飛ばし、一気に距離を詰める。

「竜太流、一刀 太刀」

体を反転させて、胴体を一閃する。

「くっ！」

声を上げ、更に槍を振るってくるのをバックステップをして避け、グロックをしまい

「るうと」を抜いて、二つの剣を少しずらし、二つをくつつける。

「竜太流 二刀 星^{ほしがみ}嚙」

くつつけた剣を少しずらし、上から振り下ろす。

そこから反転し、胴体を二閃。

「るうと」を背の鞆に戻し、もう一度グロックを抜く。

ワトソンから預かった剣をヒルダに向け、グロックを引き、弓を射るような形を取り、撃つ。

その弾が燃え上がり胴体を焼いた。

風を使つて飛び、金次たちのところまで退がる。

風を集め、槍のような形を取つて顔めがけて投げる。

ヒルダの顔を吹き飛ばすところで、ヒルダが槍を掲げると槍をめぐけて雷が落ちた。その爆風を風の壁ではる。

「——生まれて3度目だわ。第3態テルツァになるのは」

その白煙の向こうから、ヒルダのそんな声がして目を凝らせば、さつきまで弱々しく纏っていた電光は、青白く、激しく変貌して、近付いただけでもやばそうな雰囲気を出していて、耐電性の下着やタイツは残っていたが、髪をまとめていたリボンは燃えてなくなり、強風に煽られた長い金髪が暴れていた。

「お父様は。パトラに呪われ——この第3態になる機会もない間に、第2態セコンディでお前達に討たれた。私は体が醜く膨れる第2態はキライだから、それを飛ばして第3態にならせて

もらったわ。それに、ここまで追い詰められるとは思わなかったわ。さあ、遊びましょ？」

目の前の悪魔は高揚した気持ちを抑えられないのか、笑いながら俺達を殺そうと口を開き、槍を足元へと突くと、それだけでコンクリートの床に稲妻が走り、蜘蛛の巣状に亀裂が入った。

「第1態モードが人、第2態が鬼なら——この第3態は、神。耐電能力と無限回復力を以て為す、竜倅公一族の奇跡。そう、稲妻とは奇跡的にも、私が受電しやすい電圧の自然現象なのよ。それはこの現象を作った神が、私を神の近親として造った証拠……。——だからもう、人間なんかいらないの！ おーっほほほほっ！ ほら、ほら、ご覧なさい！ 怖れなさい！ 涙を！ 流して！ 命乞いするのよ！」

その力を見せつけるように、第2展望台の縁にあつた鋼鉄の柱を槍で殴り、ひん曲げていく。

俺はふつと鼻で笑ってやる。

その俺を見てヒルダの顔が歪んだ。

「何がおかしいの？」

「いや、コウモリ如きが神だとか。笑いにしかならねえよ。あつはははっ！」

俺の挑発に簡単に乗ってくれたヒルダは三叉槍を振り上げてその槍の先端に青白い

稲妻を発生させ、その形を球体へと変化……雷球になっていく。

あまりにエネルギーがありすぎるからか、雷球は不安定でその形が揺らめく。

「私と長時間戦ったご褒美に見せてあげる。竜悴公家の奥伝——『ステラ雷星』。これでお前達を黒焼きにし、並べてこの串に刺し、お父様への贈り物にしてあげる。ウルスの従者、お前は塵も残さないで消すわ」

「出来るならな」

と、更に挑発しておく。

そこで理子が口を開いた。

「人生の角、角は、花で飾るのがいい……あたしのお母様の、言葉だ……」

理子がそんなことを言って近くの大きなヒマワリの花束を抱える。

「だから……ヒルダ。お前にやるよ。お別れの、花……」

「ほほッ……4世にしては殊勝な心がけね。でも慎んでお断りするわ。私、ヒマワリつてキレイなの。太陽みたいで、憎たらしいんだもの。お前も知っているでしょう？ 私は、暗い所が好きなのよ」

「くふっ……暗い所が好きなお前に、一つ、日本の諺を教えてやるよ。『灯台もと暗し』……自分のすぐ足元には、何があっても……大抵、気づかない」

互いに姿が見えない中で、理子はヒマワリの花束を不敵に笑いながら解いていく。

「これは近すぎても遠すぎてもダメだった。ベストな距離が必要だった……」

その中から出てきたのは、銃身を短くされた散弾銃ショットガン。これが理子の言うていた作戦。

「理子、お前は——天才だっ！」

それを確認したキンジが横つ飛びし、柵からダイブするのと、俺が横に転がって理子の射線から出たのは同時。

理子が飛び出して、そこで理子の散弾銃に気付いたヒルダが、ハツとした瞬間。

「くふつ。今、サイコーのアングルだよ。ヒルダ。ファイ・ブッコロス素晴らしいよ……！」

——ガウンツ!!

轟くような銃声が第2展望台に響き、放たれた銃弾は通常の銃弾とは異なつて散弾。

小さな弾子となつて空中で散開し、ビシビシビシビシッ!! ヒルダの全身を余すところなく撃ち抜いた。

「あ……ッう……ッうッ……！」

「追加！」

風の壁を分解して、風で更に貫く。

全身を撃ち抜かれたヒルダは、呻きながらその場に片膝をついたのと同時に、頭上で輝いていた雷星が槍へと戻りヒルダの体を通して足元へと流れ、それに伴って無限回

第五十三弾

その後

ヒルダとの戦いが終わった。

ヒルダは全身大火傷の大怪我。

理子は毒を解除したので大丈夫だったが、金次とアリアは知らなかったため大慌てしていた。

それを見て、俺と理子が笑っていたのは別の話。

念のために、理子も病院へと運ばれて治療を受けている。

アリアと金次はヒルダのところへ、俺とレキは理子のところでじっとしている。

時間が経ち、アリアと金次と、ワトソンが入ってくる。

そのワトソンだが、そこまで時間的余裕もなかったのか、予想通りヒルダの話を切り出した。

「まず宣言しておくが、ボクは武偵であり医者だ。敵でも、戦いが終わればノーサイド。過剰攻撃オーバーアタックはしない。いかなる人格、国籍、人種であっても関係ない。治す。だからさつき、ヒルダの体から散弾銃の弾を——107発、全て摘出した。魔臓機能が不全なのにもかかわらず、彼女は驚異的な生命力で手術を乗り切ったよ。身動き

も取れず、意識も無く、人工呼吸器を必要としながらも……彼女の命は、生きようと願っている。ちなみに魔臓なるものを縫合したのは初めてだったので、ボクも完璧には手技が出来ず……その組織を若干、切除せざるを得なかった。だがボクは、転んでもただでは起きない。それを材料に、魔臓の働きを止める薬品——バンパイア・ジャマーの開発を約束しよう」

割り込んだ割には長々と話すワトソン。

アリアと金次もここで初めて聞かされたことなのか黙っているが、回りくどい話に誰かツツコめと目で牽制し合っていた。

「だが……日の出の頃から、彼女の容態は悪化している。主な原因は血液不足だ。ボクはここに着くと同時に、ヒルダの血液型を調べた。結果は、B型のクラシーズ・リバー型。人間では170万人に1人しかいない、珍しいものだったよ。その血を保存しているのは世界中でシンガポールの血液センターだけで、取り寄せるのに2日はかかる。そして……ヒルダは、この昼を越せないだろう」

そうして話してからワトソンは、チラリと理子に視線を向けたので、わざわざこの場所に来て話をしに来たのか、その意図を理解する。

「それ、理子の血液型と同じだよ。自分達と同じ血液型って事もあったから、ブラドは理子を手放したからなかったんだ」

ワトソンにチラ見されてしばらく黙っていた理子は、言うかどうか迷ったのだろうが、結局それを話してしまう。

ブラドは血液型が同じということがあつて優秀な遺伝子を持つ人間の中で、理子にこだわっていたのだ。

自分達にもしもの事があつた時に血液として利用するため。

それを知っていたワトソンが、理子の意思を尊重したいがために自分から言うのを促したようだが、ヒルダを助けたいという言葉は嘘じゃない。

「理子、キミの献血を強制はしない。『戦役』に参加して敗北した者は、死ぬか……敵の配下になるのが暗黙のルールだが、ヒルダはそれに従わないかもしれないからね。ちなみにヒルダは一時期、イ・ウーに留学していた。交渉次第では、神崎かなえさんの裁判に出廷させる事もできるだろう」

しかし、理子に強制しないと意いつつ、言葉の中に助けた恩は返せと主張する部分があつてズルいと思つた。

「——いいよ。採ればっ」

そんなことを話していたら、理子もツンツンしながら恩返しじゃないからなと念を押しながらに献血を受け入れる。

素直な優しさを見せないのは実に理子らしい。

理子の合意を得たことで、ワトソンは献血のための機器を運びに一旦退室。俺はヒルダの傷を治すためにワトソンと交渉し、集中治療室に向かう。そこにいた人たちに事情を説明し、治してから寮に帰った。

第五十四弾 文化祭

ヒルダとの戦いから数日経って、10月30日。

文化祭の日がやってきた。

朝は梓がちゃんと登校して、着替えの時に私に入れ替わった。

私は午後からのシフトなので、店を回っている。

梓がせっかくなされた2日間なのでルンルン気分楽しく文化祭を楽しむ。

時折、人々の視線が刺さるのが嫌なところではあるけど。

やっぱり高校の文化祭というものは凄いもので、たこ焼きとかりんご飴とかアメリカンドッグやホットドッグなど、様々なものが点在していて、更には私たちのところのよな店をやっている。

中学生の時はあまり私では外に出なかつたのでこういうのは新鮮なのである。

さて、そんな楽しいひと時も終わり、店に戻った。

私は厨房もホールも担当していて、作っては出し、作っては出しを繰り返している。

文化祭というのがしんどい、ということが初めて分かった。

梓とは記憶しか共有が出来ないので疲れというものは分らなかつた。そして、梓と呼ばれるのが難点である。

最初の方はとても困つた。

風切と呼んでくれたら楽なのに。

男子は、梓が女装した、としか認識していないからだろう。

「亜里沙！ちよつと来てくれ！」

そんなところで金次に呼ばれた。

同じ厨房の生徒に声をかけてから金次のところへ行く。

「どうしたの？」

「いや、玉藻が呼べって言ったからな。すまんが少し相手をしてやってくれ」

「これ遠山の！わしを子供みたい扱いはしないでない！」

そう隣にいた小さな子が声をあげる。

賽銭箱と書かれた箱を背負つて。

「分かつたよ」

「じゃあ頼んだ」

走り去っていく金次に手を振つておく。

金次が見えなくなつてから、押し付けられたと分かつた。

私はため息をつき、玉藻の方を向く。

「それで、何か用かな？」

「うむ。風切の、取り敢えず梓とやら変わってくれんか？遠山のが入れ替われるというておったのでな」

そう聞いて内心で舌打ちする。

人の個人情報勝手に流失してくれちゃって。

「ごめんね。今は変わらないの。こんな公衆の面前で私と梓が同一人物ということをバラしたくない。話があるなら私が聞くよ。私と梓の記憶は同じだから」

「分かった。風切の。ようヒルダを倒してくれたの。大儀であつた」

「ありがとう。でも梓は何もやっていないよ？」

「いや、リュパン4世の毒を消しておったじやろ。そのおかげで戦力を減らさずに済んだのでな」

「そっか」

「うむ。用はそれだけゆえ、遠山のを連れて来てくれ」

「分かった。行こっか」

そう言つて玉藻の手を握る。

見た目は迷子の子を連れて行っているお姉さんみたいな感じになっている。

と言うわけで自分の教室に戻って、わざと金次の名前を大声で叫んで呼ぶ。

玉藻を引き渡すと、恨めしそうにこちらを見てくるが、とびつきりの笑顔を向けて手を振ってあげる。

そして、玉藻に無理やり連れていかれた。

……頑張れ。

それからは普通に過ぎて行った。

ジャンヌの店に行ってからかかったりもして、有意義な時間だった。

第五十五弾 武偵鍋

2日間の文化祭も終わり、午後の7時。体育館へと赴き、そこで行われる武偵高の悪習『武偵鍋』のためにチーム毎で1つの鍋を囲むことになった。

この武偵鍋はチームで食材を持ち寄るが、その食材に必ず『アタリ』と『ハズレ』を用意しないとイケない。

要は闇鍋みたいな感覚である。

亜里沙はここで退場。

『変装食堂』リストランテ・マスケが終わったので、

いつまでも亜里沙でいるわけにはいかない。

流石にこの不味い鍋を亜里沙に食べさせるわけにはいかないので、ここは変わってもらおう。

金次と白雪、俺が当たり担当。

アリアとレキ、理子がハズレ担当だ。

(……大丈夫だろうか。あいつらが担当で)

恐らく金次も思ってると思う。

鍋という日本文化に疎そうなアリアに、そもそも、俺がいなければ文化的な生活をしていないレキ。

そして、どう考えても巫山戯そうな理子。

っていうか、もう既に巫山戯ている理子はネタなのかシユールストレミングスの缶詰めとか持つて来ていた。

……やばい、死人が出そう。

重い足取りで入った体育館では既に始まっていた。

各チームが武偵鍋が始まっており、生徒たちの周辺で何人も泡を吹いていて倒れている。

それを救急箱を持った衛生科メデイカの生徒が見て回っている。

「キーくん、こつちこつちー！」

ピクニックシートに座っていた理子が。満面の笑みで金次を呼んでいる。

他にアリアがあぐらをかき、レキも体育座りしており、ハイマキもお座り中。

そして1人だけ綺麗に正座をしている幹事の白雪が、カセットコンロの火を調節していた。

その横から、理子が鷹の爪をわんさか入れていた。

「おいーお、お前……！何入れたんだよーこれじゃあ火鍋になるだろー！」

「えーだって理子、辛いのが好きなんでもーん。たーかーのー、つめー」

……だそうだ。

そして、金次がリーダーとして指示をしてグロックの安全装置セイフテイを外す。

しかし、次は甘くすると行ってパルスイートをたんまりと入れた。

パルスイートと言うのは砂糖を4倍濃いくした人工甘味料だ。

と言うわけで地獄の武偵鍋スタート。

実際、出来ているかどうかすら分からない。

……なんか紫色の湯気が上がっているし。

でも、最低でも1人1人すくいずつ闇鍋段階だ食べなければならぬ規則なので、アリアたちもジャンケンによって次々と鍋に特攻をかけていく。

最初の犠牲者は金次。

リーダーだからと言う理由である。

掴んだのは、恐らく桃まん。

なんかゾンビ化している。

その上には何やら溶けたものがあつた。

……カロリーメイトか。

次はアリア。

何やら黒いツブツブをいっぱい引き当てた。

……あれはブルーベリーか。

その次は白雪。

祈りながら引くと、普段の行いが良いからか煮卵を引き当てた。

その次は理子。

その理子が引き当てたのは、白滝……が、飽和して結晶化したパルスイートを吸着して輝いている。

次はレキ。

無表情でおたまをひよいと引くと、赤唐辛子の群れを掬い上げた。

その唐辛子をパクパクと簡単に食べていく。

……やっぱりすごい。

次は俺。

レキみたいに無表情で引くと、

「……………」

なんかすごいものを引き当てた。

……なんだこれ？

「「「「「……………」」」」」

全員無表情で見ている。

俺は意を決して口の中に入れると、

「……………うえ」

全部が総合されたような味がした。

カロリーメイトのチーズ味、桃まん、パルスイート、赤唐辛子。

それをミックスしていたので、すぐさま風を口の中に起こして、粉々に分解する。

そして、レキが差し出してくれたお茶を貰って一気に飲み込んだ。

「……………マズっ！」

俺がそう言うと、全員が手を合わせていた。

その鍋はハイマキスタツフが美味しくいただくことになった。

……………死ぬなよ。

悪しき伝統も終わり、ここからは普通の鍋になった。

俺はさっきの鍋の影響を受けて、食べ物レキが喉を通らなかつた。

後は、レキが文化祭のポスターのことを聞いた。

なんでも、ポスターの応募が足りなかったから、美術を選択している生徒全員の絵を使つて、一位だったらしい。

……なかなか凄い才能だな。

こうして文化祭の夜が過ぎて行つた。

VS ジーソードと過去との因縁

第五十六弾 ジーフォース

10月31日。

文化祭の片付けは一年の仕事なので、寮でのんびりしていた。

そして、夕方にレキのご飯を作ろうとレキの部屋に行く。

鍵が閉まっていたので貰った合鍵を使い中に入るが、

「あれ？おかしいな」

普段は自分からは外にあまり出ないので、ここに居なかつたことに違和感を覚える。

レキの携帯にかけても出ない。アリアにかけても出ない。

理子にも白雪にもかけるが一向に繋がらなかった。

「……………」

何か事件に巻き込まれているかもしれない。

そう思った俺は風を使い、適当に調べてみる。

だんだん範囲を広げて行くと、一つ、何かにぶつかった。

俺はその場所に風を使って飛んで行くと、ハイマキがいた。

しかし、ひどく負傷していて、銀色の毛が血まみれだった。俺はすぐさまハイマキの元へ飛んで行く。

その場所にはレキも白雪も理子もいて、傷だらけでレキも、白雪や理子も倒れている。俺はすぐさまレキのところへ駆け寄った。

「レキー」

「梓、さん」

「待ってる、今治す」

そうやって力を使う。

レキの体を淡い光が包み、傷が消えていった。

「梓さん、アリアさんを」

レキの視線の先を見ると、まだアリアが戦っていた。

俺は頷き、そっとレキを下ろす。

そして、背中から「るうと」を抜き走り出す。

もう片方の手でベレッタを持ち、フルオートにして、円を描くように撃つ。

アリアの周りには風を配置しているので大丈夫だ。

アリアと戦っていたやつは、アリアの小太刀を振り払って飛び下がる。

アリアは小太刀を杖にして、ギリギリ意識を保っていた。

「あ、梓？」

「おう！アリア、大丈夫か？」

俺はアリアに話しかけながらマガジンを入れ替える。

「大丈夫、じゃないわよ。あいつ、私たちをいきなり襲ってきたのよ。そこで最初に理子が倒されて、瞬く間に白雪、レキと倒していったわ。かなり強いわよ、あいつ。梓が来なければやられてたかも」

「ほう？Sランクのアリアがそう言うか。分かった。俺がやるからアリアはレキと協力して、下がってるか、この場から引いてくれ。後これを」

そう言っただけ弾を取り出して力を込める。

淡い光が包み、だんだんと白くなっていく。

完全に白くなったところでアリアに渡す。

「これは？」

『白銀の弾丸』
ブラチナフレッド

の力を込めた弾だ。一定期間だけ、傷を癒すことが出来ると思う」

「ありがとう」

そう言っただけで歩いていくアリアから目を離し、先ほどのやつを目に写す。

「さて、わざわざ俺や金次を狙わないのはなんで？ジーサードの部下さんよ」

「お兄ちゃんの女が誰か分からなかったから、全部やった。それだけだ」

「お兄ちゃんつてのは、金次のことか」

「そうだよ。私はジーフォース。金次お兄ちゃんの妹だよ」

「そうか……。女として生まれてきてしまったか……。だから出来損ないなのか」

「……なんだと？」

「当たり前だろ。ヒステリア・サヴァン・シンドロームは男が女を守るために強くなる。

なら女の場合は？」

普通に考えれば男に女は守られるために弱くなる。まあ、遺伝子的には確かに金次の妹かもしれないがな」

「……………」

「お前があいつの遺伝子的な妹だろうと、あいつらを傷つけた報いは受けてもらう」
『赤霧の名の下に』

そう言うのと雰囲気が変わる。

風を使い、一気に間合いを詰める。

「……………っ！」

スピードに驚いたのか少し反応が遅れていた。

俺は横殴りに「るうと」を振るう。

ジーフォースは剣で受け止めていた。

すぐさま俺はバックスステップを踏んで、フルオートの本レツタをさつきと同じように
円を描くように撃つ。

弾に弾が当たり方向を変える。

その弾に惑わされているところに、弓を射るように剣を前に出して撃つ。

その弾が燃え上がり、ジーフォースに迫って行って、

爆発した。

「がはっ！」

ジーフォースは吹き飛んで壁に激突した。

俺は「るうと」をしまい、本レツタのマガジンを入れ替えて、ジーフォースに突きつ

ける。

「終いだな」

「くっ！」

悔しげにこちらを見てくる。

俺は引き金を引こうとしたその時。

「我流 一刀 太刀」

そう声かして振り向いた瞬間に斬られた。

「ぐわあ！」

俺は風を使い、力を振り絞ってその場を離れる。

「ゴホッ！ゴホッ！」

「大丈夫かい、ジーフォース」

「あ、ありがとう」

「なっ……!?!」

聞き覚えのある声だった。

でも、この世界、転生してからは聞いたことが無い声。

その男がこちらを向いて顔を表す。

「やあ、久しぶりだね。碧」

「お、お前は!?!」

その男は、前世で見た顔。

俺の親友だった、東海林竜太しやうじりゆうただった。

「一刀流 燦々」

そして、竜太の三連撃を受けて、意識を失った。

第五十七弾 赤井霧青

『僕は、もう、駄目だ……』

血を流しながら弱々しく呟く親友。

『何言ってるんだよ！もう喋るな！大丈夫だから！』

『ありがと、ね。亜紀斗。いつも、助けて、くれて』

『だからもう喋るな！』

『僕は、ここで、死んじゃうかも、しれないけど、亜紀斗は、生きて、幸せにならなきゃ、

駄目だよ？』

『ああ！なる、なるからあ！』

『それじゃ亜紀斗、僕の、分まで、幸せに……なっ……て……』

「竜太ああああ!!」

そこで目が覚める。

嫌な汗が顔を滴る。

それを拭うために手を上げるが上がらない。

「大丈夫ですか。梓さん」

ふと俺の額に手が伸びる。

その手を見るとレキの手であった。

「あ、ああ。大丈夫っ！いつっつ！」

痛みで腹を抑える。

そこで、レキが一つの弾丸を取り出して差し出してくる。

すると、少しだけ痛みが癒える。

その弾丸は俺がアリアに渡した『ブラチナブレッド白銀の弾丸』だった。

白く光った弾丸が徐々に色を失っていき普通の色に戻った。

「大丈夫ですか？」

「ああ、ありがとう。レキ。あれから何日たった？」

「2日です」

「そうか」

そのまま天井を見上げる。

そんな寝ていたのか。

「梓さん」

「ん？」

見上げていると、レキから声がかかった。

「竜太とは誰ですか。先ほど叫んでいましたが」

「……………聞いていたのか」

「はい」

「……………竜太は俺の親友だったやつの名前だ」

「だった？」

「ああ。あいつは俺の生前の親友だ。風切ではなく、赤霧としてのな」

「その人に何があつたのですか？」

「なんだ？今日はどんどん聞いてくるな」

「はい。その人の名前を呼びながら斃されてしまったから」

「……………そうか」

「……………ここで思考に入る。」

竜太のことを、俺の過去を、俺の死因を話すべきか否か。散々考えて考えて…………。覚悟を決めた。

「レキ、全員呼んでくれ」

「？全員とは？」

「バスタービル全員だ。ヒルダと多分いるだろうジーフォースは入れるな」

「分かりました」

そう言うのとレキが携帯を取り出して電話をかけていく。

……久しぶりだな。記憶を遡るのは……。

生まれ変わってから、何度も何度も繰り返し返すことがあった。

その記憶が浮かび上がるたびに飛び起きていた。

母親に心配されていたなあ……。

数十分後、バスカービル全員が集まった。

何故かジャンヌとワトソンがいたが、まあいいだろう。

「さて、全員集まったな」

「それで？何の用だ？梓」

「2日前にアリアたちが襲撃されたのは知ってるな？」

「ああ、と言うかその本人のかなめが俺の寮にいるぞ」

「その、かなめ？ともう1人いたのは知ってるか？」

「知らないが？」

「アリアたちは？」

「……居たような気がするわね」

「そいつは俺の親友だった奴だ。名前は東海林竜太」

「そいつがどうした？」

「だった、と言ったのは生前の親友だったからだ」

「生前の？」

「ああ、風切ではなく、赤霧の親友だ。その竜太のことをレキが聞きたいって言ってな。せつかくだから全員に言っておこうと思ってるな」

「何を？」

「竜太のこと。」

「そして、俺の過去と死因だ」

「[[[[!!]]]]」

俺がそう言うのと全員の表情が強張った。

「どこから話そうか……。そうだ、自己紹介からやるか。」

俺の名前は赤霧碧。元の名前は赤井霧青あかいきりと。聞いたことはあるだろ？多くの奴隷を解放した奴の名前を。それが赤霧碧の本名だ」

第五十八弾 時

時は戻って何百年。

俺たちは走り出す。

後ろから大きな男たちの声を聞きながら走っていく。

「Go!Go!走れ!」

「行くぞ!竜太、創気、新太!」

「了解!」

そう指示して、デザートイーグルとサバイバルナイフを取り出す。

「竜太は俺と一緒にで前線。創気、新太は後衛でサポート。時と場合は見極めろ」

「了解!」

デザートイーグルで飛んできた弾を跳ね返し、迫ってきた敵のナイフを避け、首元にサバイバルナイフを刺す。

もう一人来ていたのでナイフを奪ってそのもう一人の頭に投げる。刺さったのを確認して敵を見てみると、

「スナイパー!」

そう声が聞こえて竜太のことを呼ぶ。

「竜太！」

「了解！」

少しだけ前線を任せ、背負って居たヘカートIを下ろし構える。弾が飛んできた位置を計算してスコープで追い引き金を引く。敵の沈黙を確認しながら、ボルトを引いて薬莖を排出しボルトを戻す。

「碧！」

「おう！」

ヘカートIを背負い直し、サバイバルナイフをしまつてトカレフを抜く。

そして、石を拾って空に投げて、それをデザートイーグルで狙い、

「血の雨」
レッドレイン

撃つ。

弾が当たり石が砕けて相手の上に落ちて行き、身体を貫いて行く。目測だが数十人は死んだだろう。

敵が撤退して行くのを見え、デザートイーグルとトカレフをしまう。

「お疲れ、亜紀斗」

「おう。竜太もな」

そう言つて竜太とハイタッチをする。

そして、すぐさま創気と新太を呼んで軍に帰つて行つた。

攫われたからどれくらい経つただろうか……。

攫われる前には呑気に遊んでいた。

海辺にいるときに急に襲われて、無理矢理船に乗せられた。

そこには、たくさんの子供たち。

みんながみんな泣き叫び、お父さん、お母さんと泣くばかり。

俺はこの光景を見て泣くことを忘れた。

全員、年端もいかない子供ばかりであり。

多分この中で一番俺の年が高いだろう。

「ねえ」

「ん？」

声をかけられる。

その方を見ると、俺と同じくらいの歳の男だった。

「初めまして、だね。僕以外で泣いてない人を見たのは初めてだよ」

「ああ、泣いたところで何かが変わるわけじゃないからな」

「……随分と達観してるんだね」

「それが歳の差だ」

「あ、自己紹介がまだだったね。僕の名前は東海林竜太。君は？」

「俺の名は赤井霧青。あ、でも攫われたところで本名は嫌だから、そうだな……。赤霧碧とでも呼んでくれ。ま、当て字だけだな」

「きりと、だね。赤井を略して赤、霧青の霧を苗字にして、赤霧。青を読み替えて碧か。いい名前だね。……そうだ、理伊那亜紀斗りいなあきとつてのは如何かな？並べ替えたただけけど」

「それじゃ、竜太はそう呼んでくれ。でも、人前では碧でな」

「わかった」

こうして、俺と竜太は出会ったのである。

第五十九弾 殺す為の力

それからは、使われるだけだった。

赤井霧青の名前を隠して赤霧碧と名乗ったのは正解だった。

無理矢理戦闘訓練を受けさせられて、出来が悪ければしばかれる。

与えられるご飯はその辺に生えていたであろう草である。

睡眠時間もない。

こんな中で、武器の選定が行われた。

俺は自分で言うのもなんだが、何でも出来るオールラウンダーだったので、ハンドガン二丁とサバイバルナイフ。そして、狙撃銃のヘカートIだった。

最初はアサルトライフルを持たされていたが、狙いが定まらずにハンドガンを選んだ。

竜太は、ハンドガン、アサルトライフルともにあまり上手くはなく、西洋の剣で落ち着いた。

日本刀とは違い、両刃だからである。

そこから、半年？ぐらい過ぎた頃、俺たち奴隷集団は数百人まで減っていた。その中

には当然女子供やのちに攫われた女性もいた。

最近は何うことも増えてその結果として、寝る時間が増えた。

戦争をしている中で寝ていないから頭が働かない、そう言うことを消すためである。

みんなが寝静まっている中でも俺は深くは眠らずにいた。

そんな中、隣で短い悲鳴が聞こえた。

大人たちが数人で多分女の子を連れて行っているのだろう。

俺はそいつらが出て行ったあと、素早く付いていく。

そこでは女の人が裸にされて、男たちが襲っているように見えた。

俺はギリツ！と口を思いつきり噛む。

そして、さつき連れて行かれた、飛鳥、瑠衣、舞香、シスタ、ライトがいて、そいつ

らも襲われていた。

「きゃーや、やめてえー！」

「ぐはははっ！ 女子供を連れてくるのは楽だからな。俺たちの性欲の掃き溜めだな！」

「ははは！ 孕ませてやるぜえ！」

そこで、飛鳥がこちらを向いて、手を伸ばした。

助けてと言っているように……。

そこで俺は駆け出した。

女に気をとられているところに俺は走って行って男の顎を蹴り上げて首にナイフを押し当てる。

そして、出来るだけ低い声で言う。

「……やめろ」

「なっ！ テメエ！ 赤霧！」

「ここにいる全員を解放しろ。さもなければお前を殺す」

高鳴る心臓を無視して提案する。

「はっ！ ここで俺を殺しても、こいつらはお前を殺して同じことをするだけだぞ！」

「だからこそ、ここにいる全員に提案する」

「あ？ 何を」

「俺と決戦をしてもらおう。俺に勝てば俺を殺して続ければいい」

「……」

「俺が勝てばこれからは襲うのを禁止。それと、女たちの戦争の参加を無し。どうせなら解放して欲しいが、どうせしないからそれはいいい」

「……それは飲めん」

「戦力が減るからだろ？ 俺がこいつらの分まで働く。最前線で戦う。それなら如何だ？」

「ここ、こいつ！ 奴隷の分際で！」

「まあ、待て」

俺がナイフを押し当てていた奴が周りを抑える。

「いいだろう、受けてやる。ただし、こいつらで戦うぞ。ここにいる全員を含めてな。俺は審判だ」

「ああ。いい。だが、そんな大人がこぞつて参加するんだ。俺はナイフを使うぞ。いいな？」

「ああ、いいとも」

そう言つて俺は解放する。

それに従つて大人たちも女の人たちを解放する。

そんな時に飛鳥が小声で声をかけてきた。

「ちよ、ちよつと。霧青！」

「大丈夫か？」

「あんたこそ大丈夫なの？ もし負けたら……」

「でも、首の皮一枚繋がつたら？ せめて足掻かないとな」

「で、でも「大丈夫だ」……」

「俺が勝てば女の人たち全員が戦わなくていいんだ。信じて待つてろ」

「霧青……」

俺は全員に笑顔を見せてから前を向く。

相手は腐つても精鋭軍人たち。

勝敗は明らか。

でも、俺は守るために戦わなくてはいけない。

あいつらを泣かせないために。

震える手を無理矢理止めて、戦うために、守るために使う。

俺が攫われてここへきて、戦わされて。

自己防衛反応のために名前まで偽って。

だからこそ、今まで頑張ったこれを使おう。

戦うための力を。

「準備はいいか？赤霧」

「ああ」

『赤霧の名の下に』

力を持って力を示せ

守るべきものの為に

力を用いて敵を穿て』

そう呟く。

そう呟くだけで霧囲気が変わる。

俺が考えた殺す為の力。

心を殺して無理矢理殺人衝動を起こす。

一言で心を最後まで言つて殺人衝動を。

二言目は考えてない。

霧囲気が変わつたことに驚いている男たちに飛び蹴りをするが、腕をクロスにして受け止められる。

俺はそのまま空中で回つて腕を切る。

そしてもう一度地面を蹴つて顔を蹴り飛ばす。

「なっ……いっ……」

男たちが1人やられたのを見て、本気で殴りかかってくる。

この力の差で受け止めれば腕が折れるかもしれないので手を払い、避け、下がる。

そして思いっきり踏み込んで足元をスライディングして膝を叩く。

膝カツクンみたいな形になり、こけかけたところにナイフを刺して勢いのままに投げ

飛ばす。

投げ飛ばしたところに殴りかかってくる、思わず腕を使って受けてしまい、腕が折れ

た。

「ぐっ！あああ！」

折れた腕を無視して突っ込み、そこに殴りかかってきたので体を回転して避けて横長にナイフを振るう。

そしてその傷口を蹴り飛ばす。

最後の1人になったときに、ナイフを投げて膝に刺し、顎を膝で蹴り上げてそのまま空中で一回転して顔にかかと落としを決めた。

「はあ、はあ、はあ、俺の、勝ちだ」

「ちっ、分かったよ。女たちに手出しはしねえ、だが、お前は前線で戦ってもらうぞ。腕が折れていてもな。約束は守ってやる。生意気だが、こいつらに勝ったお前にな」

「ありがとう」

男は倒れた奴らを抱えてその場を離れて行った。

俺はその場に倒れかける。

そこで、飛鳥が支えに来た。

「霧青！」

「お、おう。これで、多少は、安心だな」

「で、でもあんたが……」

そう言つて涙を零す飛鳥の頭を撫でる。

「お前が無事ならそれでいい」

「……っ！」

俺がそう言つと、飛鳥が抱きついてきて、泣いていた。

第六十弾 親友の死

そうして、五十八弾の冒頭に戻る。

帰った俺たちは急いで武器の手入れを全員分行う。

女の人たちは大人たちの飯の準備と俺たちのサポート。

大人の奴は適当に。パットとやって、デザートイーグルやトカレフを丁寧にする。サバ
イバルナイフも小さな砥石を使って研ぐ。ヘカートの手入れもしてマガジンを入れ替
える。

そして、料理……は、俺らには無いのでパットと食べて就寝する。

他の人が寝静まった後、俺はこっそり外へ出た。

俺は日課、と言つてはダメなんだろうけど、その日死んで行った仲間たちのことを弔
う為に外に出ている。

大人たちは論外。

死んでしまった人数分、石を積み上げて水をかける。

そして、俺は宗教とか興味ないけど、十字を切って手を合わせる。

「海斗、琢磨、龍樹。今までありがとうな。そして、ごめん。守り……切れなかった。う、うう……」

そう呟きながら涙を流す。

いつもこうだ。

どれだけ倒しても、仲間たちが死んでしまう。

それを見て涙を流す。

これも日課だ。

誰もいないところで泣くのが一番手っ取り早く明日に向かえる。

しかし、いつも痛い、痛いと呼ぶ声。

痛みで苦しいと言う声。

それが頭から離れなくなる。

心を殺して無理矢理殺人衝動を起こす俺はもう半分死んでいるのかもしれない。

泣き終えたところで涙を拭う。

「亜紀斗」

そこで声が聞こえる。

振り向くと竜太が立っていた。

「どうした？眠れないのか？」

「いや、こんな時間に出て行くからどうしたのかわらなくて。」

「……それ、あの子たちのお墓？」

「ああ。少しの弔いもしてやらないとな。報われないだろ」

「そうだっ！ね……」

いきなり竜太が倒れた。

「……は？」

後からタアーンと音が聞こえる。

俺はすぐさま竜太のところに駆け寄る。

「竜太あ！」

駆け寄って傷を確認する。

傷は心臓から少しずれていた。

俺は思いっきり息を吸い込んで叫ぶ。

「襲撃！襲撃！敵は数十名と仮定！即刻対処せよ！繰り返す！……」

一、三回繰り返して竜太を下ろす。

「すまん！竜太！すぐに終わらせるから！」

寝床に向かってヘカートだけを取ってくる。

『赤霧の名の下に

力を持って力を示せ

守るべきものの為に

力を用いて敵を穿て』

そう言うだけで雰囲気が変わる。

スコープを覗いて敵の位置を確認する。

そして、石を拾って空中に投げ、ヘカートで撃ち抜く。

「レッドレイン
血の雨」

石が砕け、相手に降り注ぐ。

ボルトを引いて葉莢を排出。

装填してボルトを戻す。

足を引き、銃を逆手に持つ。

「レッドライン
血の線」

片手を離し敵に向けて回しながら引き金を引く。

敵を貫通して倒れて行く。

「敵の沈黙を確認」

相手の状況を見てヘカートを下ろす。

そして急いで竜太のところに駆け寄る。

「竜太！」

「亜紀斗、僕は、もう、駄目だ」

血を流しながら弱々しく呟く親友。

「何言ってるんだよ！もう喋るな！大丈夫だから！」

「ありがと、ね。亜紀斗。いつも、助けて、くれて」

「だからもう喋るな！」

「僕は、ここで、死んじゃうかも、しれないけど、亜紀斗は、生きて、幸せにならなきや、

駄目だよ？」

「ああ！なる、なるからあ！」

「それじゃ亜紀斗、僕の、分まで、幸せに……なつ……て……」

「竜太ああああ!!」

親友が死んだ……。

第六十一弾 赤霧の死

親友が死んだ。

その事にとてもじやないほど喪失感を味わった。

攫われたからずっと一緒にいた親友。

亡骸をずっと抱きしめていたところに大人がきた。

「赤霧。状況は？」

「……敵は全て倒しました。こちらは、……東海林竜太が死亡しました……」

「そうか」

そう返事を返し離れて行く。

その時、聞こえた。

この言葉が。

「所詮は奴隷か」

その時、思考が停止した。

……こいつはなんて言った？

俺の親友に。

所詮、だと？

ふざけるな。

勝手に攫ったのはどっちだ。

そのくせに所詮だと？

……もういい。

「全員、殺す」

俺はそう呟いて、ナイフを抜く。

そして、そつと近づき首を切る。

「……かっ!?……てめっ!」

そして、後ろから蹴り飛ばして捨てる。

血の付いたナイフを振り払って血を落とす。

俺はあることをしたあと基地に戻って、ヘカートの銃弾を装填する。

マガジンを過剰に持って、竜太の剣を取る。

飛鳥たちが起き上がってくるのを見ながら剣を背負う。

ひとつ、瞑想をする。

竜太が死んだ時の気持ちを変えよう。

殺意が頂点に達した瞬間に目を開ける。

さあ、人生最大の殺し合いを始めよう。

俺は飛鳥たち、全員に武装をさせて集まらせる。

「どうしたの？霧青？」

「ああ、これから作戦を伝える」

「作戦？」

「そうだ。奴隷から解放されるための作戦をな。相太、新太、創気、智史、健吾、優馬、幸平、浩志、太一、修平、賢治、一馬、光輝、俊樹、アンドリユー、ジェイソン、アレックス、飛鳥、朝雪、楓、瑞樹、エイラ、ライト、レベツカ、エリザ、セレナ、リリイ。やっぱり作戦は後で言う。その時の異論は認めない。分かったな」

男子から順に言っ行って行き、女子で終わる。

総勢27名。

全員が頷いたのを確認して外に出る。

戦闘艦に背を向けるようにして、大人たちを待つ。

飛鳥たちは俺の後ろに並んでいる。

そして、ぞろぞろと大人たちが出てきた。

俺が一番先頭に立って出てきた奴にデザートイーグルの照準を合わせる。

大人たちは俺の行動に隠せなかったようだ。

「……何のつもりだ？」

「見て分からないか？ お前らに銃口を向けている」

「だから何のつもりだと聞いている」

「元々、無理矢理戦わされていたんだ。俺たち奴隷は元の国へ帰る。その為に俺が殿となってお前らに反抗しているんだ」

「そんな事をしてただで済むと思っているのか？」

「思っちゃいないさ。だから少しでも抗う為に銃口を向けている。そして、竜太の仇は俺が討つ」

俺は飛鳥たちの方を向いて銃を掲げて叫ぶ。

「奴隸たちに最後の作戦を伝える！飛鳥、相太の指示に従いここより戦線を離脱！戦闘艦に乗って日本に帰れ！異論は認めん！さあ、行け！」

俺はそう言い放つ。

すると、飛鳥が少し近づいてくる。

「き、霧青は？」

「こいつらを全員殺したら自力で帰るさ」

「そんな、無茶だよ！」

「だが、やらなければならぬ。竜太の為に。お前たちの為に」

「……意見を变える気はないんだね」

「ああ」

「……」

飛鳥が無言で近づいてくる。

俺はそれをじっと見ている。

そして、俺に抱きついて来たかと思つたら、俺の唇に飛鳥の唇が重なつた。

沈黙の後、ゆっくりと飛鳥が離れて行く。

「……生きて。生きて私たちのところへ帰ってきてね」

「ああ。善処する」

飛鳥はニツコリと笑って全員を率いて走って行く。

俺はそれを見送って、大人たちの方を向く。

「やけにすんなり倒してくれたな」

「ああ、どうせあいつらは死ぬ運命だ」

「何？」

そう言つて胸元から何かのスイッチを出してくる。

「これはあの戦闘艦に設置してある爆弾のスイッチだ」

「爆弾だと？」

「ああ。逃走するならあの船だからな。あらかじめ設置して置いた」

そして、止める間もなくスイッチが押された。

しかし、爆発はしない。

「な、何故だ！何故爆発しない!？」

「当たり前だろ」

俺はデザートイーグルでスイッチを破壊して、淡々と言う。

「あの船に爆弾があるのは知っていた。だから全て昨日のうちに外しておいた」

「ば、馬鹿な!?! 30個はあつたはずだぞ!?!」

「全てと言つた。さあ、殺戮を始めるか」

『赤霧の名の下に』

力を持って力を示せ

守るべきものの為に

力を用いて敵を穿て』

そう言うのと雰囲気が変わる。

サバイバルナイフとトカレフも抜き、思いつきり息を吐き出す。

限界まで吐いて、思いつきり息を吸い込んで、叫ぶ。

「ああああああああ!!!」

数は1対恐らく3000。

そこからは酷い争いだった。

俺も何千人か殺した。

グレネードを投げて、それを撃つ『レッドレイ血の雨』を使ったり、相手が撃った銃弾を撃ち、跳

ね返す。

ナイフを持って接近戦を挑んでくる奴は首元を切り、盾に使う。

スナイパーは爆弾で目くらましした後に寝転がりヘカートで撃ち抜く。その時に

シャーロックに撃たれたであろう痛みが浮かんた。

その痛みを堪え、戦うが、視界が無いのは痛く、レッドミスト血の霧を使っても当たってるかどうかどう

かも分からない。

そして、右脚の感覚がなくなり、左腕、右腕も使えなくなる。
最終的にナイフを口に咥えて戦い、

心臓を撃たれて死んだ。

第六十二弾 果たし状

過去の話をし終えてしばらく全員無言だった。

……まあ、人の人生をいきなり語られたらそうなるか。

「と、これが竜太のことと、俺の死因。そしてついでに飛鳥たち奴隷解放の真実だ」

『……………』

未だに無言。

……どうしたものか。

「……………あんたつて昔から常識破りなのね」

「どう言う意味だ、こら」

アリアがさらつと罵倒してくる。

……ここにいる全員常識破りばっかりだろうが。

「さて。こうして俺の過去を語ったわけだが、何故このタイミング？つて言うのは分からん。ただ今回は前世の友人竜太が出てきたことで、それを説明するために過去を語つたにすぎない。これからお前ら金次たちはジーソードと戦うことになるだろう。あいつは金次の兄弟みたいなものだからな」

「……どう言うことだ？」

「……まだ気づいてなかったのか？ ジーサードの意味に」

「意味？」

「ジーサードとは金叉の3番目と言うことで、遺伝子状はお前の弟にあたる。ジーフォースも同様にな」

「……………」

開いた口が閉まらない。

みたいな感じで呆気にとられている金次。

「ど、どうしてそんな事が言えるんだ？」

言葉を絞り出すように発する金次。

「大した確証はない。俺はジーサードの雰囲気とジーフォースの言葉を元に推理してみただけだ」

惜しげも無く告げる。

この推理も完全じゃないから、大した責任を感じるつもりもない。

「あいつは手強いぞ？ 金次が全力でやっても勝てない可能性だつてある。そこに竜太がいるとなれば鬼に金棒だ。一応竜太は俺の剣の師匠だからな。あいつの強さは折り紙つきだ。近く、ジーサードたちと戦うことになれば竜太とは俺がやる」

「無茶よ！あんたはまだ一命を取り留めただけなのよ!」

「だが、あいつとはお前たちでは戦えない。それこそ全員でかかっても負けるだけだ。あいつは俺と一緒に最前線を駆け、銃を一切使わず剣だけで最後の最後まで戦い抜いたやつだ。多対一になつてもあいつは圧倒してくるぞ」

俺がそう言うのと押し黙る。

すると、レキが一步前に出た。

「梓さん」

「どうした？」

「……死ぬつもりではありませんね」

「当たり前だ。死ぬ直前のあいつの言葉は忘れていない。あの時は自殺紛いな感じで死んでしまったが、こうして、恋人も出来て幸せだからな。この幸せを壊さない為にも死なないさ」

恥ずかしいが顔に出さずに言い切る。

レキは俺の言葉を聞いて少し顔を赤らめた。

「ともかく。今は決戦を待つしかない。休めるうちにお前らも休んでおけよ」

話を終える為に布団を引っ張って掛ける。

金次たちは顔を見合わせて俺に返事を返し部屋を出て行った。

その夜。

ふと目が覚めた俺は、制服が置いてある位置に何やら紙が置いてある。俺は不審に思い、風を使って引き寄せ、中身を見てみる。

『赤霧碧へ』

明日の夜0時。

学園島の南端にある空き地島にて待つ。

東海林竜太』

……果たし状だった。

俺はため息をつき紙を閉じる。

大胆なことをするようになったなあと思いつつ、

少しでも体を治す為に眠りについた。

と言うかいつの間にかベットにはレキがいた。

第六十三弾 決着と別れ

そして、11時50分。

俺は果たし状をレキには見せずに、戦いに行く準備をする。

ブラチナブレット
白銀の弾丸を使って傷を癒していたために少しは良くなった。

だが、ほんの少しだけしか身体を回復させることは能力状無理だったので、全力で動けば必ず傷は開くだろう。

しかし、レキにも言った通り死ぬつもりはない。

だから、出来るだけ力を温存するために、

「クシユーン！」

くしゃみをして亜里沙に変わる。

私はレキの頭を撫でて「行ってくる」と言い、窓を開け放って、風を使って飛んで行く。

「梓、さん？」

その少し聞こえた声は無視をして。

男子寮を経由して、『双華』を取り、「ルウト」も持つて行く。

風を使っているのは胡椒が飛んでしまうので、空き地島付近に降りて、胡椒を振り、「クシュン！」

くしゃみをする。

俺は『双華』を袋から出して背中に、「ルウト」は腰に挿しておく。

丁度午前0時、俺と竜太は同時に姿を見せた。

「遅れずにきたようだね」

「当たり前だ。お前もギリギリだったな」

「それ程でもないさ」

俺と竜太はお互いに皮肉を言い合う。

「どうせ、お前は戦う事を望んでるんだろ？」

「ああ。もう時間がないからね」

……時間？

俺は疑問を抱いたが、竜太が剣を抜いたので合わせて俺も抜く。

そして、ベレッタから銃弾を抜き、弾く。

二人に会話は無いが、お互いに意味を理解して銃弾をじつと見る。くるくると回って回って、

キンツ！

音がした瞬間に両者飛び出す。

そして、同じ形を取り、切る。

「一刀流 太刀！」

俺は縦に、竜太は横に切る。

そして、キンツと甲高い音がして、二人とも下がる。

俺はすぐさま横に一閃し、竜太はしゃがんで避ける。

そして、俺はそのまま回転して下から突き上げ用としている竜太の剣を防ぐ。

さらに不可視インヴィジブルの銃弾で強襲するが、竜太の頬を掠めるだけになる。

避けながら竜太は足を斬ろうとしたので、ジャンプして避けるが、

「一刀流 旋回」

勢いのまま身体を回し切り上げてくる。

俺は、それを剣で受けて少し飛ばされてしまう。

竜太はバク転をしながら後ろに下がり、体制を整え

「一刀流 突貫」

竜太最速の突きを放ってくる。

俺の心臓目掛けて飛んでくる突きを出来るだけ滑らすように逸らすが、腕に刺さる。

「ぐっ！一刀流 三刺！」

反撃するように、手、頭、胸を突くが俺の腕から剣を抜きながら受けて飛び下がり剣を2度振るわれる。

それを剣で受けようとするが、届かない。

その瞬間に縦に2度切られてから気づいた。

「ちっ！旋風かよ、ゴホッ！ゴホッ！」

「一刀流 旋風。やっぱり、赤霧を使わないと弱いね」

剣を担ぎ上げ、俺を見下ろすように竜太は言う。

「君はいつも心を殺し、そして僕らの手柄をいつも一人で搔つ攫つていく。僕らがどう言う思いで戦っていたかも知らずにね」

俺は反論できずにじっと竜太を見つめる。

「みんな君を恨んでる。飛鳥を含めてね。だから僕が殺す。君に最後を看取られた身として、君を恨んでる者として「知ってたさ」……何？」

みんなが俺を恨んでる、そんな物百も承知だ。

しかし、これだけは言わせてもらおう。

「知ってたさ。全員が俺を恨んでることはな。当たり前だろう、一人だけ少しでも違う扱いを受けていれば。俺だって怒るだろう」

しかし、あいつらは違った。

「飛鳥も相太も新太も創気も智史も健吾も優馬も幸平も浩志も太一も修平も賢治も、朝雪、楓、瑞樹、エイラ、ライト、レベツカ、エリザ、セレナ、リリイ。こいつらを含めてそれでも付いてきてくれた。もちろん、お前も含めてな」

「お前や飛鳥に言われた、『死なないでくれ』と。その約束は守れなかった。みんなを守ると言う約束も守れなかった。だからこそ、ここで約束を破る訳には行かない」

レキも、アリアもキンジも理子も。

「お前が本物か、中身の違う偽物かは分からない。だが、レキや仲間たちの為にも、次こそは、約束を破る訳にはいかないんだよ！お前の俺に残した言葉が真実かも分からない。だけど！それでも、あの時の言葉を、あいつの想いを踏みにじらせてたまるかあああ!!!」

胸の内の言葉を吐き出して、力いっぱい「ルウト」を握る。そして、上に掲げる。さらに、言葉を紡ぐ。

『赤霧の名の下に』

力を持って力を示せ』

俺が言葉を紡ぐと風が起きた。

白かった目が赤に染まり、剣が赤く輝く。

そして、剣先を竜太に向けて告げる。

「行くぞ、竜太。これが二段階目だ」

その言葉と同時に走り出す。

竜太も剣を中段に構える。

俺は剣を後ろに下げ、回転する勢いを使った剣を振るう。

「くっ！」

竜太はそれを受けるが、勢いに押されて少し下がる。

俺は追撃するように走って、目の前でしゃがみ、

「一刀流 星屑」

下から何度も突き上げる。

竜太は剣でいなし躲そおうとするが、腕や足に裂傷が出来る。

竜太も同様にしやがみながら俺の剣を払い上げる。

そして、剣を横から上へ、そして逆に持つて行く。

「二刀流奥義 戦火闘乱！」

米印を描くように剣を振るつてくる。

「梓さん！」

その時に声が聞こえた。

自分の大切な人の声。

そして、後ろに背負っていた『双華』を抜き、防ぐ。

「おおおおおおお!!」

防ぎ、竜太の剣を押し退けて、後ろに下がり、雄叫びを上げ、

「二刀流奥義！」 イクリップス 日蝕！」

戦火闘乱の二倍、斬りはらい、回転しながら切り裂いて、蹴りを加えながら、最後に

両剣を振り下ろす。

「ぐがっ、ガハッ！」

イクリップス 日蝕を受けて、前のめりに竜太は倒れる。

俺は剣を地面に挿しながら倒れないように支える。

「梓さん！」

レキもこちらに駆けつけて支えてくれる。

「レキ、どうして、ここに？」

「梓さんが捨てたと思われる、果たし状を見ました」

「そう、か」

「流石、やっぱり亜紀斗は強い、ね」

亜紀斗、その言葉に思考が停止する。

「はっ？な、なんでお前が」

「僕がつけた名前だよ？忘れる訳、ないじゃない」

その言葉を聞いて、涙が出てくる。

「どうして！どうして何も、言わなかった!?!」

「君の、本当の想いを、聞きたくてね。こうして、戦う道を、選んだのさ」

俺はその事実に思いっきり手を握り、地面に叩きつける。

「ま、また、お前が死ぬのを！見なきゃいけないのか！」

「だから、ありがとうって、言いたかった」

「はあ!?!」

「君は、最初から、僕らの先頭を歩いてくれた。心も、涙も殺し、ただ、生き残る為に、

僕らを導いてくれた」

「確かに、皆が恨んでるのも、事実だった。でも、それ以上に、こうして戦ってくれたのが、一番僕たちは嬉しかったよ」

「…でも、だが俺はお前たちを助けられなかった！何十人も死んだ！俺が、俺が弱かったから死んだんだ！」

「弱かったかもしれない。助けられなかったかもしれない。でも、僕と飛鳥は知ってたよ。1戦争が終わるたびに、死んだ仲間の墓を作り、泣きながら謝っているのを」

「……！」

「だから、信じた。だから、僕と飛鳥も、みんなも、君が幸せで、報われるように、声をかけた。いや、声をかけることしが出来なかった」

「僕は、君が羨ましかった。君の強さ、たくましさに、嫉妬にも似た感情があったよ。だから、常に君の隣に立ち、最後まで、君に看取られて、嬉しかった。……ねえ、亜紀斗」

「何だ、？」

「神様に、頼んで見て良かった。僕は、本当ならもつと早く死ぬ運命、だったんだ。けど、君と言う存在が、僕を救ってくれた。友達でいられて、本当に良かった」

「また、お前に、助けられて……。俺も、俺だって！お前に救われた！確かに不運だったかもしれないけど！お前と、出会えて、本当に良かった！」

「ははっ、その、言葉だけで、充分だよ」

言葉を交わしていくたびに、竜太の足が、手が消えていく。

「ねえ、亜紀斗。もし、僕が生まれ変わったら、また、友達で、いてくれるかい？」

「ああ、ああ！当たり前だろうが！俺とお前は親友だろ！」

「ああ、ありがとう。ま、前に、言えなかったね、またね、亜紀斗」

「ああ、またな、竜太」

俺は涙を流しながらも、出来るだけ笑顔を見せて見送った。

居なくなった後に、落ちて居たペンダントを拾い上げて、俺は、倒れるまで泣いた。

第六十四弾 潜入捜査

竜太と戦つてから一週間が過ぎた。

あのまま、倒れて病院に運ばれていつもの部屋に移動した。三日間は昏睡状態で眠つたまま。

そこからは療養生活、ブラチナブレッド白銀の弾丸を使い、多少傷は癒えた。

一時間くらいなら動けるくらい。

もう少しで、三年次になる。

ついこの間、キンジから編入許可が受理されたらしい。

あいつは、多分馴染めないと思うけどな。

と、そこに高天原先生が来た。

「風切君、具合はどうですか？」

「割と良くなつてます。何かご用で？」

「はい、校長先生がお呼びです」

「……怪我人の俺にですか？」

「とりあえず、学校の校長室へお願いします。レキさんも」

そう言つて目線をレキにも向ける。

レキはこちらを見ていたので頷く。

「分かりました。梓さんは私が連れて行きます」

「はい。急がなくていいので、車椅子を借りてあります。それで下の私の車まで来てください」

そう言い踵を返して部屋を出て行く。

俺は痛む身体を無理矢理起こす。

そして、風を使いながら車椅子に腰を下ろす。

ガタガタと揺られながらエレベーターを使い、降りて先生の車に向かう。

そして、色々と助けられながら車に乗って運ばれる。

こうして武偵高に到着して、車椅子を押されて行く。

「ああ、またあいつ大怪我したのか」みたいな目で見られるのは慣れた。別に大怪我したくてしてるわけじゃないんだけども。

そんなこんなで校長室へ到着。

「失礼します。高天原です。風切君とレキさんを連れて来ました」

「ご苦勞様でした。では、少し外で待っていてください、高天原先生」
「分かりました」

そう校長先生の言葉を聞いて出て行く高天原先生。

校長先生、緑川尊はこちらを見てニツコリと笑っている。

こう見れば優しそうなおじいちゃんだが、侮るなかれ。

「見える透明人間」とも言われる人物で、99・9%の人間は「あれ？校長ってどんな人だっけ？」となる。

まあ、俺はこういう人種が一番危険であることは知っている。

「最近災難が多いみたいですね、風切君」

「いえ、自分が弱いから危険な状態に陥るんです。もっと、精進しないと」

「ははっ、君は向上心がとても強いようだ。つと、長時間座らせておくのも怪我に悪いので早速、話に入らせてもらいます」

「はい」

「君には、潜入捜査をしてもらいたいのです」

「潜入捜査？」

「それはこの人が怪我人と知ってのことですね」

校長の言葉に少し怒りを露わにするレキ。

俺はレキを宥めながら話の続きを促す。

「この潜入捜査は、武偵高にいるよりは安全ですよ。遠山君も一緒ですから」

「それは嘘ですね」

「……何故そう思うのですか？」

「キンジは一般高に編入、……ってそういうことか」

「何がでしょう」

「あなたがキンジの編入許可出したのは、わざわざ呼び出して言う手間が省けたからだ。

編入を認めるとか言っただけで俺の調べたことを現地を感じてもらったため、そう言うことで

しょうっ？」

「……ちつ、これだから勘の鋭いガキは」

俺が持論を展開し、論破すると舌打ちをして毒を吐いた。

「任務には行きます。あなたの言う通り少しは楽になるでしょうから。で、潜入捜査の

内容は？」

「……最近、日本に中国の組織が違法に取り引きをしているらしいのです。君たちにはそれについての捜査と、出来れば、その組織の一人でも捕まえてくだされば幸いですね。任務開始日時は三年になると同時。遠山君と同様に編入生として行ってもらいます」

「分かりました。……そういえば、潜入捜査をするにあたってその高校に俺たちの写真とか送りました？」

「いえ、遠山君は送りましたが君たちのは何も。その高校には、その高校辺りで危険なことがあるかもしれないから武偵を編入という形で捜査に行かせて危険を排除してもらう、そういう風に言っております」

「そうですか。もちろん、このことはキンジには内緒でしょう？」

「はい。遠山君は優秀ではありますが、ムラがあるので潜入させるよりは普通に一般高に行ってもらったほうが実力を発揮させてくれるでしょう」

「分かりました。では、失礼します」

頭だけを下げ、校長室を出る。

高天原先生が居て送ってくれるらしいが拒否をする。

……久々に自由に動きたい。身体は動かないけど。

「あ、そうだ。高天原先生」

「はい？何でしょう」

「緑川尊校長先生に、レキが少し粗相を犯してすみませんと言ってもらえますか？優し
そうなおおじいちゃんとはいえ

少し苛立っておられましたから」

では、そう言つて車椅子をレキに押ししてもらおう。

その帰り道に潜入捜査をするにあたつて少し大事なことを聞く。

「そういえば、レキは名字がないだろ。どうするつもりだ？」

「風切でいいのでは？」

「それなら、双子つてことになるんだが……。こうするか」

レキが頭にハテナを浮かべる中で、白銀の弾丸を使って髪の色と瞳の色を瑠瑠色に変
える。

「これなら、双子でも問題はないな」

「……そうですね」

少し嬉しそうにするレキ。

……最近、表情が柔らかくなったなあ。

最終的に流石に一日中、髪の色と瞳の色を変え続けることは出来なかった。